

仙台教会の歴史シリーズ

No.1~26 & 略史年表

教会組織70周年記念

1955~2025



日本バプテスト仙台基督教会

Japan Baptist Sendai Church of Christ since 1955

目 次

- 01 グラント宣教師夫妻来日の背景 1945 . . . 1
- 02 ワース・グラント宣教師の生涯 1918～2005 . . . 5
- 03 仙台開拓伝道のキックオフイベント 1952 . . . 9
- 04 初代牧師のことをもっと知りたい 1953 . . . 13
- 05 すべてのわざには時がある－教会用地の入手 1953 . . . 17
- 06 最初のバプテスマ 1953 . . . 21
- 07 大槻國彦の“出会いと献身のドラマ” 1953 . . . 25
- 08 開拓伝道時代の特別伝道集会 1952～1954 . . . 29
- 09 仙台バプテスト教会幼稚園の開設 1954 . . . 33
- 10 関谷定夫牧師を迎えて 1954 . . . 37
- 11 真白い十字架のもと献堂式 1954 . . . 41
- 12 北松竹の焼け跡に建つ教会 1954 . . . 45
- 13 日本バプテスト仙台基督教会の誕生 1955 . . . 49
- 14 仙台教会の週報の歴史 . . . 53
- 15 バプテストとなっていく歴史 . . . 57
- 16 新たな扉が開かれる－吉岡伝道所発足 1957 . . . 61
- 17 仙台教会の DNA－大沼上牧師就任 1957 . . . 65
- 18 命のパンを食す－石井はるをのバプテスマ 1958 . . . 69
- 19 教師兼協力者－佐藤ミツとは何者か (1) . . . 73
- 20 教師兼協力者－佐藤ミツとは何者か (2) . . . 77
- 21 指が触れた場所が仙台－ポートルイト宣教師夫妻来日 1958 . . . 81
- 22 われらバプテスト . . . 85
- 23 山形伝道所の母教会となる 1958 . . . 89
- 24 クリスマスカードから抜け出た情景－南光台伝道所開設 1966 . . . 93
- 25 福音のためならどんなことでも－仙台北伝道所開設 1980 . . . 97
- 26 バプテスト主義と信仰的忍耐－大富伝道所開設 1992 . . . 101
- 日本バプテスト仙台基督教会 70 年略史年表 . . . 107
- おわりに 111

グラント宣教師夫妻来日の背景 1945

はじめに

仙台に初めて設立されたプロテスタント教会は、仙台浸礼教会（現在の日本キリスト教団仙台ホサナ教会）です。1880年10月（明治13）のことで、設立場所は二日町の清野供之進宅でした。これはアメリカン・バプテストの宣教師 T.P.ポートの働きによるものです¹。彼は横浜在住で、東北巡回伝道の途中に仙台に立ち寄り伝道し、教会を設立したのですが、その後バプテストや他の教派の宣教師が次々と来仙し、この地に定住して地に足を付けた活動を開始します。

明治の時期だけに限っても、仙台に定住しキリスト教を伝えるために活動した宣教師の数は、アメリカン・バプテストで26名おり、他教派を含めれば約160名の宣教師たちが、仙台に在住し、教会や学校や地域での働きに献身し、福音の種を蒔く働きを行っていました²。そしてその種はやがて芽を出し、成長し、多くの実を实らせましたが、同様のことが日本の各地で起こっていたのです。

時が流れ昭和の時代になると、満州事変（1931年・昭和6）、盧溝橋事件（1937年・昭和12）、真珠湾攻撃（1941年・昭和16）と大きな時局の変化が起こり、宣教師たちはこよなく愛した日本に別れを告げ、誠心誠意主に仕え身を捧げてきた日本から去らざるを得ない状況にだんだんなっていきます。それでもなお日本に留まり使命を果たそうとした宣教師もいましたが、開戦後すぐに敵性外国人として連行・抑留されてしまいます。これにより日本で活動する宣教師は皆無となります。なお、宣教師はじめ抑留された外国人たちの帰国は、1942~1943年（昭和17~18）に日米間、日英間で計三度行われた「交換船」の実施を待たなければなりませんでした。

1. 神道指令と宣教師派遣要請

敗戦後の1945年（昭和20）12月15日に、二つの出来事が起こりました。

一つは日本を占領した連合軍総司令部（GHQ）から、日本政府に対し神道指令が発せられたことです（「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」³）。明治維新後、神社神道を皇室神道のもとに再編

成して作られたいわゆる国家神道は、天皇制支配や国家主義、軍国主義と結び付き、その思想的支柱となりました。信教の自由は国民から奪われ、国民総国家神道信者となるよう教育を通して強制されました。このシステムが GHQ の神道指令により解体されます（但しこのシステムを支持し、その有益性を政治的に利用したいと考える勢力は、今日においてもしっかりと生き続けていることを、私たちは忘れてはなりません）。

この日に起こったもう一つの出来事は、GHQ 最高司令官ダグラス・マッカーサーが、アメリカ南部バプテスト教会会議議長宛に手紙を送ったことです⁴。「日本人の精神生活は戦争で空白になっているから、キリスト教を日本人に布教するのは、今が絶好の機会である」と日本宣教を強く促す内容の手紙です。マッカーサーにとっての重大な課題の一つは日本の民主化でした。自らも聖公会の熱心な信徒であるマッカーサーは、民主主義の基盤はキリスト教にあると確信していました。そのためにアメリカの諸教派の教会を激励し、多くの宣教師を日本に派遣させ、彼らに対して GHQ ができる限りの便宜を図り、キリスト教が日本に広く宣教されることを支援したのです。その効果は次第に現れ、日本に派遣された宣教師の数は 1947 年（昭和 22）には 315 名、1948 年（昭和 23）には 707 名、1949 年（昭和 24）には 980 名と増え、1951 年（昭和 26）までに来日した宣教師は、合計 2,500 名に及んだと言われています⁵。

GHQ 最高司令官がキリスト教に対してばかり特別に肩入れし支援することは、信教の自由の観点から問題があるのではないかという声は、内部からも挙がりました。しかしマッカーサーは、特定の宗教や信仰が弾圧されているのでない限り、信教の自由は保たれているのであり、占領軍がキリスト教の布教に対して色々な援助を与えるのは自由だ、との自説を曲げませんでした⁶。

2. グラント宣教師夫妻の来日

1950 年（昭和 25）に来日し 2 年間の語学研修を経て仙台に着任（1952 年・昭和 27）、開拓伝道を行い、仙台教会設立（1955 年・昭和 30）を果たしたワース・グラント宣教師夫妻も、マッカーサーの呼びかけに応えた宣教師でした。「パーム・ビーチ・ポスト紙」の 2005 年（平成 17）12 月 21 日のオンライン版には、ワース・グラント師の死亡広告記事⁷が掲載されていますが、その中に次のような一文があります。

Responding to General MacArthur's call for "one thousand missionaries", Rev. Grant sailed with his family to Yokohama in 1950 as part of the largest group of U.S. civilians to return to Japan following World War II.

(1,000 人の宣教師の派遣を求めるマッカーサー総司令官の要請に応じ、グラント師は 1950 年(昭和 25)に家族と共に海路横浜に向かいました。第二次世界大戦後、日本に戻る最も大人数のアメリカ市民の一員としてでした)。

このように歴史を振り返ると、信教の自由に関するマッカーサーのかなり強引な理解の仕方の影響と恩恵が、仙台教会誕生の背景にはあったこととなります。但し、他の宗教を弾圧していない限り、キリスト教を優遇しても信教の自由には反していないという論法は、あまりに手前味噌な解釈で、今日では共感を得ることは難しいでしょう。

国家は強大な力を持ちます。教育を利用し国民を見事に国家神道信者に仕立て上げた実績もあります。国家神道ではなくキリスト教の信者にするのであれば赦されるという問題でも勿論ありません。国家はどのような宗教であれ、それを利用して人心を統一する誘惑に負けて、その絶大な権力を行使してはいけません。それは私たち一人一人が持つ基本的人権を踏みにじることになるからです。

教会は信教の自由をはじめ、人間の基本的人権を踏みにじろうとするいかなる企てに対しても「否」を唱え、その間違いを正し、それに対抗して立ち向かう使命を与えられていることを、私たちは忘れてはならないのです。(文責：小林孝男)

コラム

仙台教会歴史シリーズについて

仙台教会の教会組織 70 周年を前に、個人的な関心から仙台教会の歴史を週報や他の資料を用いて振り返り、年表の元となる「原表」を作成する作業を、この二、三年行ってきました。その作業の中で浮かび上がってきた歴史的な事柄や印象に残ったことを、その都度短い文章にまとめたものが「仙台教会歴史シリーズ (No.1~26)」で、いわば原表作成作業の副産物です。

この度、執事会の判断で教会の皆様にご覧いただく機会を得ました。大変光栄ですが、内容的には私の認識不足から不正確な点や間違いも含まれているかもしれません。その際は遠慮なくご指摘いただき、より正確な仙台教会の歴史理解に近づけたらと願っています。よろしくお願いたします。

2024 年 9 月 1 日 小林孝男

¹ 大島良雄『バプテストの東北伝道 1880-1940』(ダビデ社、2005)18 頁

² 野村俊一編『デフォレスト館建造物調査報告書』(東北学院、2014)47 頁

³ 資料(1945/12/15_神道指令)

⁴ 孫崎亨『戦後史の正体 1945—2012』(創元社、2012)72~73 頁

⁵ 袖井林次郎『マッカーサーの二千年』(中央公論社、1974)221 頁

⁶ 同上 222 頁

⁷ <https://www.legacy.com/us/obituaries/palmbeachpost/name/worth-grant-obituary?id=26343027> (閲覧日: 2022/5/31)

ワース・グラント宣教師の生涯 1918~2005

はじめに

ワース・グラント宣教師¹の日本での働きに関しては、ご自身の著書²から多くのことを知ることができます。またこの著書は仙台教会の初期の歴史を知る手掛かりとしても、大変貴重で有益な資料となります。ただ、ご本人のアメリカでの経歴は詳しくは書かれていないため、そのあたりのことをもう少し調べようと思ったのですが、これがひと苦勞でした。やっとオンライン上で見つけたのが、古い「ミッショナリー・アルバム」(写真参照)の1ページで、グラント夫妻の顔写真とお二人の経歴が極小文字で記録されているものです。もう一つは、「パームビーチポスト」³という地方紙に掲載されたグラント師の死亡広告記事です。これらの資料をもとに、グラント宣教師の経歴と生涯を簡単にまとめておきます。

1. ワース・グラント師の経歴

ワース・グラント師は1918年(大正7)10月26日、アメリカ合衆国南東部、ノースカロライナ州ハイポイントに生まれます(地図参照)。ファーマン大学を卒業後(1941年)、ケンタッキー州ルイスビルにある南部バプテスト神学校に学び修士の学位を収めます(1944年)。グラント師はスポーツ好きでフットボール、ゴルフ、陸上を得意としていました。ゴルフに関してはホールインワンを2回経験し、また学生時代にはノースカロライナ州の大会において、陸上競技の円盤投げで3位を獲得しています⁴。

牧会の経歴も多様で、ノースカロライナ州トーマスビルのリバティー教会牧師(1941~1942年)、ケンタッキー州ルイスビルのオプティミスト・ボーイズクラブ主事(1942~1943年)、ノースカロライナ州キンストンのバプテスト孤児院牧師(1944~1945年)、アメリカ海軍チャプレン(1945~1946年)、ノースカロライナ州のウェルドン教会牧師(1946~1950年)などです。海軍チャプレン時代、1946年(昭和21)1月に短期間の日本滞在を経験しています⁵。主は既にグラント師の心に召命の種をお播きになられておられ、この時の短期間の日本訪問も主のご計画の一部だったのでしょう。

2. 来日とその働き

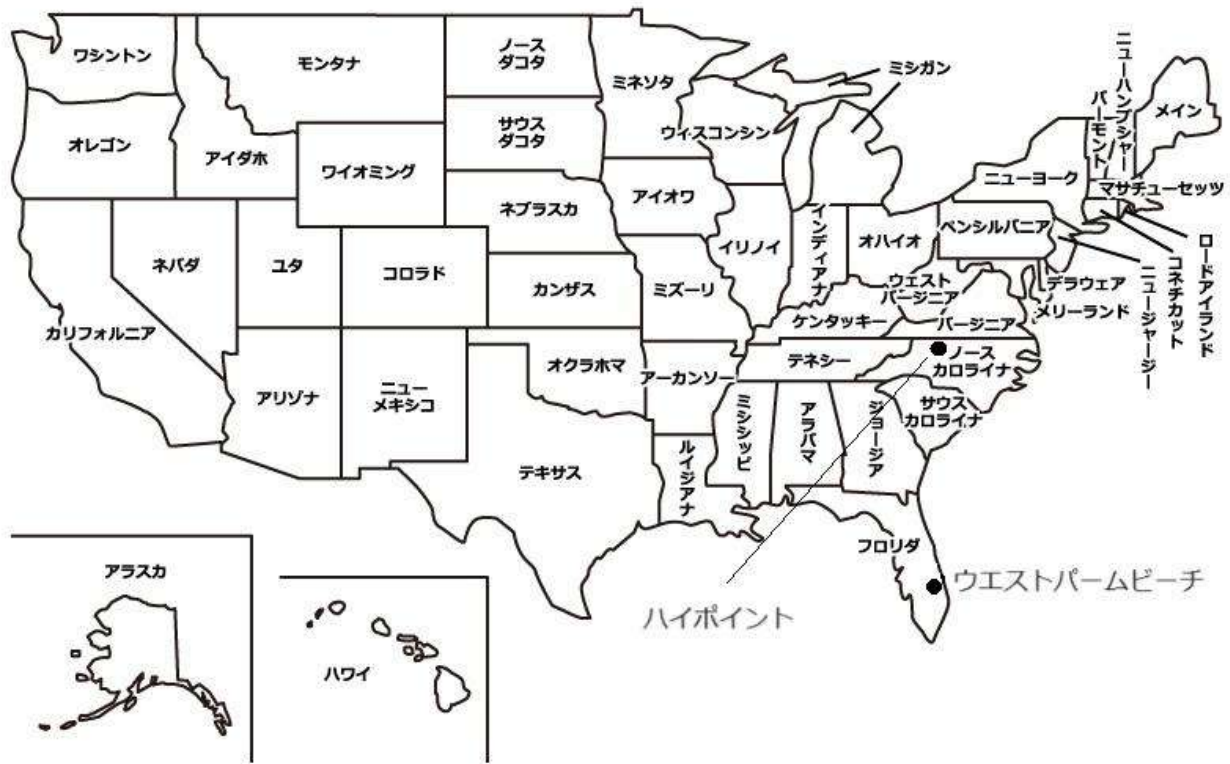
宣教師としての献身はグラント師自身への招きであると同時に、妻キャサリン⁶に対する招きでもなければなりませんでしたが、これに関しては全く問題はなく、「妻は私以前に神に招かれていたと思えるほど、私と意見の相違がなかった」と師自身が語っています⁷。そしてついに1950年（昭和25）3月22日、南部バプテスト連盟外国伝道局から、日本への宣教師として二人は正式に任命されることとなります⁸。

1950年（昭和25）8月23日の来日時⁹、ワース・グラント師は31才、妻キャサリン29才、長女ドナ6~7才¹⁰、そして次女アンジェラは3~4才でした（三女デボラ、四女キティーはまだ生まれていません）。最初の2年間は難解な日本語の学習に時間を費やしますが、記録では逗子教会の牧師の肩書も与えられていたようです（1950~1952年）。その後宣教師として、仙台教会（1952~1959年）、浦和教会（1959~1961年）で働き、ヨルダン社¹¹の副責任者及び女子大学での教員としての役割を果たします（1961~1968年?）。そして1968年（昭和43）から3年間、渋谷伝道所の牧師として働きましたが、宣教師としての先の17年間の経験は、牧師としての最後の3年間のためであったようなものだ、とグラント師は回想しています¹²。

米国に帰国後ワシントン D.C.でウィクリフ聖書翻訳協会において働き、テンプル・バプテスト教会牧師を最後に引退しますが、その後香港に日本語教会を設立するため臨時宣教師として派遣されています¹³。こうして主のご用のために、グラント師の人生は豊かに用いられました。

2005年（平成17）12月18日、フロリダ州ウエストパームビーチの自宅で、師は安らかに天に召されました（写真参照）。87年の生涯でした。なおこの日は、仙台教会において臨時総会が開かれ、新会堂建築の設計業者を決定した日です¹⁴。ワース・グラント宣教師は、ご自身が信仰と情熱をもってその基礎を築き、そしてまたその初期の歩みを支え導いた日本バプテスト仙台基督教会が、新しい時代に向かって新会堂建築を具体化させたことをしっかりと見届け、安心して天国に旅立たれたのでしょう。

（文責：小林孝男）



MISSIONARY ALBUM (922.6/508.3)

Graham, Hilary Clifford



b. New York, Jan. 14, 1911; B.S., 1933; M.A., 1935; M.F.A., 1940; M.S.W., 1941; M.D., 1942. Missions: U.S.A. 1933-1937; Cuba, 1937-1940; GUYANA, 1940-1958; Japan, 1958-1971; U.S.A., 1971-1977. Churches: Union Church, New York, 1933-1937; Union Church, Havana, 1937-1940; Union Church, Georgetown, Guyana, 1940-1958; Union Church, Tokyo, 1958-1971; Union Church, New York, 1971-1977.

GUYANA

Graham, Heien Joyce Ashford (Mrs. H. Clifford)

b. East State House Parish, La., Jan. 25, 1915. M.S.W., 1937. Missions: U.S.A., 1937-1940; Guyana, 1940-1958; Japan, 1958-1971; U.S.A., 1971-1977. Churches: Union Church, New York, 1937-1940; Union Church, Georgetown, Guyana, 1940-1958; Union Church, Tokyo, 1958-1971; Union Church, New York, 1971-1977.

Graham, Thomas Wayne



b. Tampa, Fla., Sept. 15, 1915. B.S., 1937; M.A., 1938; M.F.A., 1940. Missions: U.S.A., 1937-1940; Japan, 1940-1958; GUYANA, 1958-1971; U.S.A., 1971-1977. Churches: Union Church, Jacksonville, Fla., 1937-1940; Union Church, Tokyo, 1940-1958; Union Church, Georgetown, Guyana, 1958-1971; Union Church, New York, 1971-1977.

JAPAN

Graham, Minnie Dot Esslerlin (Mrs. Thomas W.)

b. Hopewell, Va., Jan. 18, 1914. M.S.W., 1937. Missions: U.S.A., 1937-1940; Japan, 1940-1958; GUYANA, 1958-1971; U.S.A., 1971-1977. Churches: Union Church, New York, 1937-1940; Union Church, Tokyo, 1940-1958; Union Church, Georgetown, Guyana, 1958-1971; Union Church, New York, 1971-1977.

Grant, Richard Blanchard



b. San Antonio, Tex., Sept. 15, 1919. B.S., 1941; M.A., 1942; M.F.A., 1944. Missions: U.S.A., 1941-1944; BRAZIL, 1944-1958; GUYANA, 1958-1971; U.S.A., 1971-1977. Churches: Union Church, San Antonio, Tex., 1941-1944; Union Church, Georgetown, Guyana, 1944-1958; Union Church, Tokyo, 1958-1971; Union Church, New York, 1971-1977.

BRAZIL

Grant, Leo Marie Ryden (Mrs. Richard B.)

b. Georgetown, Tex., Aug. 8, 1914. M.S.W., 1937. Missions: U.S.A., 1937-1940; Brazil, 1940-1958; Guyana, 1958-1971; U.S.A., 1971-1977. Churches: Union Church, Georgetown, Tex., 1937-1940; Union Church, Georgetown, Guyana, 1940-1958; Union Church, Tokyo, 1958-1971; Union Church, New York, 1971-1977.

Grant, Worth Collins



b. High Point, N.C., Dec. 10, 1918. B.S., 1940; M.A., 1941; M.F.A., 1942. Missions: U.S.A., 1940-1942; GUYANA, 1942-1958; JAPAN, 1958-1971; U.S.A., 1971-1977. Churches: Union Church, High Point, N.C., 1940-1942; Union Church, Georgetown, Guyana, 1942-1958; Union Church, Tokyo, 1958-1971; Union Church, New York, 1971-1977.

JAPAN

Grant, Kathryn Stephens (Mrs. Worth C.)

b. Altoona, N.Y., Aug. 10, 1919. B.S., 1941; M.A., 1942; M.F.A., 1944. Missions: U.S.A., 1941-1942; Guyana, 1942-1958; Japan, 1958-1971; U.S.A., 1971-1977. Churches: Union Church, Altoona, N.Y., 1941-1942; Union Church, Georgetown, Guyana, 1942-1958; Union Church, Tokyo, 1958-1971; Union Church, New York, 1971-1977.



ミッションナリー・アルバム

グラント師の墓碑(ウエストパームビーチ)

¹ Worth Collins Grant 1918/10/26 生まれ、1927/9 受浸、2005/12/18 召天

² 日本バプテスト仙台基督教会 50 周年記念事業として、グラント宣教師の著書 *A Work Begun* (『主の息吹の中で』) 及び *Japan with Love* (『ワース・C・グラント師の日本観』) を翻訳、合本版として仙台教会が 2004 年に出版。どういわけか原書には発行年がかかれていない。内容から判断すると、前者は 1965 年以降、後者は 1976 年以降の発行であることは確かである。翻訳者は当時当教会の会員であった大谷淳久さん。

³ 資料(2005/12/21_FuneralNotice_PalmBeachPost)

⁴ W.C.グラント『ワース・C・グラント師の日本観』(日本バプテスト仙台基督教会、2004) 305 頁。週報(2003/06/01)の牧会通信で渡邊真人さんもグラント師について紹介している。

⁵ 同上 132~136 頁

W.C.グラント『主の息吹の中で』(日本バプテスト仙台基督教会、2004)、52 頁

⁶ Kathryn Stephens Grant 1920/8/18 生まれ、1929 年受浸(月日は不明)、2022/1/12 召天
<https://www.palmbeachpost.com/obituaries/pwpb0322445> (閲覧日:2022/5/31)

⁷ 『主の息吹の中で』12 頁

⁸ 同上 10 頁

⁹ 『ワース・C・グラント師の日本観』140 頁

¹⁰ 資料(2005/12/21_FuneralNotice_PalmBeachPost) 家族が書いたグラント師の死亡広告記事の中に *His eldest daughter Donna passed away in April of this year.* とある。長女ドナは 2005 年 4 月に両親に先立ち逝去。1943 年 8 月 4 日生まれなので享年は 61 才。

¹¹ 日本バプテスト連盟 50 年史編纂委員会『日本バプテスト連盟 50 年史』(日本バプテスト連盟、1997) 379~384 頁

¹² 『ワース・C・グラント師の日本観』187 頁

¹³ 週報(1995/06/11)

¹⁴ 週報(2005/12/18)

仙台教会の歴史シリーズ その3
仙台開拓伝道のキックオフイベント 1952

はじめに

日本で宣教を開始したバプテスト派の最初の宣教師は、アメリカン・バプテストの N.ブラウン夫妻と G.ゴープル夫妻で、1873年（明治6）のことでした。遅れること16年、1889年（明治22）に南部バプテストの宣教師として J.W.マッコラム夫妻と J.A.ブランソン夫妻が来日します。アメリカン・バプテストと南部バプテストは、奴隷制度に対する立場の違いから袂を分かつことで成立した教派ですが、日本における宣教の現場では協調関係を大切にし、宣教活動の受け持ち地域についても協定をし、南部バプテストは主に九州を伝道地域とすることになります¹。

やがて昭和の時代となり次第に国家が戦争への道を歩み始めるとともに、全体主義的な政策が強化され、宗教団体の管理・統制のための法律が作られ、国内のプロテスタント各派は合同を強いられます。結果として「日本基督教団」が成立し、プロテスタント各派は全てその中に統合されます（1941年・昭和16）。

敗戦後の早い時期に、南部バプテスト系の諸教会は日本基督教団から離脱し、「日本バプテスト連盟」を設立します（1947年・昭和22）。アメリカン・バプテスト系の諸教会は日本基督教団に留まるグループや、離脱して新たに「日本バプテスト同盟」を結成（1958年・昭和33）するグループに分かれました。なお、南部バプテストとアメリカン・バプテストによる宣教担当地域に関する協定は自然消滅しますが、戦前からの両派の協調関係は戦後も保たれていました。

1. アメリカン・バプテストのお世話になる

仙台教会の歴史を記録した年表は何種類²かありますが、グラント宣教師一家が仙台に引っ越して来られた時期を、いずれも1952年（昭和27）の「秋」としています。もう少し時期を絞り込むとするなら、次のような理由から「11月」と考えていいのではないのでしょうか。

グラント宣教師一家は12月15日に、堤通98番地にロティー・ムーン献金で新築された自分たちの宣教師館（地図参照）に入居します。実はその前の1カ月間は、尚綱学院で教鞭を執っていた二名のアメリカン・バプテストの宣教師たちのお世話

になり、彼女たちが生活している宣教師館に泊めてもらっています³。その宣教師館は尚絅学院八幡校地に戦後新築されたものです⁴。間取りは不明ですが、恐らくこの宣教師館のゲストルームにグラント一家 4 名は滞在させてもらったのでしょう。アメリカン・バプテストの宣教師館にお世話になる以前に、仙台の別な場所に一家が一旦引っ越して来ていた可能性も理屈としては成り立ちますが、しかし全く現実的ではありません。ですから、一家 4 人は 11 月に東京から仙台に引っ越して来られたと判断するのが妥当でしょう。

2. 11 月の特別伝道集会にむけて

もちろんグラント師自身は、11 月以前に何回も来仙し開拓伝道の下準備の活動を行う必要がありました。

一つは 11 月に計画した特別伝道集会の準備です。期日は 11 月 7～11 日（金～火）とする資料⁵や、3～5 日（月～水）とする資料⁶があり残念ながら確定できませんが、11 月の初旬から中旬に、3 日間ないし 5 日間の特別伝道集会を、仙台市公会堂の会議室を借りて開催しています⁷。会場の借用手続きは何カ月か前に行われるでしょうし、同僚の宣教師や牧師を講師として招き、さらに連盟事務所職員に来仙してもらい映画（「王の王」という伝道映画）⁸を上映するためには、事前にこまごまとした調整や打ち合わせも必要です。また集会案内のチラシを作成・配布し、あるいは街宣車を走らせるなどして広く集会開催を知ってもらい、多くの方に集まってもらうためには、最低でも開催 1 ヶ月前には足を使った地道な取り組みが行われている必要があったでしょう。

3. 仙台開拓伝道のキックオフイベント

二つ目として、グラント宣教師一家が 1 ヶ月という長期間にわたりアメリカン・バプテストの宣教師館に滞在させてもらうためには、当然のことですがその交渉や依頼や打ち合わせを、時間的に十分余裕をもって丁寧に行う必要があったでしょう。

更にもっと早い時期から取り組まなければならなかったのは、自分たち用の宣教師館の用地探しです。これはかなり難航し 6 カ月以上かかっています⁹。土地の購入後は、建築業者の選定や、業者が決まれば建築の具体的な打ち合わせも不可欠です。最も重要なこととして、日曜日の礼拝場所を確保することも必要でした。これに関

しては、幸いにも仙台 YMCA をお借りすることができました¹⁰。こうした諸々の課題に的確に対処するため、グラント師は 11 月の何カ月も前から幾度か来仙し、何日間も滞在し、仙台での開拓伝道をスタートさせるために、孤軍奮闘して下準備に当たっていたと考えられます。

そしてグラント師が企画し準備した 11 月の特別伝道集会に合わせて、グラント宣教師一家がいよいよ仙台へ引越してきます。つまりこの特別伝道集会から、グラント宣教師夫妻による仙台における福音宣教の働きが本格的に開始されたのです。この特別伝道集会はお二人にとっては、仙台での開拓伝道のいわば「キックオフイベント」¹¹だったと言えるでしょう。

(文責：小林孝男)



「大仙台市地図(昭和 27 年)」より

赤線は市電路線。宣教師館建築時には教会の場所は未定であった。

-
- ¹ 2024年現在、日本バプテスト連盟に加盟する教会・伝道所は316あるが、約三分の一が九州地方にあるのは、このような歴史的背景からである。
- ² 「仙台バプテスト伝道所沿革」(1955年初期に作成)、「献堂20年のあゆみ」(1974/11/10発行の『献堂二十周年記念文集』に収録)、「献堂25年のあゆみ」(1979/11/11発行の週報)、「献堂30年のあゆみ」(1984/11/11発行の週報)、「仙台バプテスト教会の沿革」(1995/03/26発行の『献堂四十周年記念誌』に収録)、「仙台バプテスト教会年表」(2015/10/15発行の『60年のあゆみ』に収録)。それぞれを吟味するといずれにも不正確と思える個所がある。特に『60年のあゆみ』収録の年表は、印刷のずれなど問題点が多々ある。
- ³ 尚綱女学院100年史編纂委員会『尚綱女学院100年史』(尚綱女学院、2002)679頁、ロバータ・L・スティブンス『根づいた花』(キリスト新聞社、2003)巻末28~29頁 この二人のアメリカン・バプテスト宣教師とは、アメリカン・バプテスト海外伝道協会(ABFMS)から尚綱学院へ教育宣教師として派遣されていたヴァイダ・ポースト(尚綱在任1949~1961年、高校で英語担当、独身、当時55才)と、ビューラー・マコーイ(尚綱在任1952~1979年、尚綱学院の中学・高校・短大で英語担当、独身、当時37才)を指すと思われる。
なお『主の息吹の中で』18頁に、「二人のアメリカンバプテスト宣教師」と訳されている箇所があるが、American Baptistは教派名なので、ここは「二人のアメリカン・バプテスト宣教師」と訳すべきである。
- ⁴ 『尚綱女学院100年史』419、483頁 落成は1950年(昭和25)、校地整備のため1984年(昭和59)に取り壊されている。
- ⁵ 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革と教会員名簿)
- ⁶ 資料(2020/08/??_國分登氏の証・仙台教会の紀元)
- ⁷ 『ワース・C・グラント師の日本観』297頁、資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革と教会員名簿)、資料(2020/08/??_國分登氏の証・仙台教会の紀元)1頁
- ⁸ 『ワース・C・グラント師の日本観』297頁
- ⁹ 『主の息吹の中で』19頁
- ¹⁰ 『ワース・C・グラント師の日本観』297頁
- ¹¹ 新しいプロジェクトや大型プロジェクトを始める際に、最初に行われるイベント。そのイベントを通してプロジェクトの目標や目的を確認し、メンバーの士気を高める。

初代牧師のことをもっと知りたい 1953

はじめに

堤通に宣教師館ができてから、グラント師は学生へのアプローチの手段として英語で聖書を学ぶ集まりを、またキャサリン夫人はご近所の方にアメリカ風料理を教える「ゴスペル料理教室」を、それぞれ宣教師館で開始します。黙っていても参加者は自然に集まる、というわけにはいきません。近隣の人たちは宣教師館がこの場所に建てられることに強く反対していました。そのような地域の中で参加者を募ることは大変なことですが、とにかく地道に声掛けをしていくしかないのです。キャサリン夫人が料理教室の参加者を求めてご近所を戸別訪問したある日の様子が、グラント師の著書¹の中で次のように紹介されています。

ある日近所を訪問中、キャサリンはある家の前で立ち止まり、日本での習慣通り玄関の扉を開け、「ごめんください」と呼びかけた。返事はなかった。もう一度この挨拶を繰り返したところ、非常に小さな声で「どうぞお入りください」という返事が聞こえた。靴を脱ぎ、彼女は居間へと続く廊下に入った。居間は、日本の家ではしばしばダイニングとしても機能し、夜には寝室として使われることも多い。紙の引き戸を開けると、彼女は明らかに重い病を患った女性が布団の上で寝ているのを発見した。不意を打たれたキャサリンは小声で謝り、道を駆け戻って家に帰り、花と食事を用意して病を患った女性の家へと急いだ。それを部屋に置くと、彼女はまだつたない日本語で手短かに祈った。女性にはなぜ訪問したかを告げ、料理教室や教会の集会に出席するよう招いた。

数日後、美しい着物を着た中年の女性が私たちの玄関に現れた。キャサリンは彼女が最近訪ねた病気の女性だということに気づいた。深々と礼をしながら、彼女はキャサリンに何度も「先日は大変お世話になりました」と礼を言い続けた。家に入り、以下の話しを語った彼女の目からは涙が溢れていた。(後略)

その話しの内容とは、彼女は若い頃にクリスチャンになったのですが、仏教徒の夫と結婚後は、長い間信仰の道からは遠ざかって暮らしていたとのこと。それがキ

ヤサリン夫人の先日の訪問によって、主のもとに立ち返りたいと強く願うようになったというのです。この女性こそが、私たちの敬愛する「お花の先生」こと莊子聡子さん²でした。その後莊子さんはグラント宣教師夫妻の働きを助け、仙台での開拓伝道を始めたばかりのお二人の心強い支えとなったのです。正に「主の山に備えあり」（創世記 22：14、口語訳）です。

1. 初代牧師は長崎直得

前回述べましたが、グラント宣教師夫妻が仙台で開拓伝道を本格的に開始したのは、1952年（昭和27）11月からです。そして数カ月たった1953年（昭和28）2月に、長崎直得牧師が与えられます³。日本人牧師が備えられ、グラント宣教師夫妻にとってはさぞかし心強かったことでしょう。仙台教会はまだ組織されていませんので、「仙台バプテスト伝道所初代牧師」ということになります。仙台での最初期の開拓伝道を担ってくださった牧会者として、記憶にとどめるべきお方であることは確かです。

ところが長崎牧師に関しては、あまり詳しい情報が教会には残されていません。1950年（昭和25）に日本バプテスト呉キリスト教会に着任し牧会に励み、その後「1953年（昭和28）新生運動を機に東北地方の開拓伝道の拠点として仙台が決定し、長崎牧師は故郷伝道として仙台に出発」⁴したとのこと。となると出身は東北ということなのではないでしょうか？一方グラント師の著書⁵によれば長崎牧師は九州が故郷のようで、どちらが正しいのか不明です。長崎牧師は1952年（昭和27）11月に仙台で行われた特別伝道集会の講師の一人でしたので、この頃までには仙台に来られる計画が、連盟や宣教師や本人の間でだいぶ進行していたのでしょう。そして1953年（昭和28）2月22日⁶に仙台バプテスト伝道所に着任されます。かなり中途半端な時期なのが気になりますが、その事情も分かりません。呉教会で何かトラブルでもあったのかと勘繰りたくもなります。そして1年間の仙台での働きの後、突如1954年（昭和29）3月に辞任⁷されてしまいます。出身地がどこなのか、年齢や信仰歴、人柄や独身なのか既婚者なのかも、また辞任されてからの消息も知ることはできません。グラント師もあまり長崎牧師については言及しておらず、著書の中でわずかに「毎週日曜日に御言葉を取り次いでいた長崎先生は、九州にある故郷に帰るように導かれていると感じ、関谷先生がその仕事を引き継ぎました」と語るのみです⁸。

また、仙台教会設立メンバーのお一人だった先程の莊子聡子さんは、記念誌の中で「初代の長崎牧師は、九州から単身赴任、半年後に一身上のご都合で辞任され、まことに残念でした」と述べています⁹。「半年後」というのは莊子さんの記憶違いかもしれませんが、「一身上のご都合」とは何だったのでしょうか？『猷堂十周年記念文集』（復刻版）¹⁰には「家族の事情の為」と書かれていますが、それ以上詳しく知ることはできません。

2. バプテストの神学校の歩み

長崎牧師の出身神学校がどこであったのかが分かれば、そこから同師に関する情報がもう少し得られるかもしれません。ただ、日本のバプテストの神学校は、歴史の中で複雑な歩みを辿ってきましたので、神学校を特定するのはそう簡単ではありません。アメリカ南部バプテスト連盟外国伝道局の事業として、「福岡バプテスト神学校」が開校されたのは1907年（明治40）ですが、3年後には南部バプテストとアメリカン・バプテストの神学校が合併し、「日本バプテスト神学校」が設立されます。ところが10年も経たないうちに、教育方針の不一致等により閉校の方向が確実となったこともあり、南部バプテストの神学校として1923年（大正12）に、西南学院高等学部神学科が誕生することになります。その後の戦時体制の中、紆余曲折の末に再度「日本バプテスト神学校」をスタートさせますが、宗教団体法の下プロテスタントの全ての教派の教会は、1941年（昭和16）に日本基督教団として合同することになります。そのため教派神学校であった「日本バプテスト神学校」は翌年廃止されます。

戦後、1947年（昭和22）4月1日に西南学院専門学校に神学科が開設され、翌々日に設立された日本バプテスト連盟傘下の神学校として歩み出すことになります。その後1949年（昭和24）に西南学院大学の発足に伴い、神学科は学芸学部神学専攻、さらには文商学部神学専攻と名称が変わっていきます¹¹。このあたりの時期の大学の記録を調べれば、あるいは長崎直得牧師について何か知ることができるのかもしれませんが、そう簡単に部外者が調査することはできないでしょう。

3. 初代牧師のことをもっと知りたい

先日、故莊子聡子さんの出身校を確かめるために、ご親戚の方に問い合わせをし

ました。ある程度の情報は得られたのですが、ご親戚の中でも聡子さんについて詳しくご存じの方は既においでにならず、正確なところは分からない状態でした。時の流れとはそのようなものなのです。長崎牧師に関しても同様の状態であるのかもしれませんが、まだ可能性は残っていることでしょう。もし仙台バプテスト伝道所初代牧師・長崎直得師に関して何かご存じの方がおいででしたら、どんな情報でもかまいませんので、是非お教えいただければ幸いです¹²。

(文責：小林孝男)

¹ 『主の息吹の中で』24~26 頁

² 1954年(昭和29)11月7日に日本基督教団塩釜教会(現在の日本バプテスト同盟塩釜キリスト教会)から転会。仙台教会の初代婦人会長。教会役員を長年務める。1909年(明治42)5月16日生~2002年(平成14)12月2日没

³ 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革と教会員名簿)

⁴ 呉キリスト教史編集委員会『呉キリスト教史』(1994)77 頁

⁵ 『ワース・C・グラント師の日本観』297 頁

⁶ 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革と教会員名簿)

⁷ 『ワース・C・グラント師の日本観』297 頁

⁸ 同上

⁹ 仙台教会献堂40周年記念委員会『献堂四十周年記念誌』(日本バプテスト仙台基督教会、1995)63 頁

¹⁰ 復刻版は『献堂四十周年記念誌』の43~62 頁に収録されている。

¹¹ 『日本バプテスト連盟五十年史』145~151 頁

¹² 長崎直得牧師は、仙台バプテスト伝道所に着任する以前は呉教会の牧師であった。遅まきながら同師に関する情報提供を、呉教会にお願いしているところである(2024年9月)

すべてのわざには時がある－教会用地の入手 1953

はじめに

宣教師館のための土地探しに、グラント師は大いに苦勞し6カ月以上を要しました。不動産業者は樂觀視していたようですが、現実にはグラント師は何回も落胆を経験しなければなりません。敗戦後まだ7年しか経っていない時期ですので、「敵国人」に土地を売ることに對する抵抗感が世間的にはあったのかもしれませんが。こうなったら買える土地ならもうどこでもいいという心境にさえなりながら、不動産業者とタクシーで市内を走り回っていた時に、偶然角地の空き地が目に留まりました。ダメもとで業者にその土地の所有者を確かめてもらい、売る意思があるかないかを調べてもらったところ好感触を得たため、その晩に早速土地の所有者に接触しました。そして結果的には交渉が成立し、売買契約も整い、役所への登記も無事終了しました。

堤通98番地のその土地は、交通の便がよい角地で、仙山線の北仙台駅にも近く、市電の路線に面していましたので、絶好のロケーションでした。グラント師の期待も大きく膨らんだのですが、思いがけない障害が生じました。宣教師館建築が始まると、昔からお住まいの近隣の方々から、建築反対の強力な運動が起こったのです。グラント師は通訳兼相談役の連盟職員と共に、反対を唱える人たちとの話し合いを持ちましたが、双方とも一歩も引くことなく物別れとなりました。

絶好の場所に建った宣教師館でしたが、その場所をベースにしての宣教活動は、ご近所の方々の敵意に包まれた中で開始しなければならなかったのです¹。

1. 不思議な経緯で土地を入手

宣教師館の土地探しに大いに苦勞したグラント師ですが、教会の土地探しについてもかなり苦勞されました。ある時不動産業者と一緒に、後に教会用地となるその土地の所有者の事務所を訪れ、売買交渉を始めようとしたところ、相手方は顔を真っ赤にして怒り出し、二人は事務所から追い出されてしまいました。不動産業者はその土地が売りに出されているとの情報をもとに行動したのですが、実際は所有者側には売却の意思が全くなかったのです。デマ情報だったわけです。

その後何カ月も土地探しに無駄な時間を費やし、また不動産業者も数回変えましたが、なかなか良い土地と巡り会えません。多少やけ気味になったグラント師は、真っ赤になって自分たちへの怒りを顕わにしたあの土地の持ち主のところを、勇気を振り絞ってもう一度訪れました。すると対応に出てきたのはあの時の年配の男性ではなく、もっと若い方でした。前回のいきさつをお話ししたところ、前に対応したのはその若い方の父親で、数週間前に亡くなられたとのこと。父親は土地を売ることに断固反対していたのですが、息子の方は売却の意思があるということで、親族会議を経て土地の売買交渉はトントン拍子に進み、教会用地としてまたとない土地をグラント師は入手することができました²。不思議なものです。

2. 土地の履歴

2年ほど前ですが、建築関係のお仕事をしておられた教会員³の方にお願ひし、法務局で教会の土地に関する登記書類を何種類か入手してもらいました。「旧土地台帳」を見ると、1953年（昭和28）9月17日に、売買により土地の所有権が木町通203の渋谷親子の名前から、日本バプテスト連盟に変更登記が行われていました（実際に土地の書類を目にすることで、頭では分かっていたこと、つまりこの土地は仙台教会のものではなく連盟のものであることを、改めて認識させられました）。元々渋谷さんの父親が三分の二の所有権、息子が三分の一を持っていました。息子は早く売却したかったのですが、父親が反対していたため従わざるを得なかったのです。しかし、その父が亡くなり状況が大きく変わったタイミングで、グラント師が偶然にも二回目の訪問を行い、交渉が成立したわけです。

仙台藩が栄えていたころは武家屋敷が連なり、「いぐね」（屋敷林）が生い茂っていた北四番丁境界ですが、明治に入りこの一帯も衰退します。教会の建つこの土地は畑地となり、北四番丁29番地にお住いの斎藤某が所有されてきました。そしてその土地を北四番丁33番地にお住いの渋谷某が取得し（明治23年8月18日付）、その後代々受け継がれてきました。畑地から宅地となったのは昭和の初めの頃のことです。書類を辿ると、グラント師が最初に交渉し追い出されてしまった相手は、木町通203にお住まいだった渋谷利之進さん、二度目の交渉の相手はその息子の渋谷辰雄さんだったことが分かります⁴。

3. すべてのわざには時がある

旧約聖書の伝道の書は「すべてのわざには時がある」(3:1、口語訳)と語りますが、正にその通りです。怒鳴られ追い出されることを覚悟の上、グラント師が再度訪問したその「時」は、単なる偶然の「時」ではありませんでした。主が特別に備えてくださった「時」であり、この地に教会を建てるのが主のご計画であることを示す「しるしの時」に他ならなかったのです。

<余計な二言>

●当時の仙台教会の敷地の地番(法務局が定める住所)は「北四番丁 114 番地」です。一方住居表示(住居表示法により市町村が定める住所)は「北四番丁 113 番地」でした。この微妙な数字の違いに何かむずがゆさを感じてしまいます。なお、現在の地番は「仙台市青葉区木町通二丁目 304 番」⁵、住居表示は「仙台市青葉区木町通二丁目 1 番 5 号」です。

●「以前、北四番丁 113 番地には市北部唯一の娯楽施設として映画館が建てられていた。ところがそれは間もなく不審の火によって一夜の中に焼失してしまった。そして、師は敢えてこの焼土の地を会堂建設の地と定めたのである」、こう語るのは『献堂 10 周年記念文集』⁶の編集子です。我が家(小林)の昔の住所は北四番丁 112 番地で教会の二軒隣りでした。この映画館の火災は私が生まれる 2 年前の話です。で覚えているはずはないのですが、幼いころに家の者から幾度となく言い聞かされ、記憶に刷り込まれてしまったのでしょう。教会が建つ以前のこのあたりの風景を思うと、映画館が建っていた様子が自然と頭に浮かんできます。不思議なものです。

(文責: 小林孝男)

¹ 『主の息吹の中で』19~23 頁 なお、「仙台教会の歴史シリーズ その4」で紹介した莊子聡子さんの住いは、宣教師館から徒歩1分程度の所にあった。宣教師館建築に敵意を抱く人々が多く暮らす地域の中で、宣教師と親しく交流し、クリスチャンとして再出発の道を歩むことは、莊子さんにとっては大きな勇気を必要としたはずであるし、一大決心を伴うものであっただろう。またそのような地域の中に暮らすグラント宣教師夫妻にとっては、莊子さんとの不思議な出会いは、主が備えてくださった特別の出会い以外の何ものでもなく、大きな慰めであり心強い支えとなったことだろう。

² 『主の息吹の中で』35~36 頁

³ 故最上浩光さん(2023年召天)

⁴ 資料(2022/05/18_旧土地台帳)

⁵ 資料(2022/05/18_土地_全部事項証明書)

⁶ 資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌)43~62 頁に復刻版が収録されている。

仙台教会の歴史シリーズ その6
最初のバプテスマ 1953

はじめに

仙台教会設立当時の資料はほとんど何も残っていません。新会堂建築の際、旧会堂の解体を前に会堂内の荷物を仙台長命ヶ丘教会（当時の仙台北教会）の牧師館や教育館に一時保管させていただき、また倉庫を置く場所も提供していただいたのですが¹、それでもスペースが限られていたため、不要と判断したものはどんどん廃棄する必要がありました。要・不要は作業の中で即決しなければなりませんので、不要と判断したものの中には、本来は保存すべき貴重な資料も含まれていた可能性もあるのです。

70年前の古い資料がほとんど残っていない中で、やっと見つけ出した二三の資料の一つが1955年（昭和30）3月24日現在の「日本バプテスト仙台基督教会員名簿」です²。B4用紙の名簿で39名の名前が掲げられています。この方々によって仙台教会が組織されたのかと思うと、何か厳かな感じを覚えます。

試みに平均年齢を調べてみるとなんと約25才です！生まれたばかりの仙台教会は当然のことですが若々しい教会だったのです。教会員の職業も色々です。県庁の電話交換手³、銀行員、公務員（税務署・市役所）、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭、高等学校教諭、会社員（石油会社・製薬会社・運輸会社・その他）、花道教授、保母、家事、農業。そして教会員の30%は学生・生徒たちで占められていました。2024年度仙台教会現在会員72名の平均年齢は約65才で、学生・生徒率は0%ですので、教会設立から70年の時の中で、教会も教会員も恵みの内に豊かに成熟させていただいたというところでしょうか。

1. 記録と記憶

グラント師は、仙台での最初のバプテスマについて著書の中で次のように語っています。

「仙台での最初のバプテスマは、私たちの宣教活動が最初に始まってから約一年後のことであった。私たちの一番最初の試みはカーティス・アスキュー宣教師のメッセージを通した、公会堂における五日間の集会だった⁴。目に見える成果という意

味では、この集会はそれほど成功しなかった。しかし、これによって種が蒔かれた。決心カードに記入した人の中で、ある少年がその後数カ月努力を続け、ある寒い十一月の午後にバプテスマを受けた最初の六人の一人となった。私たちの二番目の娘のアンジェラもその六人の中にいた。二人の若い女性と、二人の男性がそれに加わり、私たちの十二カ月間にわたる過酷な働きの結果、目に見える結果として現れた数字となった」⁵。

この貴重な証言は、グラント師が仙台での 7 年間の働きを終えてから何年か後に著した『主の息吹の中で』（原書は *A Work Begun*、1965 年以降の著作）と『ワース・C・グラント師の日本観』（原書は *Japan with Love*、1976 年以降の著作）の中に記されています。グラント師のこの 2 冊の著書を、仙台教会は 50 周年の記念事業として合本版で出版しました。翻訳は教会員だった大谷淳久さんです。仙台教会にとっては、大変重要な歴史的な情報が詰まった資料であり、教会の宝物と断言していいでしょう。ただ内容的にいくつか不確実な点が含まれています。記録と記憶の間に食い違いが生じている箇所があるのです。

一点目は、「公会堂における五日間の集会」という個所ですが、2003 年（平成 15）に同師が来仙した際に語られた説教の中では、「公会堂で三日間行った伝道集会を通し」と語られています⁶。また、この特別伝道集会に少年時代に実際に参加した N.K さんも、証しの原稿の中でその特伝の具体的な 3 日間の日程を記しています⁷。一方、「仙台バプテスト伝道所沿革」⁸には、集会の 5 日間の具体的な日程が記録されています。但し、それは金曜日から火曜日までという少し不自然な日程です⁹。

二点目は、1953 年（昭和 28）11 月に仙台での最初のバプテスマが行われ、グラント宣教師夫妻の次女アンジェラちゃんを含め 6 人が受浸した、と同師は記憶しているようですが、「教会員名簿」¹⁰の記録によれば、11 月にバプテスマは行われていません。10月 25 日に 3 人の女性が受浸し、その中の一人がアンジェラちゃんです。記録上は、これが仙台でのグラント師による初めてのバプテスマです。

三点目は、「決心カードに記入した人の中である少年が・・・バプテスマを受けた最初の六人の一人となった」の部分で、この「ある少年」が N.K さんを指すものとして書いているのなら、これも「教会員名簿」の記録とは異なります¹¹。N.K さんのバプテスマは 1954 年（昭和 29）6 月 27 日と公式には記録されているからです。

2. 最初のバプテスマは広瀬川で

「伝道所沿革」にせよ「教会員名簿」にせよ、100%確かであるとは言いきれませんが、グラント師の証言は「教会員名簿」に記録されている内容とは食い違っています。常識的に考えるならば、受浸記録は教会にとっては最も重要な記録です。その記録はしっかり管理されていたはずで、ですからグラント師による最初のバプテスマが1953年（昭和28）10月25日に行われ、3人の方が受浸したという「教会員名簿」に記録されている内容は、信頼していいのではないかと思います。

なお、会堂ができるまでのバプテスマは広瀬川で行われました。N.Kさんの記憶によれば澱橋（よどみばし）と牛越橋（うしごえばし）の間だったとのこと。ちなみに、広瀬川で最初にバプテスマを行ったのは、アメリカン・バプテスト宣教師同盟から宣教師として任命されたT.P.ポート¹²で、1880年（明治13）7月のことです¹³。彼は東北に初めてバプテストの信仰を伝えた宣教師で、仙台に誕生した最初のプロテスタント教会を設立した宣教師です。（文責：小林孝男）

日本バプテスト仙台基督教会員名簿
1953年3月24日現在

番号	氏名	受浸年月	受浸場所	住居	職業	備考
1	山口 幸子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
2	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
3	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
4	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
5	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
6	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
7	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
8	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
9	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
10	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
11	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
12	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
13	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
14	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
15	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
16	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
17	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
18	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
19	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
20	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
21	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
22	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
23	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
24	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
25	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
26	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
27	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
28	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	
29	佐藤 美津子	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	主婦	
30	佐藤 健一	5.21.53	広瀬川	仙台市青葉区	会社員	

教会役員

主任 大田 康彦 副主任 大田 康彦
 書記 田中 浩 司理 大田 康彦
 財政 田中 浩 司理 大田 康彦
 行務委員 佐藤 美津子 音楽委員 佐藤 美津子
 庶務委員 大田 康彦

日本バプテスト仙台基督教会員名簿
1953年3月24日現在

¹ 資料(2007/05/20_2006 報告総会・抜粋)1 頁

² 教会組織会議は 1955 年 3 月 25 日なので、3 月 24 日付の名簿は正確には「仙台バプテスト伝道所会員名簿」ということになる。

³ 電話交換機を使って、施設の代表電話にかかってくる電話を受付し、相手の話の主旨を理解してつなぐべき担当者や部署に取次ぐ業務を行う人

⁴ 1952 年(昭和 27)11 月に行った特別伝道集会のこと

⁵ 『主の息吹の中で』26 頁

⁶ グラント師の著書の合本版の 295~308 頁に、2003 年 7 月 6 日に仙台教会で師が語った説教が収録されている。

⁷ 資料(2020/08/00_國分登氏の証・仙台教会の紀元) 1 頁、昭和 27 年 11 月 3~5 日と記している。曜日は月曜日~水曜日となる。

⁸ 教会組織及び連盟加盟の資料として恐らく準備されたものだろう。短い貴重な資料である。但し残念ながらオリジナルではない。

⁹ 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革と教会員名簿)には、特別伝道集会の日程が昭和 27 年 11 月 7~11 日とある。

¹⁰ 同上。教会員名簿は 1955 年 3 月 24 日現在のものである。

¹¹ 資料(2020/08/00_國分登氏の証・仙台教会の紀元) 6 頁

¹² 大島良雄『バプテストの東北伝道 1880-1940 年』(ダビデ社 2005)14 頁

「ポートは 1848 年に英国に生まれた。オクスフォード大学に学び、1867 年大英薬物学会の会員となり、専門職として 1868 年に中国に赴き、1871 年に日本に移り、1879 年宣教師に任命されるまで大学予備門などで英語教師をしていた。またその間、日本語や日本に関する知識を習得すると共に、東京第一浸礼教会や駿台女学校の活動を助け、伝道用のトラクトを作成するなどの伝道活動にも従事していた。」

¹³ Baptist Missionary Magazine, Jan. 1881 に収録の *Letter From Rev. T. P. Poate. Sendai, Oct. 11, 1880* 参照

大槻國彦の“出会いと献身のドラマ” 1953

はじめに

人生とは不思議なものです。良くできたドラマのように意外な筋書きが展開したり、小さな出会いやちょっとした勘違いによって、その後の人生行路が見事に変わられてしまうということも起こりえます。そんな人生を誰もがみんな背負っています。単なる偶然の積み重ねに過ぎないと割り切る生き方にせよ、聖なるお方の「ご計画」がそこにあると信じる生き方にせよ、どちらにしても証拠をもって証明することではありませんので厄介です。ただ、焦る必要はないのでしょうか。いずれ迎ってきた我が人生の道程を振り返る時に、本人だけにははっきりとどちらが正解だったのかは示されるのでしょうか。その時が来るまでは、想定外のことが色々起こる人生をあまり悲観視することなく、多少楽観的に構えてそれぞれの人生を受け止めていければとは思いますが・・・。

1. 大槻國彦青年とグラント宣教師の出会い

さて、大槻國彦さんは仙台教会が生み出した最初の献身者です。高校を出てすぐに神学校に進学し、神学校卒業後、福岡県の粕屋伝道所の専任牧師¹として招聘され、2年間の牧会経験を積んだ後に按手を受けることとなります。その按手礼拝の説教の中で、彼はご自分とキリスト教との出会いについて述べていますが²、その内容を要約すると以下の通りです。

大槻國彦さんは1936年（昭和11）に仙台市に生まれました。戦時中、父親と兄は民間兵として満州に渡っており、仙台の自宅で彼と母親の二人暮らしをしていました。ところがその母親は、1945年（昭和20）7月10日の仙台空襲で亡くなってしまい、当時9才の國彦少年は、父の郷里に住む祖父や叔父・叔母のお世話になることとなります。その田舎にも爆撃機が飛んできて空襲を受けたそうです。家の近くに陸軍の練兵所があったからです。説教の中では父の郷里がどこなのか具体的には語られていませんが、その練兵所というのは県中央部に現在もある王城寺原演習場³のことでしょう。ということは色麻町、大和町、大衡村あたりが、父親の郷里の候補地ということになります。更にグラント師の思い出を綴った大槻師の他の文章を

読み合わせると、父の郷里は鶴巢村であったことが分かります⁴。

戦後の混乱の中、心は不安や孤独感に溢れ、自分自身の存在意味を自問しても、空しさだけが山彦のように返ってくるような日々を送っていた國彦です。

ある日、彼は北仙台の大きな教会の頑丈な鉄の門の前に立っていました⁵。門の内側の空間には、自分が生きている世界とは全く違う世界が広がっているかのようでした。その教会の隣に外国人の家らしい建物がありましたが、当然大きな教会と繋がりのある家なのだろうと國彦は思いました。その洋風の建物の小さな門の近くに掲示板があり、十字架に掛けられたキリストの絵が飾られ、開かれた聖書も置いてありました。そして小さな看板には、「キリスト教について知りたい場合はどうぞ遠慮なくお入りください」と書かれていました。その言葉に誘われるように、10代も後半になった國彦青年は小さな建物の扉を叩いていました。それがグラント師との出会いであり、キリスト教との出会いとなります。1953年（昭和28）7月のことでした⁶。後になって、大きな教会はカトリック教会⁷、隣の小さな建物はその教会とは関係のない、バプテストの宣教師館だったことを彼は知るのでした。

2. 宣教師館の屋根裏部屋に居候

國彦青年はグラント師からもらった福音書の分冊とパンフレットを読む中で、次第にキリスト教に興味を持つようになります。祖父の家では、夕食後のいり端での団欒の時にも、聖書やキリスト教に関する本ばかり読んでいもので徐々に家族から煙たがられ、皮肉を言われるようになります。叔父からは、「宣教師の神を信じたいなら、宣教師に飯を食わせてもらえ」とまで言われる始末です。そこで1954年（昭和29）の旧正月の頃に、17才の國彦青年は仙台に引っ越すことを決意します。しかし、住む場所や仕事の当てがあったわけではありません。相談を受けたグラント師は、夫妻の日本語学習を助ける「仕事」を彼にしてもらう代わりに、宣教師館の小さな屋根裏部屋と食事を提供したのでした⁸。

そしてその間、礼拝や普段の生活においてグラント師から熱心な指導を受け、やがて信仰の決心に導かれ、同年4月18日に広瀬川でバプテスマを受けることとなります。その時彼は、これが自分の新しい人生の本当の始まりなのだ、と強く感じたのでした。自分自身の無知・無力を自覚していましたので、牧師になろうなどとは考えもしませんでした。やがて宣教のために自らの人生を捧げたい、との決意へ

と導かれることとなります。

3. 神学校を目指した 20 才の高校生

その決意をかなえるため彼は神学校を目指すこととなりますが、そのためには高校を出ていなければなりません。そこで一浪して 1956 年（昭和 31）に仙台高校に入学します。貧しかったため学生帽もキャンバスシューズも準備できず、また既に 20 才であり年齢的に目立った存在でしたので、入学して直ぐに教頭に呼び出され、飲酒・喫煙・服装・生活態度等について指導を受けました。その時彼は、自分は何としても神学校に入りたいこと、そのために高校に入学したことを告白します。「神学校に入学するつもりの方クリスチャン」というレッテルを貼られての 3 年間の高校生活を終え、やがて 1959 年（昭和 34 年）4 月に「バプテスト神学校」⁹に入学し、献身者としての歩みが具体的にスタートするのです。

大槻師の「キリスト教との出会いと献身の物語」は、何かドラマのようです。神の不思議な御手の業をそこに見る思いがします。しかし、これは稀有なケースなのだと思ってしまうのはいけないのでしょうか。なぜなら、信仰に導かれた私たち自身も、神のドラマの中でそれぞれ主人公に抜擢され、何回もダメ出しの指導を受けながら成長させていただき、自分に与えられた台本の解釈に悩みながらも、結局は聖なる演出家を信頼し、良い舞台を作ろうと日々励んでいるようなものなのですから。（文責：小林孝男）



カトリック北仙台教会、1951 年（昭和 26）完成。この荘厳な建造物に目と心を奪われたことがきっかけで、大槻青年の人生は新たな方向に展開した。

¹ <https://www.bapu-kyoukai.com/sub3.html> (2024年9月14日閲覧) 粕屋バプテスト教会の伝道所時代から専任牧師として38年間、伝道・牧会に励む(1964/04-2002/03)

² 『ワース・C・グラント師の日本観』167~178頁 按手礼拝は1966年(昭和41)頃

³ 王城寺原演習場は黒川郡大和町、大衡村、加美郡色麻町にまたがり、その面積は4,651.4ha。演習場は明治14年から旧陸軍が使用し、昭和20年駐留米軍に接収され、昭和33年に返還され、その後は自衛隊が使用し、現在に至っている(宮城県公式ウェブサイト参照)

⁴ 資料(2011/05/01_記念誌・ねむの木に寄せて_抜粋) 32-33頁

⁵ 同上 32頁 その日國彦が北仙台にいた事情が書かれている。

⁶ 同上 32頁 相馬の野馬追は7月に開催される。

⁷ カトリック北仙台教会。カナダ管区聖ドミニコ男子修道会付の教会である。ドミニコ会士故ピエール・ビソンネット神父の尽力により1951年8月に献堂された。

⁸ グラント師の著書の合本版巻末の付録298頁。そこには2003年7月6日に師が仙台教会で行った説教の原稿が収録されており、その中にこの逸話が紹介されている。

⁹ 西南学院大学文学部神学科(当時)

開拓伝道時代の特別伝道集会 1952～1954

はじめに

グラント師の仙台における開拓伝道時代、同師は精力的に特別伝道集会（以下特伝）を開催しました。特別な説教者を招き特伝を開催し、話術巧みな説教や感動的な内容の説教で聴衆の心を揺さぶり、心が高揚している中で招きの時が持たれ、その招きに促され信仰の決心の意思表示をする、という形式の特伝方式は30年くらい前まではオーソドックスでした。人の心理や感情に巧みに働きかけ、信仰への決断を促す手法です。しかし、カルト宗教における「マインドコントロール」が社会的に問題となってきた1990年代ごろからは、仙台教会においても特伝における招きの在り方については、心の操作にならないよう十分注意を払うようになりました。ただ、ひと昔ふた昔前の時代から信仰生活を送ってきた者としては、昔ながらの特伝方式に何か郷愁を覚えてしまったりもします。

グラント師が行った特伝は“いずれも大盛況で多くの決心者を生み出し、大きな成果が得られた”、とは残念ながらいきませんでした。福音の種を弛むことなく播き続け、いつかどこかで、何粒かの種から芽が出ますようにと祈りつつの特伝だったのです。1952（昭和27）から1954年（昭和29）の開拓伝道時代に行われた特伝について、資料を辿ってまとめておきます。

1. 仙台開拓伝道のキックオフイベント 1952年

1952年（昭和27）11月の特伝は、正に仙台開拓伝道のキックオフイベント的性格を持つものでした。「仙台での開拓伝道スタート 1952（仙台教会の歴史シリーズ・その3）」で若干触れましたが、初期の貴重な資料である「仙台バプテスト伝道所沿革」¹には、次のように記録されています。「昭和27年 11月7日～11日 グラント師、アスキュー師、長崎牧師、眞鍋氏の四名により初めて市公会堂に於て特別伝道集会を行う」。金曜日～火曜日という少し不自然な日程です。また三日間の特伝だったとしている資料もあります²。どちらが正しいかは不明です。「長崎牧師」の名前が載っていることについては、3カ月後（1953年2月）の着任を前に下見と事前準備を兼ねてお招きしたということなのでしょう。「アスキュー師」とは広島で

働いていたカーティス・アスキュー宣教師³、「眞鍋氏」は眞鍋長次郎氏⁴で、初期の連盟事務所で主事や視聴覚担当主事の働きを担った方です。

2. 連盟の大物牧師を招いて 1953年

1953年（昭和28）は「3月 木村牧師により、5月 大谷牧師により特別伝道集会行わる」と記録されています。フルネームを書かなくとも十分人物を特定できるという書き方ですが、その時代の日本バプテスト連盟内で「木村」と言えば木村文太郎、「大谷」と言えば大谷賢二ということになるのでしょうか。連盟内の大物牧師をお招きしての特伝でした。

3. 波状的に特伝実施 1954年

1954年（昭和29）には3回特伝が行われました。1回目は5月9～11日（日～火）の三日間で、在日バプテスト宣教団代表エドウィン・B・ドージャー師⁵が講師です。5月12日（水）の河北新報の夕刊には、「たくみな日本語を用いてユーモアとゼスチュアにとんだ話しぶりには親しみを覚えた」との記者のコメントと共に、話の内容が詳しく掲載されています⁶。

2回目は6月下旬に立石牧師夫妻⁷を迎えて行われ、3回目の特伝は新会堂献堂式が行われた11月7日（日）から12日（金）まで行われました。11月8日（月）の河北新報の朝刊には、献堂式の報告と共にご親切にも特伝の予定が掲載されています⁸。「伝道所沿革」によれば、この特伝について「講師 三善牧師、ギレスビー師、ジャクソン師、眞鍋氏（映画） この頃より教会組織への意識会員間に高まる」と記録されています。「三善牧師」とは三善敏夫牧師⁹のことであり、「ギレスビー師」はアルフレッド・ギレスピー宣教師¹⁰で、1946～1977年まで日本で働き、大阪教会の設立にかかわった宣教師です。「ジャクソン師」はダブ・ジャクソン宣教師¹¹。米国空軍戦闘機部隊に所属、戦後マッカーサーの護衛任務で来日、賀川豊彦や先輩宣教師との出会いを通して献身を決意し帰国後神学校へ通い、卒業後1951年（昭和26）に再来日、旭川教会や東京バプテスト教会設立に貢献した宣教師です。

4. 開拓伝道時代の受浸者数

開拓伝道開始から教会組織までの間に、グラント師の下でバプテスマを受けた方

¹1955年3月25日に教会組織を行うにあたり準備した資料であろう。但し、オリジナルの資料ではない。教会組織以降の情報が書き加えられている部分があるからである。

²『主の息吹の中で』巻末295-309頁に掲載しているグラント師の説教原稿（2003年7月6日、仙台教会において）には、「新築された公会堂で三日間行った伝道集会」と書かれている。

³『主の息吹の中で』26頁、<https://www.legacy.com/us/obituaries/abqjournal/name/curtis-askew-obituary?id=8774982>（閲覧日：2023/1/25）
Curtis Askewは1947～1972年の間宣教師として日本で働く。2年間の語学研修後、広島教会に着任。1921/12/27生、2017/8/6召天

⁴『日本バプテスト連盟五十年史』552-553頁。特伝では伝道映画の映写技師として働く。

⁵同上9頁

Edwin Burke Dozier、日本バプテスト連盟の設立(1947)や、南部バプテスト連盟外国伝道局の日本での働きで重要な役割を担った人物。1908/4/16生、1969/5/10召天

⁶資料(1954/05/12_ドージャー師の講演_河北新報夕刊)

⁷立石牧師に関しては特定できなかった。この時代の牧師としては、旧ホーリネスで特高からの迫害も経験した、新小岩バプテスト教会牧師の立石卯一郎という人物がいるが、「立石牧師」と同一かどうかは不明。

⁸資料(1954/11/08_献堂式_河北新報朝刊)

⁹資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌)5頁、西南学院大学神学部長(当時は、西南学院大学文学部神学科長)。なお、仙台教会元牧師・金子純雄先生が、1947年にバプテスマを受けた際の授浸牧師である。

¹⁰ Alfred Leigh Gillespie

¹¹ <https://www.baptistpress.com/resource-library/news/william-dub-jackson-missions-pioneer-dies-at-95/>（閲覧日：2023/1/25）

William 'Dub' Henry Jackson Jr.は1951年に宣教師として来日。一般信徒を短期宣教師として派遣し伝道するいわゆるパートナーシップ・ミッションの指導的立場にあった。1924/4/23生、2020/1/19召天

¹² 旧メソジストと旧日本基督教会からの転会者3名は再浸礼を受け、またバプテスト系の教会(福岡教会、常盤台教会、逗子教会、尚綱教会、八戸教会、塩釜教会)からの転会者6名はそのまま転入した。

仙台バプテスト教会幼稚園の開設 1954

はじめに

ご承知のように、私たちの仙台バプテスト教会幼稚園と背中合わせに仙台お人形社幼稚園があります。当幼稚園より1年先輩です。考えてみればこれほど隣接した場所に、後発の仙台バプテスト教会幼稚園がよくぞ認可されたものですが、その理由が次のように言い伝えられています。

「建設の許可をもらいに行ったのは、グラント夫人キャサリンさんであった。彼女はかたことの日本語しか話せない。おまけに外国人は特に『テニヲハ』には弱い。その婦人が『ようちえん つくります からだわるいひと いれます』とか何とか繰り返し言ったものだから、係の人は『障害者のための特殊幼稚園でも作るのだべえ』と解釈して、あっさり許可を下ろしてくれたのだった。訳の分からない日本語を話すアメリカのおばさんに辟易して、詳しい説明を聞くのをあきらめたのかもしれない。このようにして幼稚園が塀を隔てて並ぶようになったのである。もし『幼稚園には障害者も受け入れます』と正しく説明したら、今の幼稚園はなかったのである。舌足らずも時には大いに役立つのだった」¹。

なるほど。今では考えられませんが、当時はそのようなこともあったのかもしれない。

1. 小さな疑問が沸き上がる

手元に仙台教会の年表が何種類かあります²。その中で最もしっかりまとまっているものは、『献堂四十周年記念誌』巻末の「仙台バプテスト教会の沿革」です。その年表には1954年（昭和29）の欄に「現在地で幼稚園開設（4月）」とあります。それを見て「あれっ？」と思いました。幼稚園設置が県から認可されたのは、5月1日だったはずですが³。そこで年表としては最も古いもので、教会設立に当たって作成したと思われる「仙台バプテスト伝道所沿革」で改めて確かめてみると、「昭和29年5月 ミセス・グラントにより仙台バプテスト幼稚園を開設す」とありました。やはり5月だったとの確信を得ましたが、それではなぜ「幼稚園開設（4月）」などと書いたのか疑問になりました。単純なミスなのだろうか、未認可のままスタート

したのでらうか、何となく釈然としません。そんな時に、グラント師の著書の中に、開園の前に幼稚園の記事が河北新報に掲載された旨が書かれていたことを思い出しました⁴。その記事を探し出せば事の真相がはっきりするかもしれないと思い、早速宮城県図書館へ赴きました。

2. これは園児募集のパンフレットか！？

今の時代ですから、新聞もデータベース化が進んでいます。「河北ライブラリー」⁵は、1897（明治 30）年の河北新報創刊号から 2011 年（平成 23）12 月 31 日号までが電子データ化されたものですが、非常に高額なよう導入している図書館は国立国会図書館程度しか見つからず、またオンラインでの記事検索や閲覧サービスは行っていないため、今のところ活用は困難です。それに対し「河北新報データベース」は多くの図書館に導入されていますが、残念ながら 1991 年（平成 3）8 月以降のデータです。となると唯一の頼りはマイクロフィルムになります。そこで宮城県図書館において 1954 年（昭和 29）4～5 月の河北新報のマイクロフィルムを、一コマコマ追いながら記事を見つけ出す作業を行いました。これにはなかなか骨が折れました。1 日目、2 日目とマイクロフィルムと格闘したのですが見つかりません。そして 3 日目、だいぶ目も慣れてきたためでしょうか、これまで発見できなかった記事を、4 月 13 日（火）の夕刊の 4 面にやっと見つけ出すことができました。

その記事を読んで驚きました。なんとまるで幼稚園の園児募集のパンフレットであるかのように、教育方針や保育の特色が丁寧に紹介されているのです⁶。そしてさらに驚いたことには、記事の中に「本月二十六日開園することになった仙台バプテスト教会幼稚園（仙台市北四番丁）は・・・」と書かれているではありませんか。『献堂四十周年記念誌』巻末の年表の「幼稚園開設（4 月）」は正しかったのです！認可前にもかかわらず園児を募集し、幼稚園を開設・開園するというのはどういうことなのでしょう。お役所との関係において多少融通が利く時代だった、ということもあったかもしれませんが、それ以上にグラント宣教師夫妻の覚悟をそこに感じます。つまり、万が一認可されないようなことがあったとしても、自分たちはお預かりした子供たちを責任をもって保育していく、という強い覚悟です。キリストの精神をもって子供たちを育てることの大切さを確信し、またその業を通して福音を仙台の地に根付かせる使命を、夫妻は深く自覚していたのです。

3. 偶然の発見

この新聞記事に関連してもうひとつ面白いことがありました。幼稚園の記事の内容とは全く関係ないのですが、「日米の長所を調和 仙台に新しい型の幼稚園」というタイトルが書かれた記事の真上に、3月の新聞に掲載された小学生のつづり方の作品を選者が講評している記事があり、作品のベスト5が紹介されていました。その二番手に「東北大付属小（北七）五 安井洋子」とありました。実は彼女は1954年（昭和29）に仙台教会の新会堂が建った頃には既に礼拝に通っており、翌年の秋にバプテスマを受けた少女です。その後結婚され鈴谷姓に変わりますが、仙台教会の初期の時代から2022年に天に召されるまで、鈴谷洋子さん（旧姓安井）は仙台教会の教会員として誠実な信仰生活を送ってこられました⁷。

「はじめに」で述べた、二つの幼稚園が背中合わせで存在できた謎の説き明かしを紹介してくれたのが、この鈴谷洋子さんです。教会組織60周年記念として2015年（平成27）に発行された、『60年のあゆみ』の「教会員の証し」欄に掲載されています⁸。仙台教会の中で語り継がれてきた幼稚園秘話だったのでしょ

（文責：小林孝男）

幼稚園の設立 ⁹	
名称	日本バプテスト教会幼稚園
設置者	ワース・グラント
園長	キャサリン・グラント
教諭	三浦栄子、本宮絢子
定員	30名
開園日	1954年4月26日
認可日	1954年5月1日



河北新報夕刊 1954年(昭和29)4月13日(火)

¹ 教会 60 周年記念誌委員会『60 年のあゆみ』(日本バプテスト仙台基督教会、2015) 43 頁

² 「仙台バプテスト伝道所沿革」(1955)、「献堂 20 年のあゆみ(主な出来事)」(1974)、「献堂 25 年のあゆみ」(1979)、「献堂 30 年のあゆみ(略史)」(1984)、「仙台バプテスト教会の沿革」(1995)、「仙台バプテスト教会年表」(2015)。但し最後に挙げた年表は、校正に大きなミスが多数あるため使用には適さない。

³ 資料(1954/05/01_幼稚園設置認可)

⁴ 『主の息吹の中で』37~38 頁

⁵ 創刊号から 2011 年 12 月 31 日までの紙面 725,035 ページ分を、デジタル処理して 45 枚のディスクに収納したもの

⁶ 資料(1954/04/13_新しい型の幼稚園_河北新報夕刊_)、記事には次のようにある。
「・・・アメリカで幼稚園学を修めたキャサリン・グラントさんが園長となってアメリカ式と日本式の両様を調和させた新しい試みで仙台の就学前の子どもたちに楽しい天国をあたえようというので発足するが、主として情操に重点をおき自主性を養うように指導して健全なる子どもを育てるのが目的だというキャサリン・グラントさんは抱負をつぎのように語った—アメリカ式と日本式の併用というわけで日本人の保母を二人お手伝いにおねがいしてはじめます、ワシントンから送られたアメリカの新しい方法も取り入れ、日本の行い方の長所も残して独特なものをつくって行きたいとおもいます、子どものしつけは幼時が一番大切で自分のことは自分ですること、整理整頓からはじめさせ、遊びもフリープレー(思いのまま)で自分の一番正しい考えに向かっていくよう指導したい、また情操のためには折紙やねん土細工ばかりでなく週に二、三回は日本の伝統である生花もとり入れて物を愛する心を養い語学としての英語も子どもの時から教えたなら修得も速いと考えております、それに私たちの幼稚園は教会ともつながりがありますから宗教的なふん囲気も味わわせすべてに感謝する気持ちも深めて行くよう導いて本当に素直で明るい子どもの世界をくりひろげりっぱな日本人としての基礎を育てたいとねがっています」

記事にある生花を担当したのは教会員の庄子聡子さんで、個人的に私も大変お世話になった方である。園児に生花を教えていたことは以前から知っていたが、開園当初からこの働きを担っておられたことはこの記事で知った。また、日本人保母(教諭)が初めから 2 名いたことが、この記事から分かった。

『主の息吹の中で』37~38 頁、初めは入園希望者が一桁ほどしかいなかったが、この記事の掲載を機に応募が殺到し、初年度から定員の 30 名が確保できた。

⁷ 鈴谷洋子(旧姓安井)さんは 2022 年 9 月 20 日に召天

⁸ 資料(2015/10/18_60 年のあゆみ_抜粋)43 頁

⁹ 『主の息吹の中で』36~44、89~91 頁、幼稚園設置申請の書類作りには、グラント師の「教師兼協力者」の任にあたっていた佐藤ミツさんの大きな協力と支援があった(仙台教会歴史シリーズ その 19 と 22 参照のこと)

関谷定夫牧師を迎えて 1954

はじめに

明治時代に仙台に神学校が存在していたことは、皆様ご存じのことでしょう。1886年（明治19）5月にスタートした私塾「仙台神学校」です。この仙台神学校が東北学院のルーツです。押川方義¹とアメリカ・ドイツ改革派宣教師 W.E.ホーイ²の手によるもので、6名の伝道者志望の若者が、木町通と北六番丁角の借家で神学の学びに励み、その後1891年（明治24）には「東北学院神学部」と改称、51年間の働きの中で多くの伝道者を生み出しました。しかし、1937年（昭和12）に神学部は廃止され、東京の日本神学校と合同することになります。教育環境・教育内容の充実という利点はありましたが、合同の背景には外国伝道局や学院側の財政的な事情やその他の理由があったのでしょう³。

戦後しばらくたってから、旧神学部の後身として東北学院大学文学部基督教学科が開設されました。1964年（昭和39）のことです。この基督教学科には仙台地区のバプテスト教会も恩恵を被りました。複数のバプテスト派の青年がこの学科に進学する道を選び、さらにその中から何名かの献身者も生み出されたからです。

1. 戦後のバプテスト神学校の変遷

バプテスト教会に仕える牧師が生み出されるためには、神の選びが大前提であることは言うまでもありませんが、本人の召命観と献身の決意、そしてバプテストの信仰に立った神学教育機関も不可欠です。バプテストの先人たちは時の流れの中で苦勞と工夫を重ねながら、神学教育機関を維持、発展させてきました。そのお陰もあって、仙台教会に二代目の牧師が与えられることになります。そのことに触れる前に、第二次世界大戦前後のバプテストの神学校の変遷を概観しておきます。

1941年（昭和16）、日本国内のプロテスタント諸教派の教会は、宗教団体法のもと一つの教団（日本基督教団）として合同する道を選びました。それに伴いバプテストの教派神学校であった日本バプテスト神学校は、翌年3月に閉鎖されます。戦後、1946年（昭和21）に西南聖書神学校の生徒募集が開始され、バプテストの伝統に立つ神学生の育成が再開されます。そして翌年には西南学院専門学校に神学科が

開設され、1949年（昭和24）にその神学科は、西南学院大学学芸学部神学専攻となり、その後何回かの変遷を経て現在の西南学院大学神学部に至ります。

2. 関谷定夫牧師の仙台教会での働きと生活と苦労

関谷定夫牧師⁴は1949年（昭和24）に旧制熊本医科大学卒業後献身し、西南学院大学で神学を学び1952年（昭和27）に卒業します。大学で助手をしながら福岡教会の牧師を兼務し、学問研究と伝道・牧会に情熱を注いでいましたが、心機一転、双方とも辞し、開拓伝道を担うために1954年（昭和29）6月2日（水）に仙台バプテスト伝道所に着任⁵、グラント宣教師と共に伝道・牧会の働きを担うこととなります。

最初の住まいは北鍛冶町の長屋の一室で、トイレは畑の中の掘建て小屋で随分と不自由な生活を送りました。新妻である玲子さんのご苦労がしのばれます。その後、新会堂ができてからはバプテストリー裏の六畳一間が居間兼寝室、またバプテストリーの更衣室が牧師室となります。やがて堤通に土地付きの建物を購入⁶し牧師館としましたが、それは関谷牧師の退任が迫った時期でした。また、その物件はかなり年代物で水道もない有様です。毎朝、近くの教会員⁷のお宅へ水をもらいにバケツ片手に何回も往復しなければならない始末です。

話を戻しますが、赴任して数日後の6月6日（日）はペンテコステで、関谷牧師が早速礼拝説教を担当されました⁸。当時の礼拝は4月から始まったばかりの幼稚園の仮園舎を使用し行われており、常に20名ほどが出席していました。青年会長の大西康雄さん、バプテスマを受けたばかりの大槻國彦さん、婦人会長の莊子聡子さん、会計の中目源太郎さんなど、群れの中心メンバーたちは、将来の教会組織に向け希望に燃えて信仰生活を送っていました⁹。

関谷牧師は着任1年後の1955年（昭和30）7月¹⁰に按手礼を受けます。そして同月10日（日）に関谷牧師司式による最初のバプテスマが行われ、大學かへでさん（旧姓飯倉）が受浸しました。その他現在会員では、藤澤雅子さん（旧姓太田）、渡邊慶子さん（旧姓斉藤）、藤澤良和さん、渡邊真人さんたちのバプテスマも、関谷牧師の司式です。また、教会組織1カ月後に行われた仙台教会第一号の結婚式（中目源太郎さんと成子さん）も関谷牧師が司式をされました¹¹。

なおこの年はグラント師の1年間の休暇帰国の年でしたので、関谷牧師のご苦労

は想像に余りあります。特に幼稚園の運営に関しては、ほぼグラント宣教師夫妻による経営でしたので、資金が底をつき幼稚園の先生方への給与の支払いも保育料だけではどうにも賄えず、大変困ったこともあったようです¹²。

このように仙台教会の開拓時代を担ってくださった関谷定夫牧師夫妻は、それこそ身を切るようなご苦勞を重ねながら、託された使命を果たすべく働きにまい進されました。感謝にたえません。但しその結果、お二人とも健康を害することになってしまいます¹³。今更ながら申し訳なく思います。

教会組織とその後のケアを成し遂げ、関谷牧師は 1957 年（昭和 32）3 月に退任し、再び学究の道を歩まれ、やがて日本の旧約聖書学や聖書考古学の分野で、大きな業績を残し、40 年近くにわたり西南学院大学において神学生の育成のために尽力されました。（文責：小林孝男）



敬愛する天野有さん（故人 1955～2018 年、写真）は、天野五郎牧師時代の仙台教会で少年・青年時代を過ごしました。早稲田大学卒業後、西南学院大学神学部での学びを経て奈良教会牧師に就任。その後、カール・バルト神学の研究者として歩み、ヴッパータール神学大学で神学博士号を取得。1994 年より西南学院大学神学部の講師、助教授（1996 年）、教授（2002 年）として神学研究及び神学生の指導にあたります。

天野有さんにとって関谷定夫先生は、西南学院における「恩師」であり、「同僚」であり、同時に両者とも仙台教会をこよなく愛した点において、信仰の「仲間」でした。

-
- ¹ 1850～1928年。松山藩士橋本家に生まれ、その後押川家の養子となる。横浜英学校でキリスト教に触れ受洗、日本最初のプロテスタント教会である日本基督公会を組織。東北学院初代院長。院長辞任後も東北学院顧問として終生かわりを持つ。東北学院三校祖の一人(東北学院ホームページ等を参照)
- ² 1858～1927年。アメリカ・ドイツ改革派教会宣教師。米国ランカスター神学校卒。1885年に来日し押川らと共に仙台神学校、宮城女学校(宮城学院)を創立。1892年東北学院副院長に就任。東北学院三校祖の一人(同上)
- ³ 東北学院百年史編集委員会『東北学院百年史』(学校法人東北学院、1989年)834～845頁
- ⁴ 資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌)5～6頁 「仙台教会草創時代の思い出」と題した関谷師の文章が掲載されている。1925/12/26 生まれ、1949/6/9 受浸、2017/6/11 召天
- ⁵ 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革と教会員名簿)
- ⁶ 資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌)6頁 1957年の冬に購入
- ⁷ 同上 6頁、資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革と教会員名簿) この教会員は本宮絢子さん
- ⁸ 同上 5頁 説教題は「聖霊の威力とキリスト教会の起源」
- ⁹ 同上 5頁
なお、資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革と教会員名簿)には、教会組織時の役員が次のように記録されている。会計:大西康雄、書記:柘沢信、庶務:中目源太郎、行事委員:江原梅子、奉仕委員:大槻國彦、教会学校長:大西康雄、幼稚園長:ミセス・グラント、婦人会長:庄子聡子、青年会長:斎藤良樹
- ¹⁰ 「仙台バプテスト伝道所沿革」(1955)には、「関谷牧師按手礼 7月 1日」とメモされているが、この日は金曜日である。夜に式を行ったのだろうか?残念ながら確認の術はない。ただ、勝手な想像を二つ述べれば、①「10日」を「1日」と誤記。10日(日)に礼拝の中で按手礼が行われ、同じ礼拝の中で関谷牧師司式による最初のバプテスマが執行された。②「7月第1主日(3日)」を「1日」と誤記してしまった可能性も考えられる。①②とも、平日夜に按手礼を行ったと考えるより自然であろう。
- ¹¹ 『60年のあゆみ』45頁 結婚式は1955年4月24日(日)
- ¹² 資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌)6頁
- ¹³ 同上 6頁 「たしかに開拓伝道はつらいことが多くありました。特に妻は、急激な生活の変化、慣れない土地と仕事のために心身ともに健康を害し、死産と流産を繰り返し、その度に入院しなければなりません。小生も無理がたたって盲目寸前まで目を患い、福岡に移ってからも十年以上通院してやっと視力が回復しました。」

真白い十字架のもと献堂式 1954

はじめに

仙台教会の近所に住む悪ガキの一人だった私（小林）ですが、教会の敷地内で遊んだ記憶はあまりありません。ただ一つだけ、強烈に覚えていることがあります。

教会の周囲は白い柵で囲まれていて、気軽に入ってはいけない場所であるという雰囲気が漂っていました。子どもたちにとっては全くの異空間であり興味をそそられました。近づくことはありませんでした。恐らく親たちが我が子に、「あそこには近づくな」ときつく注意していたのでしょう。得体のしれない外国の宗教への警戒心がまだあったのだらうと思います。それでも怖いもの見たさから一度だけ皆で忍び込み、園庭で騒ぎ回ったことがあります。その時です。突然教会から白人の“巨人”（子どもの目にはそう見えた）が姿を現し、大声で私たちに何かを叫んだのです。びっくり仰天した私たちは、それこそ蜘蛛の子を散らすようにその場から逃げ去りました。それ以降、怖くて近づくことはありませんでしたが、今から思えばあの時の“巨人”こそがグラント宣教師だったのです。

1. 献堂式には仙台市長も出席

1954年（昭和29）11月8日（月）の河北新報朝刊に、「くっきりと十字架 仙台バプテスト教会完成」というタイトルで、次のような記事が掲載されました。

「完成を急いでいた日本バプテスト仙台キリスト教会の新会堂はこのほど仙台市北四番丁電停前に完成、七日喜びの献堂式が行われた。

同教会は二十七年の十一月からグラント宣教師によって始められたが、独立した教会堂がないため長い間 YMCA¹に間借りしたり、仮幼稚園を使ったり、不自由な伝道が行われてきたもので会員たちの喜びはひとしお、真白い十字架が空にそびえた教会堂と集会堂、附属幼稚園があり献堂式はこの日午後二時から約二百人が集まって行われた、同会では新築を記念して七日から十二日まで毎夕六時半から特別伝道講演会を開く」。

真白い十字架が空にそびえ、いかにも洋風で、堂々とした素敵なスタイルの教会を、真正面から写した大きな写真も紙面を飾りました。記事には載っていませんが、

献堂式には岡崎栄松仙台市長²も参列しました。政治的なリップサービスでしょうが、「私はクリスチャンではないが、キリスト教が人類にとっての唯一の希望であり、あらゆる若者にその道を歩んでほしいと願っている」と祝辞を述べたそうです³。

2. 河北新報の記事には特伝の紹介も

新聞記事には「仙台バプテスト教会」や「日本バプテスト仙台キリスト教会」という言葉が使用されていますが、教会組織の手続きが行われるのは数カ月後のことです。正式にはまだ「教会」とは呼べません。しかし、そんなことは世間ではどうでもいいことです。この報道によって仙台市民に「仙台バプテスト教会」の存在が、広くアピールされることになりました。特別伝道集会のお知らせまで記事に含めてくれましたので、その PR 効果はかなり大きかったことでしょう。

この特伝の講師は西南学院大学文学部神学科（当時）の三善敏夫牧師、大阪教会で働いていたアルフレッド・ギレスピー宣教師、音楽担当が旭川伝道所のダブ・ジャクソン宣教師、そして映画担当が連盟事務所の眞鍋長次郎氏でした。映画は空軍パイロットから賀川豊彦との出会いなどを通して宣教師に転身するという、大変特異な体験を持つダブ・ジャクソン宣教師をテーマにした伝道映画だったようです⁴。この頃から教会組織への思いが教会員の高まったと、「仙台バプテスト伝道所沿革」は報告しています。

3. ロティ・ムーン献金と駐留軍チャプレンの協力

さて、この新会堂の建築資金はどのように準備されたのでしょうか。実は南部バプテスト国外宣教委員会からのロティ・ムーン献金（12,000 ドル）が資金の中心として用いられました⁵。そのことを私たちは忘れてはならないでしょう。ロティ・ムーン献金と言え、今の私たちの感覚では、経済的に貧しい国でのキリスト教の宣教活動のために捧げる献金で、アジアやアフリカの発展途上国のことをすぐに思い浮かべますが、戦後の日本は、ロティ・ムーン献金が向けられた正に「経済的に貧しいアジアの国」そのものだったのです。

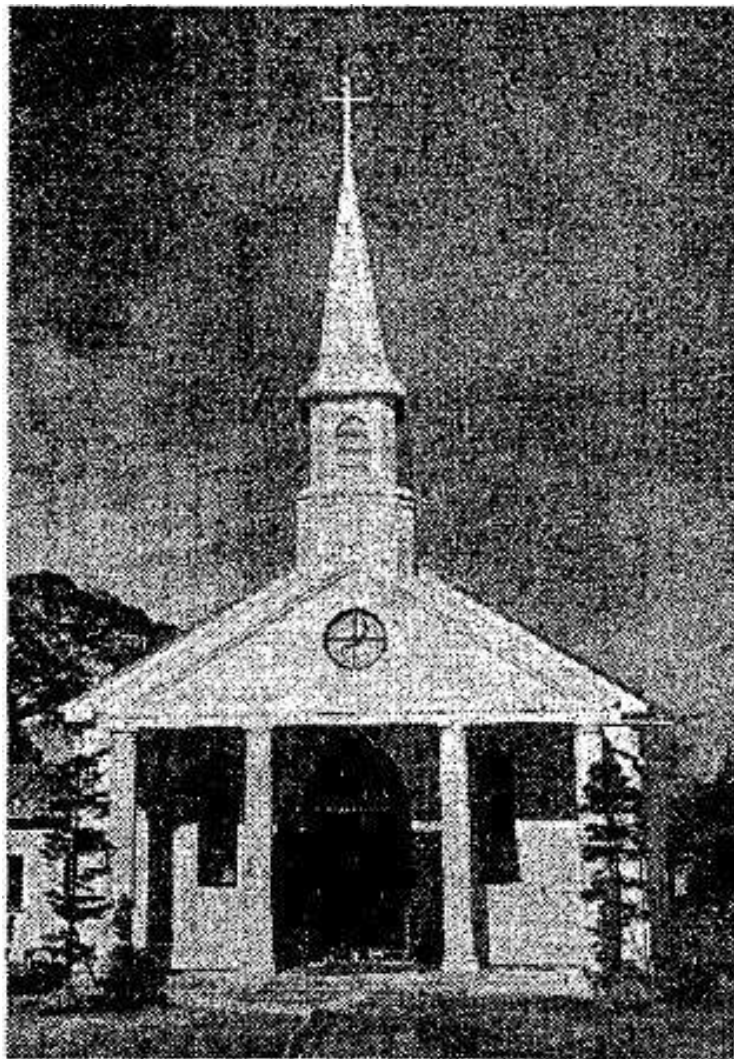
会堂内の調度品を整える資金は、仙台に駐屯していた進駐軍配属の南部バプテストのチャプレン⁶が、軍のチャペル資金から提供してくれました。その額は 1,200 ドルで、これにより講壇の説教台と大椅子、主の晚餐用の台、重厚な長椅子 20 脚をそ

ろえることができました⁷。当時これほどの調度品を備えた教会は、そう多くはなかったはずです。

また、会堂の塔の内部にスピーカーを取り付け、毎日「いつくしみ深き」のチャイムを地域に響かせていました。この機器一式も、アメリカのバプテスト教会の方が購入してくださったものです⁸。何年か後（天野五郎牧師の時代）、機器が故障し修理できない状態になったためなのか、あるいは近隣から騒音のクレームがあったためなのか定かではありませんが、チャイムは流されなくなってしまいました。

「いつくしみ深き」のメロディーはいつの間にか響かなくなりましたが、慈しみ深き主は変わることなく仙台教会の歩みをしっかりと導き続けてくださっています。

（文責：小林孝男）



合会研究大会
 奥、仙台市教委、県小、中、高校
 手遊な金融機関一覽屋である、
 そこで廣屋さんをめぐる最北の

くつきりと十字塔

仙台バプテスト教会完成

完成を急いでいた日本バプテスト仙台キリスト教会の新会堂はこのほど仙台市北四番丁電停前に落成、七日暮の献堂式が行われた

同教会は二十七年の十一月からラント宣教師によって始められたが、独立した教会堂がないため長い間YMCAに間借りしたり、仮幼稚園を使ったり、不自由な伝道

が行われてきたもので会員たちの喜びはひとしお、真白い十字塔が空にそびえた教会堂と集會堂、付属幼稚園があり献堂式はこの日午後二時から約二百人が集まって行われた、同会では新築を記念して七日から十二日まで毎夕六時半から特別伝道演説会を開く

【写真】完成した仙台バプテスト教会

河北新報朝刊 1954年（昭和29）11月8日（月）

¹『仕える者として—仙台 YMCA の百年—』(仙台 YMCA、2005)

仙台 YMCA が創立されたのは 1905 年(明治 38)。最初に活動拠点とした場所は東二番丁 30 番地(明治)、そして本荒町 35 の 3(大正)、元柳町 69(昭和)と変遷したが、戦災で施設を消失。戦後の都市復興計画で元柳町 69 の土地は緑地公園敷地に含まれることになり、換地として元柳町 57 番地(現在の立町9-7)の 800 坪の土地が指定され(1946 年)、1948 年からその地で活動を再開。1950 年 6 月には同地に復興会館を開館。グラント師が主日礼拝のために借用したのは、この復興会館の一室だったと思われる(下の写真)

²『主の息吹の中で』 61~62 頁

1946(昭和 21)年 6 月 17 日から 1957 年(昭和 32)12 月 17 日まで仙台市長を務める。1882 年(明治 15)生まれ。宮城師範学校や日本大学で学び、教育行政官の宮城県視学(旧制の地方教育行政官)などを務めた後、当時の東京市に勤務。主に民生部門を担当した。1946 年仙台市初の公選市長となり、空襲で焼け野原となった中心市街地の再興に向け尽力した。1955 年(昭和 30)に 4 選を決めたが、次点者側が開票事務に不正があったとして裁判所に異議を申し立て、仙台高等裁判所は 1957 年に選挙の無効を決定、岡崎市長は失職。晩年は宮城教育大の開学に尽力した。

³ 同上

⁴ 資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌) 5 頁

⁵『主の息吹の中で』 55、58、60 頁

ロティ・ムーン献金が大きな金額であったため、教会として建築に投入した自己資金は非常に少額であったようだ。このことに関してグラント宣教師は、「将来いつか贈られた資金の一部、もしくは全てを返済することができるようになること、そして今回の援助が贈り物であると同時にローンでもあること」を、牧会的配慮をもって教会員へ特に強く伝えた。

ロティ・ムーン献金とは、中国で働いていたアメリカ人宣教師ロティ・ムーンからのアピールの手紙に応え、アメリカのバプテスト教会の女性たちが世界バプテスト祈祷週間を設け、外国伝道や宣教師派遣のためクリスマス前に献金に取り組んだのが始まりである(1888 年から)

⁶ 同上 60 頁 ガレット・ナリー

⁷ 同上 60~61 頁

⁸ 同上 56 頁 サリー・マックラケン



1950 年 6 月立町に開館した仙台 YMCA の復興会館

北松竹の焼け跡に建つ教会 1954

はじめに

『新産業都市 仙台市大鑑』という仙台市の精密地図（住宅地図）が、東京オリンピック開催の年、1964年（昭和39）に出版されました。2023年（令和5）にその復刻版が発行されたのでさっそく買い求め、昔の我が家付近を眺めましたが、懐かしさがこみ上げてきました。勾当台通・北四番丁角から「岩淵菓子店」、「恵比寿染物」、「塚本商事」、「千葉歯科」そして「バプテスト教会」があり、「つつみ」（食堂・飲屋）、「佐々木歯科器械店」と続き次が我が家です。さらに並びには東洋機械KK、東北木材KKや角には佐万商店もありました。道路向かいには逸見法律事務所、高庄石材、斉藤医院、ヒロベ靴屋、高橋商店、そしてこの地図には出ていませんが石川写真館、佐伯花屋、白旗燃料店も忘れられません。

そんな昭和の街の顔は大きく変化しました。あの頃の場所はすっかりビル群に覆われ、公共の駐輪場、地下鉄の出入口、眼科専門の動物病院、マンション、銀行の事務センター、ドラッグストアやコンビニなどへと変身しました。昔ながらの場所で同じ働きをしているのは、私たちの教会と幼稚園くらいでしょうか。時間と共に町並やそこに住む人々は当然ですが変わっていきます。そのような時代の流れの中で、変わる事のない真理を伝え続けることが教会の使命なのでしょう。

1. 北松竹映画劇場の跡地に建つ教会

私たちの教会は、焼失した映画館の跡地に建てられました。そのことをご存じの方は多いでしょうが、映画館の名前までご存じの方は少ないでしょう。教会の二軒隣に生まれ育ったかく言う私も知りませんでした。教会の年表作りで古い週報をめくっていた時に、渡邊真人さんが書いた牧会通信（2003年6月1日）が目にとまり、その文章の中に映画館の名前を見つけました。「北松竹映画劇場」です。

そこでこの北松竹について調べてみると、いろいろ興味深いことが分かりました。収容人数1,000人程の比較的大きなこの映画劇場は、敗戦後6カ月の1946年（昭和21）1月25日に開館しています¹。1月23日付の河北新報の囲み広告には、「愈々25日開館 豪華絢爛披露番組」として、「豪華実演 松竹少女歌舞団一行 三日間公

演]、「歌と踊りのスペクタクルレヴュ映画 グランド・ショウ 1946年」とあり、三日間は実演と映画の二本立てで、なかなか華々しく開場した様子がかがえます。

北松竹の運営会社は東北興業です²。この会社は東北の開発促進を目的に制定された、「東北興業株式会社法」(1936年)³という法律に則って設立された会社です。当時の社長は伊澤平勝(東北の財界人と繋がりのある人物)、専務は松尾敬三(東北最大の的屋グループと繋がりのある人物)で、北松竹を開館した3カ月後には、南町に南松竹映画劇場も開設しています。しかし、1948年(昭和23)2月に南松竹が、8月には北松竹が火難を被り、北松竹は焼失後再建されることなく短命に幕を下ろしてしまいました。もし、北松竹が再建されていれば、私たちの教会はここには建っていなかったのでしょうか。

仙台空襲で町の中心部が焼け野原になり、敗戦で多くの人たちが意気消沈する中、庶民に娯楽を提供するために戦後半年足らずで新しい映画館を建設し、華々しく開館させるこのしたたかさ、生命力、行動力には、「すごいなあ」と感心させられます。東北興業は庶民が何を望み、何を求め、何を待っているかなどの心の機微や、時代の趨勢を敏感に感じ取る才に長けていたのです。勿論最も重点を置いたのはそろばん勘定なのでしょうが。

さて、北松竹の火災は不審火とのこと⁴。この業界特有の利害絡みの何らかの抗争が背後にあったことも考えられます。人々に喜びや安らぎや希望を与えてきた北松竹も、その背後には妬みや争いが複雑に絡んだ闇を抱えていたということなのでしょう。その同じ場所に私たちの教会が建っているのは、何かとても暗示的です。私たちの教会も光と闇が交錯するこの世のど真ん中に建てられています。つまり仙台教会がここに建っているという事実は、人々の様々な思いやどろどろしたこの世の現実としっかり向き合う中で、主から託されている聖なる使命を担いつつ歩まなければならないということを、いつも私たちに思い起こさせてくれているのです。

2. 武家屋敷街区に建つ教会

ついでに江戸時代まで時を遡ってみます。仙台教会は北四番丁北側に面し、勾当台通⁵と二日町の間に位置します。仙台城下では北番丁と東番丁は武家屋敷の街区でした。また、町屋敷の街区は奥州街道沿いに配置されましたが、教会近くの二日町や北鍛冶町のある通りがその奥州街道です。

町屋敷と武家屋敷の街区は、木戸によってはっきり区切られていました。仙台教会が建つこの一画の木戸の位置は、七十七銀行事務センタービルの西、「木町通二丁目バス停」辺りにありました。そしてこの一画には仙台北下が造られた当初、中流武士の屋敷が連なっていたことが古地図を見るとわかります。知行高によって敷地の規格は異なりますが、この地域は石高100～150石の武士の居住地区になっていましたので、敷地の規格は間口14間（約26.6m）、奥行き30間（約57m）ということになります。

私たちの教会は、町屋敷街区と武家屋敷街区を分ける木戸から東に4番目の武家屋敷の跡地に建っています⁶。古地図で調べると、そこは三百数十年前「志村長蔵」⁷の屋敷でした。その後しばらく時を経て「芳賀正左衛門」⁸、「相原兵衛」⁹の屋敷となり、幕末近くの地図では「相原石一」¹⁰の屋敷となっています。名前が書きこまれている古地図は他にもありますが、残念ながら判読できません。とにかく仙台教会が建つこの同じ場所を舞台に、幾人もの仙台藩士やその家族が、喜怒哀楽の渦巻く様々な人生を送ってきました。

今、同じ場所に集う私たちもまた、多様な人生を生きていることに変わりはありません。ただ、昔の住人と決定的に異なることがあります。それは、人生の導き手である主イエスを私たちは確かに知っている、という点に他なりません。そのお方の導きのもと、予期できない出来事が日々次々と押し寄せてくるそれぞれの人生を、私たちはなおも希望をもって歩むことが許されているのです。

（文責：小林孝男）

愈々 25日開館

演實華康 三日間公演 舞踊團一行

松竹少女歌

グラランド・シヨウ 一九四六年

北松竹映畫劇場

★九民舞劇場★ 松竹舞劇場★

河北新報朝刊 1946年(昭和21)1月23日(水)

-
- ¹ 資料(1982/00/00_仙台映画大全集) 453 頁。
論文: 功刀俊洋「1946年の公選運動(3)」(福島大学行政社会学会、1996) 56 頁によれば、初の公選仙台市長選挙の立会演説会場として北松竹映画館は利用されている(この論文では「北四番丁の松竹映画館」とあるが、「北松竹映画館」の誤りと思われる)
- ² 資料(1982/00/00_仙台映画大全集) 454 頁
- ³ 1936 年(昭和 11)5 月 26 日に成立した法律で 38 条からなる。
第1条 東北興行株式会社ハ東北地方ノ振興ヲ図ル為同地ニ於ケル殖産興業ヲ目的トスル株式会社トス
第2条 東北興行株式会社ノ資本ハ三千万円トス但シ政府ノ認可ヲ受ケ之ヲ増加スルコトヲ得
- ⁴ 資料(1982/00/00_仙台映画大全集) 454 頁
- ⁵ 江戸時代は定禅寺通を南端とし、北四番丁を北端とする短い道であった。狂歌師の花村勾当が住む高台が勾当台と呼ばれ、その西側にある南北の道が勾当台通である。北十番丁まで道が延長された時期を特定できなかったが、恐らく昭和初期であろう。なお延長路ができたため、やがて市電北仙台線が運行されることになる。北仙台線の開通は 1937 年(昭和 12)。
- ⁶ 武家屋敷や町屋敷の地割基準(間口と奥行)、各種古地図、計測ツール付きの国土地理院地図サイト等を用い推測することが可能である。
- ⁷ 『絵図・地図で見る仙台 第一輯』(1994)中の「仙台城下絵図」 延宝・天和年間(1673～1684 年頃)
- ⁸ 同上「仙台城下五蟹掛絵図」 元禄年 4～5 年(1691～1692 年頃)
- ⁹ 『絵図・地図で見る仙台 第二輯』(2005)中の「仙台城下絵図」 宝暦・明和年間(1751～1772 年頃)
- ¹⁰ 『絵図・地図で見る仙台 第一輯』(1994)中の「安政補正改革仙府絵図」 安政 3～6 年(1856～1859 年頃)

日本バプテスト仙台基督教会の誕生 1955

はじめに

仙台教会では第1主日の礼拝で主の晩餐を行い、それに続けて「仙台教会の喜びとビジョン」¹を唱和しています。本来なら仙台教会が依って立つ「日本バプテスト仙台基督教会信仰告白」²を皆で毎月確認できればいいのですが、何せ400字詰め原稿用紙2枚以上になる分量です。技術的にも、時間的にも、体力的にも、全員で唱和するには少し難がありますし、下手をすると意味も考えずお経のように唱えてしまう危険性もあります。

とは言え、私たちがどんな共通土台に立って教会形成を行おうとしているのか、そのことを定期的に確認することはとても大切です。そのような思いから、主の晩餐とセットで「喜びとビジョン」を唱和することになりました。開始したのは1999年（平成11）4月でした³。約13年間仙台教会を豊かに牧会された金子純雄牧師⁴が辞任され、1年間の専任牧師不在期間を過ごし、新しく青木康弘牧師⁵をお迎えした時期でしたので、これからの仙台教会がいかにして立つのか、その土台を新たな思いで皆でしっかり確認することは、至極当然のことでした。ですから主の晩餐に続け「喜びとビジョン」を唱和するスタイルが生み出されたのは、仙台教会としては必然だったと言っていいのでしょう。

1. 「正月スランプ」の“洗礼”

グラント宣教師夫妻の仙台における開拓伝道は、1952年（昭和27）11月の特別伝道集会から開始されました。この時は仙台市公会堂の会議室を借りての集会でしたが、それ以降の日曜日の礼拝は立町のYMCAをお借りして行い⁶、その状態は北四番丁に仙台バプテスト教会幼稚園の仮園舎ができる1954年（昭和29）春まで続きました。

YMCAで行われた毎週の礼拝の中で、グラント宣教師には忘れられない日がありました。開拓伝道を開始してから2カ月もたたない時に祝った仙台での初のクリスマス礼拝には大勢の人々が集まり、礼拝後の交わりの時間も大変盛況で、キャサリン夫人が準備したお菓子を味わいながら皆で楽しく時を過ごしました。やがて誕生

する教会の核となる人物がこの中から育つのだろう、との期待が大きく膨らみます。

そのような期待と希望を胸に宣教師一家は、1953年（昭和28）の新年最初の日曜日（1月4日）を迎えます。一家はいつもの時間にYMCAに行き、薪ストーブに火を入れて礼拝を行う部屋を暖め、皆を迎え入れる準備をしました。ところが礼拝を開始する時間になっても誰一人現れないのです。10分過ぎ、20分過ぎ、そしてついには45分過ぎても誰も姿を見せませんでした。深い失望と敗北感に打ちのめされながら、礼拝を行う代わりに町中の交通量の多い交差点で寒空の下、数百枚のチラシ配りを家族全員で行いました。日本にやってくる宣教師が受ける「正月スランプ」の強烈な“洗礼”でした⁷。

2. 日本バプテスト仙台基督教会の誕生

仙台で迎えた3回目の新年。1955年（昭和30）1月2日（日）も「正月スランプ」に陥ったかどうかは不明ですが、翌週9日は大変重要な日曜日となりました。礼拝後、これまでグラント宣教師からバプテスマを受けた人たちや、他教会でバプテスマを受け仙台バプテスト伝道所の群れに加わった人たちが総会を開き、教会を組織することを決議したのです⁸。総会では集まった人たちの篤い信仰の思いと強い決意を確かめ合うことができましたが、教会を正式に設立させるためにはそれだけではまだ不十分です。自分たちがどのような信仰を共有し教会を設立しようとしているのか、責任をもって教会形成に加わるメンバーは誰々なのか、この群れの信仰とこれまでの歩みと実績は、日本バプテスト連盟に加盟するに相応しいものか、といったことを客観的に示す資料を準備し、教会を正式に設立させ、更に連盟加盟を承認してもらう手続きが必須です。1月9日の総会決議を受け、2カ月以上の準備の期間を経て、3月25日（金）に教会組織会議が行われ「日本バプテスト仙台基督教会」が誕生しました⁹。そして7月に開催された第9回日本バプテスト連盟年次総会で、仙台教会の加盟が満場一致で認められることとなります。ちなみに教会組織時の「信仰告白」は以下の通りです¹⁰。

バプテストには「信条」はない。それは、キリスト信徒の信仰的規範は徹頭徹尾聖書の中にのみ求められるべきであって、而もそれは信徒各自の自由な信仰的判断によって為されねばならないことであるから、成文化さ

れたる聖書以外の何ものにも、聖書に代わるべき権威を認めることはできないと云うバプテスト本来の立場に基づくのである。仙台バプテスト教会は、このバプテスト本来の立場に立ち、昭和 22 年日本バプテスト連盟第一次総会に於て採択されたる「日本バプテスト連盟信仰宣言」を教会の信仰告白として採択する。勿論その各條項についての細密なる神学的解釈は各自の信仰的良心的判断によって為されねばならない。更にバプテスト本来の立場の細目については、「バプテスト教会員必携」中の「バプテスト主義」に従うこととする。尚当教会に入会する者は、同必携中の「教会の約束」を固く守るべきことを約さねばならない。

3. 新しい信仰告白のもとで

上記の信仰告白の文言には、教会組織にあたっての緊張感が漂っています。日本社会の中では小さな群れでしかない自分たちは、結束して歩まなければならない、という思いがにじんでいます。

その時から 70 年ほどの時を経た現在、私たちは 2010 年（平成 22）に改訂した新しい信仰告白のもとに教会形成に励んでいます¹¹。この改訂作業には 20 年以上¹²を要しましたが、作業の中間地点では、教会員一人ひとりの信仰的な思いを集約した「仙台教会の喜びとビジョン」を作成し、仙台教会が目指すべき方向性をカジュアルな形で共有できるようにしました。

「仙台教会信仰告白」や「喜びとビジョン」を土台に、各自の信仰に基づく主への自由かつ良心的な応答姿勢と、教会の業への責任ある態度を大切にしながら、これからも仙台教会の成長のために力を合わせていきたいと願っています。

（文責：小林孝男）

年月	朝拝			夕拝			祈祷会		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1954年9月	16	30	46	7	4	11	5	2	7
1954年10月	23	30	53	10	3	13	7	1	8
1954年11月	33	58	91	18	16	34	10	3	13
1954年12月	28	51	79	15	14	29	11	8	19
1955年1月	18	37	55	10	6	16	7	4	11
1955年2月	20	50	70	9	7	16	8.5	2.5	11
1955年3月	23	47	70	8	7	15	6	5	11
1955年4月	30	53	83	7	7	14	6	6	12
1955年5月	25	52	77	8	7	15	6	4	10
1955年6月	29	58	87	8	4	12	9	4	13
1955年7月	27	43	70						

教会組織前後の時期の礼拝・祈祷会出席者数

¹ 仙台教会の信仰告白の改訂作業の中で、教会員の信仰的な思いを集約し作成されたもので、1997年(平成9)10月12日に制定された。本文は各週の週報4面、及び<https://www.kitayon.com/about> 参照のこと

² 信仰告白の本文は教会のホームページ参照のこと <https://www.kitayon.com/about>

³ 週報(1999/04/04)

⁴ 1932/11/15 生まれ、1947/5/25 受浸。小倉教会、平尾教会の牧師を経て1984(昭和59)12月から1998年(平成10)3月まで仙台教会を牧会。仙台教会牧師退任後、福島旭町教会郡山伝道所(現、郡山コスモス通り教会)、仙台北教会(現、仙台北長命ヶ丘教会)、大富教会での牧師、協力牧師の働きを経て引退。日本バプテスト連盟常務理事(1977~1984年度)、同理事長(1991~1994年度)を歴任

⁵ 仙台教会での牧師期間は1999年(平成11)4月~2002年(平成14)7月

⁶ 『主の息吹の中で』18頁

⁷ 同上 28-29頁

⁸ 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革と教会員名簿)

⁹ 仙台教会ではこの日を教会組織記念日としている。

¹⁰ 資料(1955/03/25_教会組織及び連盟加入資料)

¹¹ 資料(2010/03/21_2010 予算総会)16~20頁 仙台教会は2010年3月に信仰告白を改訂

¹² 1986年(昭和61)10月の臨時総会で仙台教会将来計画大綱が可決され、翌年の2月の総会で信仰告白検討委員会と建築企画委員会の設置が決定した。しかし、実際に信仰告白検討委員会が動き始めたのは2年3カ月後の1989年(平成1)1月であった。この間の事情が「信仰告白委員会ニュース」に次のように書かれている。

「(1989年)1月29日に信仰告白検討委員会の第1回の話し合いを持つことができました。かなり前からこの委員会の必要性が訴えられ、委員長としての役目を私(小林)が仰せつかっていましたが、延び延びになってしまったことを深くお詫びいたします。実は私自身、先日行われたスチュワードシップ研修会での村松兄(注:浦和教会の村松久太郎さん。1/22の礼拝と研修会で奉仕)の話しを伺って、やっとこの委員会が何をすべきなのかのイメージがわいてきたところなのです。教会を建てるということは、第一義的には資金計画や設計図の問題ではなく、正にその教会のよって立つところの「信仰告白」の問題なのです。

教会建設という大事業を前にして、委員会の作業はもちろん悠長にはしておられません、しかし、教会員全体の理解と協力のもとに作業を進めていかなければ意味のないものになってしまうでしょう。その意味からも委員会としては丁寧に、焦らず、怠けず、着実に任務を果たしていきたいと思っています。よろしくご協力ください。」

仙台教会の週報の歴史

はじめに

教会の歴史を調べる上で大きな資料になるものは、毎週発行される週報です。週報には教会に関わる様々な情報が記録されているからです。週報はその週だけ役に立つのではなく、貴重な情報源として後々の時代まで「賞味期限」は続きます。ただ仙台教会の事務室（牧師室）には、1976年（昭和51）以前の週報は残念なことに全く保存されていません¹。もし昔の週報がしっかり保存されていれば、仙台教会の初期の様子をもっと生き生きと再現できたことでしょう。

昔の週報は当然ながら現物を保存するしかありませんでした。そのため劣化したり、紛失したり、分量が増えれば邪魔になったりと、保存もなかなかやっかひでした。しかし、今は電子データの時代です。ファイル名の付け方や保管ルールを明確にした上でデータを保存し、蓄積されるデータをしっかり継承さえすればいいわけですから、以前よりも週報の保存はかなり楽に行えます。50年後、100年後の皆さんに仙台教会の歴史を正しく知ってもらうためにも、週報の存在意義とその価値、そして保存の在り方を私たちは再認識すべきなのでしょう。

1. 仙台教会の週報の成長経過

実は仙台教会の週報は、キリスト教文化センター主催「教会週報・月報コンクール」（1975年）で特選を受賞しています²。それは天野五郎牧師が生み出した独特の週報スタイルと、カミワザ的な孔版技術の賜物でした。教会員は毎週「週報」を読むのを楽しみにしていたものです。

もちろん簡単にこの週報スタイルが出来上がったものではありません。このスタイルが生み出されるまでには、試行錯誤が色々と繰り返されてきました。天野牧師が福島教会から仙台教会へ赴任したのは1963年（昭和38）7月です。当時、仙台教会の週報作成を担当していたのは、東北大学の学生だった教会員の渡邊淳一さん、そして翌年からはその奉仕を青年会が引き継ぎ、更に1965年（昭和40）7月からは天野牧師が自ら担当するようになります³。その頃の仙台教会の週報は、紙面としてはB6縦×4頁（B5判用紙横二つ折り・横書き左開き）でした。1頁目の表紙と4

頁目の集会案内は固定した内容でしたので、その頁をあらかじめ印刷した用紙が大量に準備されていました。週報担当者は2～3頁部分に掲載する礼拝次第や報告などを、ヤスリ盤の上のせたロウ原紙に、鉄筆でガリガリと音をたてながら書き、すでに半分印刷されている用紙に謄写版で刷り上げ、週報を完成させたわけです。

当然、天野牧師が週報作成担当を引き継いだ当初は、それを踏襲しました。しかし、固定部分を印刷した用紙の在庫が無くなったのを機に、同師はこれまで横書きだった週報紙面を縦書き右開きに変更し⁴、内容にも工夫を施しました。例えば、1頁目には先週の説教要旨、2頁目は集会案内や礼拝プログラムや報告事項、3頁目は証し等のスペースとして自由に使い、4頁目は牧会通信といった具合です。また、天野牧師の孔版技術は芸術的で完成度の高いものでしたので、これによって仙台教会の週報は、見た目にも内容的にも格段と豊かなものとなっていきました。

2. 読める週報、読みたくなる週報

天野牧師のすごいところは常により良い週報を目指し、「こうしてみてもはどうだろう」と思ったことは躊躇なく試したことです。週報の内容や構成だけではなく、スタイルや技術的なことも含めてそれは言えます。人並外れた孔版技術を身に付けていながら、1967、68年（昭和42、43）頃には和文タイプライター⁵に挑戦し、それを使って週報を作成したこともありました。オフセット印刷などという便利な機器にも関心を寄せ購入しています⁶。B5判用紙を横に用い縦書きで表面（おもてめん）だけの週報スタイルにしてみたり、また最初のスタイルに戻してみたりと、試行錯誤を繰り返すことを恐れませんでした。B4判用紙を縦に裁断し二つ折りする様式、つまり紙面としては、「B6横×4頁・横書き左開き」という独特の週報スタイルを編み出したのは1970年（昭和45）後半のことです。週報コンクールで特選を受賞したのはこのスタイルの週報です。その後もページ数を倍増し8頁にしてみたりと、工夫を怠りませんでした⁷。豊かな内容を盛り込んでいたために、どうしてもかなり小さな文字になってしまいますので、ページ数を増やすことで文字の大きさを改善しようとしたのです。天野牧師が「読める週報、読みたくなる週報」を目指し、週報作りに愛と情熱を注ぎこんだのは、「週報は伝道・牧会の力強いツールだ」という牧師としての確信があったからなのでしょう。

3. 共同作品としての週報へ

天野牧師が1984年（昭和59）7月で退任し、12月に金子純雄牧師が仙台教会に着任するまでの数カ月の専任牧師不在期間、執事たちが交代で天野式スタイルで週報の作成を担当しました。金子牧師着任後、天野式週報スタイルをなんとか継承したいと考えた私（小林）は、使命感をもって週報作成担当を買って出て何カ月間か挑戦しました。しかし、天野式週報はカミワザ的な孔版技術があつてこそ生きたものになり、読み易いものにもなります。残念ながらその技術を持ち合わせていない以上、まずは読み易さを優先すべきだと判断し、翌年の10月から紙面を2倍の大きさ（B4判用紙横二つ折り・横書き左開き）に変更することにしました⁸。この変更には伏線がありました。専任牧師不在期間に執事が交代で週報作成にあたった際、一人の執事は身体的な事情で細かな文字を書く作業が困難で、天野式週報スタイルの2倍の大きさの用紙で作成せざるを得ませんでした。これに対し教会のご婦人たちの間では、「この大きさの方がずっと読み易いわ」という声が囁かれていたのです。

その後ワープロやパソコンの発達で、週報作りも大きく様変わりしていきます。1987年（昭和62）1月からは全頁ワープロで作成するようになり、やがてパソコン時代の到来で週報作成担当者も向井田洋さん（1993～2011年）⁹、渡邊義人さん（2011年～現在）¹⁰と変わり、また2009年（平成21）1月からは、週報紙面はA4縦×4頁（A3判用紙横二つ折り）に変更されます。

さて、天野時代の週報はカミワザ的週報でしたが、現在の週報はそれに優るとも劣りません。それは何故かといえば、現在の週報は、大勢の教会員が力を合わせて毎週作り上げている「共同作品」だからです。礼拝プログラムや報告の原稿を整える牧師、北四番丁通信の執筆を担当する多くの教会員、毎週の献金を集計する財務委員の面々、毎週の礼拝出席者数を正確に記録する総務委員、週報の原版をパソコンで作る担当者、緻密な校正を担当する執事と教会員の面々、印刷をして週報ボックスへ配布する方、出来上がった週報を教会に来ることのできない会員宅へお届けする方、等々。現在の仙台教会の週報は共同作品として作り上げられ、用いられています。この点において私たちの教会の週報は、あの「カミワザ的週報」にも決して引けを取ることのない「宝物的週報」となっているのです。但しここで満足せず、「週報は伝道・牧会の力強いツールである」ことを皆で自覚し、恐れずに試行錯誤を繰り返し、更に良い週報を目指してまいりましょう。（文責：小林孝男）

1 「仙台教会歴史年表原表」のファイルの中に「週報保管状況」がまとめられている。教会には 1977 年からの週報しか保存されていないが、個人保管のものを含めれば 1963 年まで遡って週報を確認できる。

2 週報(1975/01/26、1979/11/11)

3 復刻版週報_週報及び復刻版について
この中に週報に関する天野五郎牧師のコメントが書かれている。

4 同上

5 入手経緯は不明

6 週報(1980/09/21) 幼稚園で購入。会堂脇の小室に設置される。「今後ここが盛んな活動が予想される伝道文書発行の印刷所となる」、と天野師は牧会通信の中で語っている。

7 週報(1981/06/14、1982/01/10)

8 週報(1985/10/06)

9 週報(1993/06/13)

10 週報(2011/03/27)



天野式週報スタイルの1 頁目

仙台教会の歴史シリーズ その15
バプテストとなっていく歴史

はじめに

「艱難汝を玉にす」(かんなん・なんじを・たまにす)という言葉があります。人は多くの困難を乗り越えてこそ立派な人物になる、という意味です。中国の古典に出てくる言葉か、あるいは戦国武将の誰かの言葉なのかと思っていましたが、広辞苑いわく英語のことわざからきているそうです。「Adversity makes a man wise.

(逆境は、人を賢明にする)」ということわざは元々フランス起源らしいのですが、このことわざの日本語の表現が、「艱難汝を玉にす」となるようです。

本音を言えば、誰だって艱難などに遭遇しない順風満帆な人生を望みます。ただ、そううまくいかないのが私たちの現実です。艱難は嫌なこと、避けたいことではありますが、どうも全否定すべきことでもないようです。「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」(ローマ 5:3-4)、あるいは「火のような試練を…喜びなさい」(Iペトロ 4:12-13)などと、聖書は確信を持って語っているからです。

1. 歴代牧師と専任牧師不在期間

仙台教会の歴代の牧師とその在任期間、そして前任者が退任してから後任者が就任するまでの間に生じた「専任牧師不在期間」¹は、次の通りです。

長崎直得	牧師	1953/02/22~1954/03	在任	1年	→専任牧師不在期間	2カ月 ²
関谷定夫	〃	1954/06/02~1957/03	〃	2年10カ月	→	〃 0カ月 ³
大沼上	〃	1957/04/01~1963/03	〃	6年	→	〃 3カ月 ⁴
天野五郎	〃	1963/07/07~1984/07	〃	21年	→	〃 4カ月半 ⁵
金子純雄	〃	1984/12/13~1998/03	〃	13年3カ月	→	〃 1年 ⁶
青木康弘	〃	1999/04/04~2002/07	〃	3年3カ月	→	〃 8カ月 ⁷
山下誠也	〃	2003/03/26~2010/05	〃	7年2カ月	→	〃 1年3カ月 ⁸
小河義伸	〃	2011/09/04~2020/09	〃	9年	→	〃 8カ月 ⁹
宇都宮毅	〃	2021/06/01~現在) ¹⁰	〃	3年6カ月	※2024年12月現在	

天野五郎牧師以前のことに関しては資料が乏しく、専任牧師不在期間の教会の様子はほとんど分かりませんが、不在期間が短かったことや、グラント宣教師が強いリーダーシップを恐らくとっておられたと考えられますので、教会運営に関してはさほど支障はなかったのではと想像します。

2. グラント宣教師夫妻の休暇帰国の中で

但し、1955年（昭和30）から56年（昭和31）にかけては、牧師ではなく頼りの宣教師が不在の特別な年でしたので話は別です。当時の宣教団では、宣教師は5年間日本で働いて1年間休暇帰国するというシステムをとっていました。それに従い、1950年（昭和25）8月に来日したグラント宣教師夫妻が第1回目の休暇帰国を得たのは、1955年春です。この1年間は、教会にとっても幼稚園にとっても試練の1年だったことでしょう。宣教師夫妻の休暇帰国直前の3月25日に仙台教会は教会組織を行い¹¹、前年4月には幼稚園を開園¹²しています。いずれもグラント師やキャサリン夫人が全面的に関わり、大きな責任を担い実現した大事業です。その大黒柱が不在となったのですから、教会員や幼稚園職員、そして特に前年に赴任したばかりの関谷定夫牧師は、大いに戸惑い苦勞したはずです。『献堂四十周年記念誌』に関谷牧師が「仙台教会草創時代の思い出」と題する一文を寄せてくださっていますが、その中で次のように述懐しています。

「一番困ったことは、グラント先生が一年間休暇で帰米された時、小生が園長代理をしましたが、それまでグラント先生個人の経営だったので、急に経営資金が底をついてしまって、先生方の給与が保育料だけでは十分払うことができず、ベースアップの要求にも応じられなくなり、中に入った父母会の方々からも吊し上げにあったことです」。

この大変な状況を、具体的にどのように切り開いていったのかは不明ですが、宣教師に頼れない以上、自分たちで何らかの解決策を見つけていかなければなりません。教会員たちも必要に迫られ色々と知恵を出し合いながら、幼稚園のことや教会のことを真剣に考えざるを得なかったはずです。そしてその様なことを通しながら、自分たちの教会のことを自分たちの事柄として考え、自分たちが為すべきことを為すというバプテスト本来の姿勢が、少しずつ育てられていったのでしょう。

バプテストがどのような考えに立つ教会であるのか知識として知っていても、それだけでバプテスト教会になるわけではありません。自分たちがその知識に従って実際に生きることで、教会はバプテストになっていくのです。その意味で、宣教師の休暇帰国制度は宣教師やその家族にとって大切ですが、同時に宣教師に頼れなくなる教会にとっても、成長のための極めて重要で意味のある時間です。

3. バプテストとなっていく

天野牧師以降の時代には、牧師交代時に比較的長期間の専任牧師不在期間が生じています。宣教師の休暇帰国期間同様、専任牧師不在期間は、教会にとっては試練の時であることは事実です。同時に信徒にとっては訓練と成長の時でもあることを、仙台教会の歴史は物語っています。専任牧師が不在となっても、もちろん毎週の主日礼拝は途切れることなく守られ続けます。説教は宣教師や教会員、そして他教会の牧師や信徒にもお願いすることになります。これまで様々な方々の協力があったことを有り難く思いますが、自分自身のことを考えると教会員になった当初は、この様な時は「どこかの誰かが助けてくれる」のであり、自分が教会員として主体的に関わるべきことであるなどとは思いませんでした。天野牧師の辞任（1984年）で生じた4カ月半の専任牧師不在期間の礼拝回数と、仙台教会の教会員が礼拝で説教を担当した回数から割合を出すと、教会員の説教担当率は16%であり、外部からの協力が当たり前のような感覚を、私を含め教会員たちは持っていたと言えるでしょう¹³。

しかし、その後40年近くの間、私たちの中にバプテストとしての信仰の自覚が、少しずつ育まれてきたように思います。その証拠に、金子牧師辞任（1998年）後の1年間の専任牧師不在期間における教会員の説教担当率は55%に跳ね上がり、青木牧師辞任（2002年）後の8カ月間は69%、山下牧師辞任（2010年）後の1年3カ月間は83%、そして小河牧師辞任（2020年）後の8カ月間は、主日礼拝のなんと96%を、仙台教会の教会員が説教を担当しました。

信徒一人ひとりが自ら聖書を読み、聖霊の導きのもとでの真摯な学びと祈りの中で御言葉を解釈し、示された内容を信仰の言葉として自覚的に語り、皆でその御言葉を分かち合いながら共に礼拝を守り教会を形成していく姿勢は、正にバプテストです。これからもバプテストとなる道を共に歩み、バプテストとして成長してまいりましょう。（文責：小林孝男）



信徒説教を担当する教会員の吉永馨さん(2020/3/29)

¹ 一般に「無牧」(牧師がいない)という言葉が使われることが多いが、ここではあえて「専任牧師不在(期間)」という言葉を使用する。なぜなら、専任牧師がいなくとも協力牧師がいる場合は、字義的には「無牧」に該当しないことになるからである。

² 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革_教会員名簿)

³ 同上

資料(1974/11/10_献堂 20 年の歩み)

⁴ 資料(2015/10/18_60 年のあゆみ) 1 頁

⁵ 週報(1963/07/07、1984/07/29)

⁶ 週報(1984/12/09、1998/03/29)

⁷ 週報(1999/03/28、04/04)、資料(2002/10/06_青木康弘前牧師辞任の経緯についての報告書)

⁸ 週報(2003/03/23、2010/05/30)

⁹ 週報(2011/09/04、2020/09/27)

¹⁰ 週報(2021/05/30)

¹¹ 『主の息吹の中で』74 頁

¹² 資料(1954/04/13_新しい型の幼稚園_河北新報夕刊)

¹³ 天野五郎牧師の辞任から金子純雄牧師着任までの 19 回の主日礼拝で、説教・証しを教会員が担当したのは 3 回のみである。他の 16 回の説教担当は、他教会の牧師や宣教師であった(金子純雄牧師 4 回、C.S.ボートライト宣教師 4 回、庄司真牧師 2 回、T.R.ウッズ宣教師 2 回、M.ウッズ宣教師 1 回、R.L.アラム宣教師 1 回、野口直樹牧師 1 回、大沼上牧師 1 回)

新たな扉が開かれるー吉岡伝道所発足 1957

はじめに

仙台教会 70 年の歴史の中で、二桁の受浸者を生んだ年が 11 回あります¹。その内の一回である 1956 年（昭和 31）の 4 月 29 日（日）に、仙台教会で 6 名の男子青年がバプテスマを受けました。「現在会員」の渡邊真人さん（当時 17 歳）や、藤沢良和さん（当時 18 歳）も含まれます。今もお元気に教会生活を送られていますので、仙台教会初期時代の「歴史よもやま話」をお伺いする機会を設けるのも有意義ではないでしょうか。ぜひ実現したいものです。

1. 吉岡伝道のきっかけー富谷での家庭礼拝

さて、その 4 月 29 日に受浸した 6 名のお一人に、阿部信行さんという青年がいました。信行さんは富谷の方で、仙台で学生生活を送る中、仙台教会に導かれバプテスマを受けました。真面目な信仰生活は、普段の生活態度にも良い影響を与えたようです。彼の母親阿部花子さんはご子息の変化に感激し、1956 年（昭和 31）のある日曜日、仙台教会の礼拝に出席され、礼拝後に関谷定夫牧師とグラント宣教師に面談を申し出られました。そして信行さんに深く心を寄せ、お世話や指導を行っていた両師へ感謝の思いを伝えると同時に、こんな申し出をされたのです。「関谷先生とグラント先生がわが家で礼拝を行うことは出来ないでしょうか？ 私たちの近くには教会が全くないのです」²。

花子さんはクリスチャンではありませんでしたが、キリスト教に大変興味を持っておられました。またご主人の阿部利吉さんは、富谷の自宅で開業しておられた医師で、中学時代³にキリストを信じる信仰に導かれたものの、その後はアクティブな信仰生活は送っておられなかったようです。しかし、キリスト教には強いシンパシーを抱いていました。ご子息のバプテスマをきっかけに、信仰の灯が再び明々と輝き出し、家庭礼拝の申し出に繋がったのではないかと想像します。

グラント宣教師と関谷牧師は、これは自分たちが祈り求めてきたことに主がお応えくださり⁴、新しい働きの方を示して下さったのだと確信し、喜んでその申し出に応じることにします。最初の訪問の際は、あまりもの悪路で車の車軸まで泥に埋ま

り、近所の農家にお願ひし馬で車を引き出してもらい、ようやく富谷の阿部宅にたどり着いたということです。二回三回と家庭礼拝を続ける中で、阿部夫妻は患者さんやご近所の方にも主を証しして、人々を集会へ招くようになりました⁵。

2カ月ほど家庭礼拝を続けた後、利吉さんは近隣の大きな町である吉岡に病院を移転させることとなりますが、富谷の阿部宅で行ってきた集会も吉岡に移動し継続することを望んでいました⁶。当時吉岡の人口は2万人以上あったようですが、これまで一度もキリスト教の宣教が行われたことのない町でした。「主が自分たちを吉岡の人々のところに遣わそうとしておられる」ということを確信したグラント宣教師と関谷牧師にとって、利吉さんの希望を叶えることはイコール、主のご計画に従うことそのものでした。

2. 吉岡での集会開始

吉岡に新病院が開設されたのは1957年（昭和32）2月頃のようにです。その開所式で阿部利吉さんは病院長として挨拶のスピーチを行います。その内容はクリスチャンとしての力強い証し以外の何ものでもありませんでした。普通に考えれば場違いな挨拶ということになりますが、一人のクリスチャン医師として、吉岡に開設した新病院の役割と使命を明確にしたのです。次のような内容でした。

「大戦中、私はオランダをはじめとする、様々な国の兵士が収容されていたジャワ島の捕虜収容所で働いていました。捕虜が何よりも必要としている薬を入手するため、私は最善を尽くしました。時には足りない貴重な物資を密輸することさえありました。そのため私は懲戒を受け、昇進の望みがなくなりました。軍籍を離れた時、私の階級は入隊時と同じだったのです。私はクリスチャンだったので、助けを必要とするすべての者を助けたかったです。私は皆様が私を必要とする時、いつでも、どこでも、助けるために吉岡に来たのです」⁷。

新病院での礼拝は、毎週病院の小さな待合室で行われました。ただ病院の業務が拡大し患者の数も増えるとともに、待合室には常に人が出入りするようになったため、どうしても集会のための別な建物が必要となり、そのことを覚え祈り始めました。そしてその祈りを主はお聞き届けくださり、病院の近くの土地の所有者が、教会が吉岡での日曜学校や幼稚園開設にも関心を抱いていることを知ると、特別割引価格を提示してくれたのです。また仙台に駐留していた米軍の中の小さなバプテス

トのグループは、教会の特別な事業のために 500 ドルの献金を約束してくれていたため、その資金と仙台教会や個人の資金とを合わせて土地を購入することができました。会堂は駐留軍の建物を改造し移設することとし、その費用のやりくりには閉鎖間近の駐留軍に残っていた最後のバプテスト信者ハンク（ヘンリー・フケイ准尉の愛称）とその奥様が、献身的な協力をしてくださいました⁸。またハンクの上司は、駐留軍の活動縮小に伴って発生する余剰備品を、キリスト教団体に払い下げることができるよう取り計らい、補給担当役であったハンクは、バプテストへの払い下げに関して大いに便宜を図ってくださいました⁹。

このようにして 1957 年（昭和 32）5 月に吉岡に会堂が与えられ、幼稚園が開設され、そこをベースに吉岡伝道が本格化していきます。但し、仙台教会が吉岡伝道所を設立した正確な日付や教会での総会手続きに関しては、記録がなく特定できませんでした¹⁰。なお阿部夫妻と佐々木タミ子さんのバプテスマは、1958 年（昭和 33）10 月 5 日（日）に行われました¹¹。吉岡伝道所最初の正式メンバーの誕生です。

3. 無医村地区での医療伝道の試み

仙台教会の古い週報に目を通していた時、吉岡伝道に関連するある記事が目にとまりました。それは 1964 年（昭和 39）5 月 24 日の週報です¹²。報告欄に次のように書かれています。

「今日の礼拝后（2 時~5 時）吉岡近在の無医村・嘉太神地区の人々のために、第一回医療伝道を行います。これは、阿部兄・吉永兄らの発意と協力による愛のわざであって、阿部夫人、牧師の他、乗車人員の関係で、今回は下記に見られる諸兄弟に限られることになりましたが、今後のためにもぜひこのために御加禱をおねがいいたします。

診療 阿部利吉兄（医師）、吉永馨兄（医師）、児玉茂美兄（医学生）

看護 阿部姉、斎藤民子姉（看護学生）、菊田瑠美姉（大学生）

顧問 鎌田栄子姉（園教諭）、天野牧師」

その後何回継続したのかは、残念ながら週報で確認することは出来ませんでした。仙台教会が無医村での医療伝道に携わった歴史を持つことに、大いに感銘を受けました。このことも吉岡伝道史のひとコマとして、忘れずに語り伝えていきたいものです。（文責：小林孝男）

1 年毎の受浸者数は「日本バプテスト仙台基督教会歴史年表の原表」参照
年間二桁の受浸者が与えられた年は具体的には、幼稚園が開園し新会堂も建築された 1954 年(昭和 29)23 名、教会組織を行った 1955 年(昭和 30)20 名、翌 1956 年(昭和 31)17 名、吉岡伝道を開始した 1957 年(昭和 32)16 名。天野五郎牧師時代が始まった 1964 年(昭和 39)11 名、南光台伝道所を開設した 1966 年(昭和 41)12 名、1967 年(昭和 42)13 名、1968 年(昭和 43)10 名。金子純雄牧師時代に大富伝道所が発足した 1992 年(平成 4)10 名、1993 年(平成 5)13 名、そして日本バプテスト連盟信徒大会に、仙台教会から青年伝道隊を派遣した 1994 年(平成 6)13 名

2 『主の息吹の中で』68~69 頁

3 資料(1987/11/15_東北学院時報 445 号_阿部利吉逝去) 東北学院中学部出身

4 記念誌『ねむの木に寄せて』(吉岡バプテストひかりの園運営員会、2011)33 頁
この記念誌に寄稿した大槻國彦師(志免バプテスト教会名誉牧師)によれば、グラント宣教師は大槻師の故郷鶴巢村(当時)で伝道集会を開催したり、また同村に幼稚園設立を計画したりと、県北での伝道構想を祈り求めているようである。

5 『主の息吹の中で』69 頁
また、『ねむの木に寄せて』32-33 頁には、大槻國彦師がまだ少年の頃、急病で倒れた祖父のために、鶴巢から馬をひいて富谷の阿部利吉医師宅まで往診をお願いに行ったエピソードが書かれている。

6 『主の息吹の中で』69 頁

7 同上 71 頁

8 同上 74~75 頁

9 同上 76 頁 遊具一式、折りたたみ椅子 60 脚、子供用の椅子とテーブル、ピアノ、小さな講壇等の払い下げを受ける。尚、仙台の駐留軍は 1957 年 11 月までに完全に撤退した。

10 吉岡伝道所設立は、会堂が与えられ、また幼稚園が創立された 1957 年(昭和 32)5 月頃と考えるのが妥当であろうが、仙台教会には吉岡伝道所設立に関する記録が一切保存されていないので断定はできない。
1957 年といえば、仙台教会は誕生 2 年目であり、まだまだ内部を整えることに勢力が注がれていた時期である。また、関谷定夫牧師から大沼上牧師へとバトンが渡された時期でもある。仙台教会には外に目を向けるだけの信仰的な余裕はまだ十分には備わっておらず、吉岡伝道に関してはグラント宣教師と阿部利吉夫妻の信仰的熱意が先行し、教会としては信頼をもって二者に委ねるという状況があったのではないだろうか。そしてそのことが、後の時代に教会と伝道所間に微妙な距離感が生じてしまう遠因となった、と考えるのは的外れだろうか。

11 『主の息吹の中で』69 頁には、「二人は数カ月後に共にバプテスマを受け・・・」と記載されている。富谷での家庭礼拝開始後「数カ月後」ということであれば、1956 年後半から 1957 年初めということになるが、ここでは仙台教会の教籍記録に従うこととする。

12 週報(1964/05/24)



吉岡伝道所の会堂(1957 年献堂)

仙台教会のDNA—大沼上牧師就任 1957

はじめに

DNA（デオキシリボ核酸）とは、生物の遺伝情報を記録する物質です。このDNAにより、生物の姿形や体質などを決定する情報が、親から子へ、更にそのまた子の世代へと引き継がれていきます。その結果、世代を越えて同じ形質が維持されていくことになるわけです。

比喩的に言えば、仙台教会にも固有のDNAがあるのでしょうか。教会は仙台にたくさんありますが、それぞれの教会は違いや特徴を持っています。私たちの教会では当たり前になっていることも、他の教会からは新鮮に見えたり、特殊に見えたり、変わっていると感じられたりすることもきっとあるのでしょうか。70年の歴史の中で自然に形成され受け継がれてきた、仙台教会固有のDNAのなせる業といったところでしょうか。

1. 大沼上牧師の就任と人物像

第2代牧師関谷定夫先生は、1957年（昭和32）3月¹をもって仙台教会の牧師を辞し、再び学究の道²に進むこととなります。ご本人から湧き上がったたつての願いだったのか、あるいは西南学院からの強い要請があったためなのかは不明ですが、仙台での働きはまだ3年足らずであり、やっこの地にも慣れ、教会員たちとの絆も深まり、青年たちからは敬愛の的³とされ、また帰国休暇明けのグラント宣教師との協働も、ようやく軌道に乗ってきた時期であったはずです。もちろん教会員たちの戸惑いは大きかったと思われます。そのような状況を一番よく把握されていた関谷牧師は、ご自身の辞任により大きな混乱が極力生じないよう、牧師として様々な配慮を事前に十分に行ったことでしょう。

関谷牧師の牧会的配慮の一つは、西南学院とのコネクションを有効に用い、後任人事を事前に時間をかけて準備したことです。前年に夏期奉仕神学生として大沼上神学生を仙台教会に迎えていることから、そのことは推測できます⁴。そのお陰で空白期間無しでスムーズに牧師の代替わりが行われ、1957年（昭和32）4月に大沼上牧師⁵が仙台教会の第3代牧師として就任することとなります。ちなみに、後に大

沼師からバトンを受け継ぎ第 4 代目の牧師となる天野五郎先生は、この年、福島での開拓伝道に着手されています⁶。

さて、大沼牧師はどんな方だったのでしょうか。その人物像について詳細にまとめて記したものはありませんが、いくつかの資料の中に師の人となりの一端を見出すことができます。

大沼牧師は「1924 年（大正 13）12 月 3 日山形県新庄に生まれ」⁷ました。「元日本軍の兵士で、戦争終結時に広島に駐屯」⁸していましたが、「幸運なことに、彼の部隊は七万人以上の生命を奪い、戦争を終結させることになった原爆の被爆地から離れていた」⁹とのことです。大沼師が戦時中の体験をグラント宣教師に語る時、「降伏前の最後の数カ月、常に飢えていたことを毎回のよう」¹⁰話していました。兵士の多くは根っこや木の皮を食べ、飢えをしのごうとしていました。それだけ食糧不足は深刻で、兵士たちは飢えの中で極限の状態にあったのです。

20 才前後の時期に兵士として味わった過酷な体験は、大沼青年の価値観や人生観に、決定的な影響を与えたことでしょう。入信と献身の詳しい経緯はよく分かりませんが、戦後、大沼青年は神学校に入り、牧師となるための教育と訓練を受けることとなります。そして 1957 年（昭和 32）3 月に「西南学院大学文学部神学科・専攻科」¹¹を修了し、その後すぐに、ご夫人玲子さん¹²と共に新任の地・仙台に向かいました。仙台教会の牧師に着任した時 32 才で、少し遅めの牧師デビューでした。

『献堂 10 周年記念文集』（復刻版）の中で、編集子はこう語っています。「ヌーボーとした厳しい信仰を秘められた大沼牧師が夫人と共に来仙され、師のいくつかの実験的な牧会指導が始められた」¹³。また同じ文集で、ある教会員は大沼牧師について次のように語っています。「その御働きを一言で申せば『主にある正しき農夫』であったと云えましょう。自らは新しき畑を耕し、良き種をまき、古き畑よりは迷いの芽を摘み、雑草を抜き、さまたげの枝をはらい、つまづきの石を取り捨てました。そして、常に曇りなき太陽の光を畑の土に導かれました。ために、弱い芽や伸び過ぎの枝には耐え得ない厳しさを覚えたことありましょう」¹⁴。また、仙台教会出身の大槻国彦牧師は、自らの按手礼拝で行った説教の中で、大沼牧師についてこう語ります。「大沼先生はやや厳しい牧師で、私たちのだらしない気ままな教会生活を注意する説教を語りました。牧師が厳しかったため、ある教会員は教会を離れました。しかし、教会員として、信仰生活にしっかりとした訓練と鍛錬を受けていたため、

これは私にとって良いことでした」¹⁵。

また、大沼牧師ご自身が仙台教会献堂 10 周年の記念文集に寄せてくださった文章の中にも、その人柄や信仰、信念がにじみ出ています。「ひとつ残念に思うことは、あの会堂が実に素晴らしい会堂であるにもかかわらず、まるっきりのアメリカ式であることである。・・・アメリカ式はアメリカ式としての、たしかに立派な信仰告白的会堂形式を具現している。だがそれは、アメリカの信仰告白の日本への主張であって、日本人のわれわれの、ここと、そこでの告白の具現とはいいい難かった」¹⁶。また、献堂 40 周年記念に寄せての文章では、資本主義経済の発展の様態と尺度を、そのまま御業の進展の様態と尺度として無自覚に流されていくことへの危惧を述べた後、こう続けています。「右記の憂いは、戦前のわが教会が天皇制軍国主義に、ほとんど無自覚的に埋没して行ったのと一脈通じる。一脈と言ったのは、一脈に過ぎないのであって、今日、教会を盲目にしようとしている人間生存の現実は、それとは比較することの出来ない根深さと広範な領域を持っているからである」¹⁷。

2. 仙台教会の DNA として

上記のそれぞれの発言を聞くと、確かに厳しい牧会者であったとの印象を受けます。遅咲きの新米牧師としての気負いもあったのかもしれませんが。教会員は新しい牧師を前任者とどうしても比較しがちですが、大沼牧師の厳しさを伴った信徒訓練は、関谷前牧師に慣れ親しんでいた教会員には、まさに「実験的な牧会指導」と映ったのでしょう。更に教会員は、大沼牧師が主張する新しいものの見方、すなわち聖書的な視点と同時に社会科学的な視点を持つことの大切さということについて、大きな戸惑いを持ったことでしょう。しかし、天皇制軍国主義の中で強烈な体験をした大沼牧師にとって、このことは信仰的に極めて重要な事柄でした。社会の問題性をしっかり見抜く目を持つことなしに、「信仰、信仰」とばかり言って突き進むことの危うさを、戦前の日本の国家体制の中で骨身にしみて体験してきたからです。

教会員の間で直ぐには理解されなかったかもしれませんが、しかし教会のこれまでの歴史を振り返る時、大沼牧師の考え方は仙台教会の DNA として、私たちの中にもしっかり受け継がれていると言えるのではないのでしょうか。(文責：小林孝男)

-
- 1 資料(1974/11/10_献堂 20 年の歩み)
 - 2 資料(1995/03/26_献堂十周年記念文集_復刻版_献堂四十周年誌に収納) 45 頁
 - 3 同上
 - 4 資料(2015/10/18_60 年のあゆみ・抜粋) 1 頁
 - 5 週報(1984/11/11)、資料(1974/11/10_献堂 20 年の歩み)、資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌) 67 頁、資料(2015/10/18_60 年のあゆみ) 1 頁、週報(2021/10/24) 1924/12/3 誕生、仙台教会牧師期間は 1957/4～1963/3。その後八幡教会の牧師に就任。2021/10/20 に召天、享年 96 歳。
 - 6 週報復刻版・福島(1957/06/02)
 - 7 週報(1984/11/11)
 - 8 『主の息吹の中で』 86 頁
 - 9 同上
 - 10 同上
 - 11 週報(1984/11/11)
 - 12 資料(2015/10/18_60 年のあゆみ・抜粋) 1 頁 戦時疎開で宮城学院に在籍
 - 13 資料(1995/03/26_献堂十周年記念文集_復刻版_献堂四十周年誌に収納) 45 頁
 - 14 同上 58 頁
 - 15 『ワース・C・グラント師の日本観』 174-175 頁
 - 16 資料(1995/03/26_献堂十周年記念文集_復刻版_献堂四十周年誌に収納) 46 頁
 - 17 資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌) 7 頁



大沼上牧師(前列左から二人目)

命のパンを食すー石井はるをのバプテスマ 1958

はじめに

私の朝食の主食はパンです。8枚切りの食パン2枚では少し多すぎますし、6枚切り1枚ではちょっと物足りません。ということで今は5枚切りの食パンを買い求めています。5日間食べ続けるためできるだけ賞味期限の長いものを選んでしまいます。SDGs（エスディージーズ、持続可能な開発目標）の観点からは問題です。フードロスを少なくするために、賞味期限が短いものの方から消費すべきなのですが、いざとなると、どうしてもエゴが頭をもたげてしまいます。

食パンにも色々のメーカーの製品がありますが、先日スーパーで普段食べているより40円も安い5枚切りの食パンを見つけ購入しました。味わってみてがっかり、正に「安かろう悪かろう」の典型でした。とは言え、世界にはその日一日を生きるための食べ物もなく、飢えに苦しんでいる人々が大勢いる現実があります。何を基準に自分の普段の生活の満足度をはじき出せばいいのか、大いに考えさせられてしまいました。

1. 石井はるをのバプテスマ

歴史シリーズ16で書いた通り、1958年（昭和33）10月5日（日）に、吉岡伝道所の阿部利吉・花子夫妻がバプテスマを受けましたが、その日もう4名が受浸しました。その内の一人が石井はるをさんで、お手伝いとして宣教師館でグラント宣教師一家のために献身的に働いた女性です¹。グラント宣教師はその著書の中で、スペースを割いて石井はるをさんについて紹介しています²。長くなりますがその部分を以下に引用します。

『ババちゃん』とは、キティ³が私たちのお手伝いさんの石井さんにつけた呼び名だった。

かつてこれほど献身的な乳母を持った子供は、王家でさえいなかっただろう。そして、これほど子煩悩な祖父母もかつていなかっただろう。さらに、これほど甘やかされた赤ちゃんもいなかった、と付け加えても良い。

石井さんは三年近く私たちのところで働いた後、キリストを受け入れた。その間、

私たちは毎日彼女のために祈り続け、可能なあらゆる方法で彼女に証しを続け、同時に彼女に決断をせまる圧力をかけないようにした。日本における雇用者と被雇用者の関係を考慮し、私たちは彼女が私たちが喜ばせるためだけに決断をするようなことを避けたかったのだ。

仙台における働きの中で最も嬉しかった体験の一つが、ある日曜日の朝、朝食後に『今日教会の皆様の前で信仰告白をいたします。他の者と共に、私にも洗礼を授けてください』と彼女に告げられたことだった。私たちは神が彼女を救われることを確信していたため、遅かれ早かれこのことが起きることを知っていた。私たちにとっては、子供たちの信仰について考えていたこと同様、確定事項だったのだ。しかし、それでもこのような状況でそれが起きるとは予想だにしていなかった。朝の礼拝後、彼女は真心から輝かしい証しを一切の原稿なしで行った。新しい信者は回心に至るあらゆる事項を述べようと必死で事前に原稿を書くのが普通である。石井さんの証しは、私がこれまで聞いた中では、完全にその場で語られた数少ない証しだった。

彼女の証しの中で、初めて聖書を手にしたのが、米軍の占領初期に仙台に駐屯していた GI からだったと語った。彼は彼女が初めて見た米軍兵士で、彼女は彼が予想していた野蛮人ではなかったことに驚いた。日本の当局は人々にあまりにおぞましい米軍兵士の姿を伝えていたため、皆実際に見ることになったものに対する準備ができていなかったのである。われわれの兵士がチョコレートとガム、こぼれ落ちるような笑みを携えて来た時、田舎に疎開していた若い女性が家に帰ることになった。われわれの兵士は少し前までは恨み連なる敵だった者に対し、略奪と強姦ではなく、援助を始めたのだ。石井さんはこの体験を忘れることができなかった。その後、彼女は何名かの宣教師の家族の元で働き、約四年後に経験を通して聖書が語る素晴らしい愛と許しとを見出したのだ。多くの日本人がするように、彼女も聖書にある教えを確認するため、クリスチャンを自認する人々の生き方を観察した。われわれも彼女の観察に気づいていた。そのため、私たちが彼女をがっかりさせたり、救いの扉の前にあるつまずきとなったりしないよう、さらに祈るようになった。

彼女の回心は、私たちの家では本当に祝福の時であった。娘たち、とくにキティーが来る前は彼女の『一番娘』だったデボラは、彼女の公の信仰告白の知らせを聞き、喜びの涙を流しながら彼女を抱擁し、キスをした。私たちはその後も優れた家

庭の手伝い手に恵まれたが、『ババちゃん』の穴を埋めることができる人は誰もいなかった。何故なら、彼女は単なる勤勉な働き手ではなく、私たちがより日本人を理解する上で優れた助言者であり、日本人とやりとりをする中で無作法を行う可能性から私たちが何度も救ってくれた。彼女はいろんな意味で、東洋と西洋との懸け橋であった」。

2. 同時代を生きる

北四番丁と上杉山通（かみすぎやまどおり）の角、ちょうど勝山公園の道路向かいに、美味しいパンで人気の石井屋があります。比較的広い駐車場はいつも満杯で、交通整理をする係も置いているほどです。昔の店は、現在の場所から少し離れた上杉山通小学校のすぐそばにありました。もともこの店は、戦前の 1928 年（昭和 3）、伊藤三蔵が屋号を「石井屋」として創業した和菓子店でした⁴。そして戦後少し経った 1954 年（昭和 29）に、二代目店主伊藤良三がパン作りを始めます⁵。まだ日本ではパン食が一般的にはなっていませんでしたので、色々ご苦労もあったことでしょう。しかし、日夜努力を重ねながら様々な困難を乗り越え、仙台でも評判のベーカリーへと成長しました。この石井屋と石井はるをさんとは繋がりががあります。初代店主伊藤三蔵はもともと石井家に生まれたのですが、養子となり伊藤家を相続します。はるをさんは三蔵の実の兄弟のもとに嫁ぎ石井姓となった方ですので、二代目店主良三から見れば「義理のおば」に当たるわけです⁶。

私たちの教会は、グラント宣教師により 1954 年（昭和 29）に幼稚園を開設し新会堂を建て、1955 年（昭和 30）3 月に教会組織を行い、日本バプテスト仙台基督教会として歩み出しました。つまり、1954 年からパン作りを始めた石井屋と仙台教会は、同時代を生きているのです。そして両者とも「パン」を大切にしています。石井屋は人々に愛される「美味しいパン」を作ることを大切に、仙台教会は「命のパン」（ヨハネ 6：48）であるお方をたゆまず宣べ伝えることを大切にしています。

どんなに美味しいパンを食しても、やがて空腹になります。またそのパンは魂の飢えを満たすことは出来ません。しかし、私たちの「パン」は違います。何故なら私たちが宣べ伝えている「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」（ヨハネ 6：51）からです。（文責：小林孝男）

¹『主の息吹の中で』88 頁に、「石井さんは三年近く私たちのところで働いた後、キリストを受け入れた」とある。石井が受浸したのは 1958 年 10 月 5 日、その後グラント宣教師一家が仙台を離れ次の任地に向かう翌年春まで、石井はグラント家で働いていたと考えるのが自然だろう。と言うことは、石井はるをが宣教師館で働いた期間は、通算で三年半ほどであったのだろう。

² 同上 87~89 頁

³ // 87 頁 1958年5月29日生まれ(京都バプテスト病院にて)

⁴ <https://www.ishiiya.com/ishiiya/index.html> 三蔵は 1896 年(明治 29)に石井儀三郎の三男として生誕。後に仙台藩士族、伊藤大助の養子となり、伊藤家の家督を相続する。屋号の由来は、創業者伊藤三蔵の兄弟が石井姓の為、あえて「石井屋」とする。三蔵はもともと松月堂で和菓子作りを修行し、大正の初めの頃は和菓子の卸業を営んでいた。

⁵ <https://www.ishiiya.com/ishiiya/index.html>

⁶ 石井はるをは何人かの宣教師のもとでお手伝いとして働いたとのことなので、パン作りのノウハウをその際に獲得した可能性もある。そして身に着けたパン作りの秘訣を甥にあたる伊藤良三に伝授し、それが「石井屋のパン」に繋がるなどというドラマがあれば嬉しいが、はたしてどうだったのであろう？



昔の石井屋(同店のホームページより)
上杉山通と昔の石井屋、右下の三角部分は小学校校地の一部

教師兼協力者－佐藤ミツとは何者か（1）

はじめに

宣教師は派遣された国での働きを本格的に開始する前に、まずはその国においてその国の言語を習得するための集中的な学習を2年間ほど行います。それを修了してから具体的な働き場所へ派遣されるわけです。

2年間日本語の語学研修を受けたとはいえ、日本語での説教は大変です。流暢な日本語で説教をする宣教師もいますが、そこまでのするには語学センスと共に長年の学習と経験が必要です。最初は当然ですが、片言の日本語での説教しかできません。会衆は忍耐と愛をもって聞き取ろうとします。ただ、日本語として全く意味が通じない内容であれば、聞き手がどんなに努力してもどうしようもありません。そのようなことが起こらないように、宣教団は宣教師が独自に「教師兼協力者」を雇うことを認めていました。その費用は必要経費となるのでしょうか。「教師」という面では、何よりも日本語の教師として、宣教師が日本語の説教原稿を書くのを手伝ったり、出来上がった原稿をチェックしたり、読み方や発音を指導したりする役割です。「協力者」という面では、様々なところでの出番が待っていたはずで、日本とアメリカでは文化も習慣やマナーも異なります。日本の流儀を身に着けないと、相手とのコミュニケーションがスムーズにとれなかったり、相手に不快な思いをさせてしまったりということになりかねません。そのようなことにならないように「協力者」がお手伝いするわけです。また社会のシステムも日本独特のことがありますし、役所に何か書類を提出するにしても、外国人にはなかなか勝手が分からないでしょうから、そのような時も「協力者」の出番となります。

1. グラント宣教師夫妻の教師兼協力者

グラント宣教師夫妻の場合も勿論そうでした。1950年（昭和25）に来日してから2年間の語学研修を経て、1952年（昭和27）に仙台に派遣され、開拓伝道に着手することになりますが、グラント宣教師夫妻も教師兼協力者を仙台での働きのために雇っていました。「佐藤ミツ」という方です。グラント宣教師は佐藤ミツの働きについて次のように語っています¹。

「佐藤さんは当時、私の説教の準備という重要任務を手伝い、優秀な言葉の先生だった。しかし、彼女はそれにとどまらず、業務上の交渉においてしばしば仲介人となり、キリスト教幼稚園における豊かな経験を背景に、この新しい働きを行う上で大切な支援を数多くしてくださった。彼女は若く経験が少ない教師の相談相手となり、キャサリンが指導要綱を作成する手伝いをし、毎月の保護者会や家庭訪問を手伝った。彼女の手伝いがなければ、幼稚園は実在することがなかったかもしれないし、少なくともあれ程短い期間にあれ程成功することはなかっただろう。(中略) 佐藤さんのようにキリストに忠実に従う者は、何回も敵対心と相まみえ、それをはねのけ、私たちの弱く、内気な信仰に刺激と挑戦を与えてくれた」。

2. 佐藤ミツとは何者か

「佐藤ミツ」はどのような人物だったのでしょうか？ グラント宣教師の記憶によれば、戦後、満州から着の身着のまま送還されたこと、満州では約 20 年ミッション病院に夫と共に勤務²していたこと、本人も夫もクリスチャンで子供がいたこと、幼稚園教諭として豊かな経験を持っていたこと等が人物像の断片として挙げられます。

これだけの情報なのですが、彼女について大胆に妄想を膨らませてみました。在仙の宣教師のもとで働くということは、少なくとも仙台にゆかりがある人物で、一定程度の教育を受け、キリスト教や聖書に関しても豊かな知識を持つクリスチャン女性であったはずで、「それならば、もしかしたら仙台の女子のミッションスクールの卒業生かもしれない」と考え、まったくあてずっぽうでしたが、まずは手元にあった『尚絅女学院 100 年史』の人名索引で「佐藤ミツ」を調べてみました。すると一カ所にその名前が出ているではありませんか。その方は尚絅女学校本科 18 回卒業生でした。勿論それだけでは、彼女がグラント宣教師夫妻に仕えた教師兼協力者であったかどうかは特定できません。「これが同一人物であれば、尚絅学院と仙台教会の両方に関わってきた私としては嬉しいのだが・・・」という思いが高まり、尚絅学院同窓会事務室で、同窓会誌『むつみのくさり』³のバックナンバーを調べ、この同窓生についての情報を集めてみました。その結果、次のことが判明しました。

(ア) 第 18 回卒業生 (1916 年・大正 5 卒業) の中に、「相墨^{アイズミ}みつ⁴」という人物がいたこと (卒業時の校長は A. ブゼル宣教師)⁵

(イ) 相墨みつの実家は岩手県遠野町石倉通であったこと⁶

- (ウ) 相墨光子 (ママ) は 1918 年 (大正 7) 頃は、仙台にあった聖公会系の青葉女学院保母養成所で学んでいること⁷
- (エ) 相墨光子 (ママ) は 1923 年 (大正 12) 頃は、東京の本郷駒込に居住していたこと⁸
- (オ) 相墨みつは 1924 年 (大正 13) に佐藤三郎と結婚したこと⁹
- (カ) 佐藤ミツは 1925 (大正 14) 頃は、満州奉天淀町に居住していたこと¹⁰
- (キ) 佐藤光子 (ママ) には二人の子供がいたこと (1928 年・昭和 3 当時) ¹¹

同窓会誌から得られたこれらの情報により、尚綱の卒業生・佐藤ミツ¹²とグラント宣教師夫妻の教師兼協力者・佐藤ミツが同一人物であると考えても、大きな矛盾は無さそうな気がしてきました。但し、勿論これだけの情報ではまだ断定できませんので、次号でもう少し詳しく調べた結果をまとめることとします。

3. 歴史は繰り返される

グラント宣教師夫妻が開拓伝道のために来仙してからの最初の 1 カ月は、宣教師館がまだ完成していなかったため、尚綱学院で働いていた二人のアメリカン・バプテストの宣教師のご厚意で、その宣教師館 (中島丁) にグラント家族 4 名が 1 カ月間もお世話になりました。また、グラント宣教師の説教準備や幼稚園の立ち上げや運営に関して、アメリカン・バプテストの宣教師が設立した尚綱女学校の卒業生が、教師兼協力者として重要な役割を果たした可能性が出てきました。更に、仙台教会設立メンバーであり、幼稚園設置の時から教諭を務めた三浦栄子さん、そして同じく設立メンバーで初代の婦人会長として貢献した莊子聡子さんは、それぞれアメリカン・バプテスト系の尚綱教会や塩釜教会から転会された方々でした。

これらのことを踏まえて多少大げさに表現すれば、南部バプテストとアメリカン・バプテストの仙台における具体的な協力関係の中で、私たちの教会が誕生したと言っているのでしょうか。私は 4、5 年前に塩釜教会や尚綱教会でかなり長期間に渡り月 1 回の説教奉仕をさせていただきましたが¹³、アメリカン・バプテストと南部バプテストの協力関係の中で生まれた仙台教会の歴史を思えば、この二つの教派が必要に応じ互いに助け合うのは当然なことと言えます。歴史は繰り返されるのです。

(文責：小林孝男)

1 『主の息吹の中で』 89~91 頁

2 「ミッション病院に夫と共に勤務」の部分には正確ではない。実際は病院ではなくミッション系の奉天医科専門学校(後に奉天盛京医科大学と改称)で、ミツは日本語の教師として、三郎は幹事として勤務していた。詳しくは次号で触れる。

3 尚綱女学校同窓会の機関雑誌として、1907年(明治40)に創刊

4 第18回卒業生の中に「みつ」(または「ミツ」「光子」という名前)の者は相墨だけである。

5 資料(1917/12/28_むつみのくさり10号) 18回卒業生集合写真

6 資料(1917/12/28_むつみのくさり10号) 85頁

7 資料(1918/11/24_むつみのくさり11号) 17頁

また、資料(年代不詳_明治・大正期におけるキリスト教主義保育者養成)で、著者(志賀智江)は青葉女学院保母養成所について以下のように紹介している。「当初日本聖公会の婦人伝道師養成の目的で明治32年に仙台にできたものであるが、大正2年に『青葉女学院』と改称して保母養成部を併設している。その教育目的は、『幼稚園保母及び将来児童を指導すべき者を養成するをもって目的となし更に幼稚園伝道事業のために特に訓練をなすものとする。』とあり、幼稚園を通した聖公会の宣教の熱意をはっきり打ち出したものである」。なお同校は1941年(昭和16)に廃校となる。『尚綱女学院100年史』163~164頁、1919年に開設された尚綱の幼稚園で相墨ミツは、教諭又は助手として勤務している。

8 資料(1923/02/15_むつみのくさり14号) 112頁

9 資料(1925/08/08_むつみのくさり16号) 120頁

10 資料(1925/08/08_むつみのくさり16号) 127頁

11 資料(1928/07/09_むつみのくさり19号) 37頁

12 『むつみのくさり』では、号数によって佐藤(相墨)の名前が、「みつ」であったり「ミツ」や「光子」であったり様々に表現がされているが、内容的には明らかに同じ卒業生のことを指す名前として使われている。どれが本名でどれが通称・通り名かは、戸籍を調べていないので判断できない。こういったことは昔はよくあったことであり珍しくはない。

13 日本バプテスト同盟塩釜キリスト教会の専任牧師不在期間、2019年6月から2020年3月まで月1回小林が説教奉仕を行った。また、日本バプテスト同盟尚綱教会においては、同教会の都合により2020年4月から2022年3月まで月1回の説教奉仕を行う。

佐藤先生
渡邊先生
内田先生
葛原先生
千葉先生
グゼン先生

岩崎先生
内村先生
中目先生
伊手先生
草刈先生

朝倉先生
高久先生
相墨先生
永井先生



前左右ヨリ
岩高岡境
本野本野野
先生先生先生
先生先生先生

中列右ヨリ
佐藤先生
星川先生
小泉先生
中瀬先生

後列右ヨリ
小池先生
小原先生
三浦先生
勝又先生

第拾八回卒業生

教師兼協力者－佐藤ミツとは何者か（2）

はじめに

仙台で開拓伝道を行い、日本バプテスト仙台基督教会設立に貢献したのは、W.C.グラント宣教師夫妻でした。そしてそのお二人の「教師兼協力者」として、働きを助け支えた女性が佐藤ミツ¹です。彼女についてグラント師は著書の中で、「キリストに忠実に従う者」²と評していますが、私たちはこれまで彼女の人物像にあまり注目することがありませんでした。もちろん仙台教会の初期のメンバーたちは、彼女の人となりをよくご存じだったのでしょうが、時の流れの中でいつしか忘れられた存在となっていました。

前号では、主に尚綱学院同窓会の機関誌『むつみのくさり』から、ミツの人となりの片鱗を発掘しました。その後、日本基督教団仙台北三番丁教会発行の『北三群像』³や逝去会員名簿（抜粋）などが入手できたことにより、ミツの人物像の輪郭がある程度明確になってきました。

1. 遠野に生まれる

佐藤ミツ（旧姓相墨・アイズミ）は1897年（明治30）1月1日に、岩手県遠野町に生まれました。その当時の遠野は「何処を向いても山又山で、何も無い文化おくれた町、ランプの生活だった」⁴とのことでした。

この町に初めてキリストの光がもたらされたのは、ミツが生まれる5年ほど前のことでした。当時神学生だった中島力三郎⁵たちは1892年（明治25）の初夏、遠野に赴き開拓伝道を行い、その活動結果をもとに、この地が有望な伝道地であることを仙台在住のアメリカン・バプテストの宣教師S.W.ハンブレンに進言します。当時、ハンブレン宣教師が岩手地区の宣教の責任者でもあったからです。同師はさっそく実地調査を行い、盛岡教会（現在の日本基督教団内丸教会）の牧師が毎月巡回伝道のため遠野に赴く手はずを整えました。1893年（明治26）のことです⁶。

ミツが小学生の頃は、神学生の佐藤卯右衛門がコンニャク屋の二階を会場に教会学校を開き、賛美歌を教え、子どもたちに聖書のお話をしていました。生徒はミツを含め大体は3名です。ミツはほとんど休むことなく教会学校に出席しましたが、歌を歌い珍しい話を聞くことは、彼女にとっては大きな楽しみだったのです⁷。

なお、ミツの母親は熱心なクリスチャンでした。どのような経緯でクリスチャンになったのかなどは不明ですが、遠野教会の会員として信仰生活を送った方です。尚綱女学校の校長を退任したブゼル宣教師が、遠野教会に赴任し熱心に活動しますが、遠野時代のブゼルの日記⁸には、しばしばミツの母親（アイズミ）が登場しています。

2. 尚綱女学校に学ぶ

ミツが仙台の尚綱女学校に進学するきっかけは、教会学校に出席していた中で与えられたのかもしれませんが。また、母親が既に信者になっていたか、あるいはまだ信仰に入っていないかとも、恐らくキリスト教にシンパシーを感じていた人物で、そのことが大いに影響したとも考えられます。相墨家が経済的にはある程度余裕のある家柄で、娘を県外の学校に送り出すことができたのだと推測することも可能です。私たちの目にはいくつかの偶然の積み重ねのように見えますが、ミツの歩むべき人生の道筋を、主はご計画に従って周到に準備してくださっていたのです。

ミツは1911年（明治44）に尚綱女学校本科に入学します。この年、ブゼル宣教師は休暇帰国中でしたので、別の宣教師が校長を務めていましたが、翌年からは帰国したブゼルが校長に復帰しています。尚綱女学校本科は修業年数5年で、全員が寄宿舎生活を行うよう定められていました。また、寄宿舎内則第11には「日曜日は靈性のかん養を主とすべき日なりとす」⁹とあり、日曜日は他派の教会に出席する若干の生徒を除いて、寄宿舎生全員が北一番丁の仙台浸礼基督教会（現在の日本基督教団仙台ホサナ教会）に出席することになっていました。そのころ仙台には、バプテスト派の教会はそこしかなかったのです。

そして2年後の1913年（大正2）に、ミツはこの教会でバプテスマを受けます。遠野時代、教会学校に喜んで通う中、ミツの心には信仰の種がまかれ、尚綱女学校での生活を通し、その種から芽が生え出で真っすぐに成長し、やがて実を結んだのです。

3. 卒業後の歩み

1916年（大正5）、ミツは本科を卒業しますが、学校生活の中でミツと接してきた宣教師たちは、彼女の中に確かな信仰と、誠実で信頼できる人柄と、良き働き人となる大きな可能性を強く感じ取っていました。卒業後、一旦は故郷に帰り家事手伝いに励んでいたミツですが、ブゼル宣教師の勧めで仙台の青葉女学院保母養成部¹⁰に学び、修了後、開設したばかりの附属尚綱幼稚園で働きます。また、ジェッシー宣教師からの求めに応じ、利府や岩切や高城での教会学校のお手伝いを週一回行うようになります。ミツは卒業後のこれらの期間も、寄宿舎で生活することを学校から特別に許されていました¹¹。また、誰からかは不明ですが尚綱で働くことを強く勧められ、教員になるべく日本女子大学国文学部に入学し、卒業後、実際に尚綱女学校の国語科教師として勤務しました¹²。1923年（大正12）のことです。翌年佐藤三郎と結婚¹³しますが、1925年（大正14）に三郎が満州に転勤となったため、ミツは尚綱を退職せざるを得ませんでした。

ミツと三郎との出会いは、実は遠野時代に遡ります。三郎は岩手県江刺郡梁川村の出身で、中学は遠野中学校でした。中学校に通う中でキリスト教に出会い、1910年（明治43）に遠野教会で受浸します。15才の時でした。当然のことですが、礼拝や教会学校で2才年下のミツとも顔見知りだったはずで

また、ミツが尚綱女学校で学んでいた時期は、三郎が東北学院専門部英文科、そして神学科で学んでいた時期と重なりますので、日曜日には仙台浸礼基督教会で礼拝を共にしていたことでしょう。少年少女時代そして青年時代、二人は教会という場で信仰の絆によって強く結ばれていたのです。1919年（大正8）に、三郎は東洋拓殖株式会社¹⁴に入社し東京本社勤務になります。ミツが日本女子大に入学し東京での生活を始めたのも似通った時期です。遠野や仙台を離れ、見知らぬ町・東京で過ごす中、二人が生活と信仰を互いに励ましあい、絆をさらに深め合うようになるのは自然なことです。やがて二人の間に愛が芽生えることになって不思議ではありません。

4. 満州での生活と引き上げ後の生活

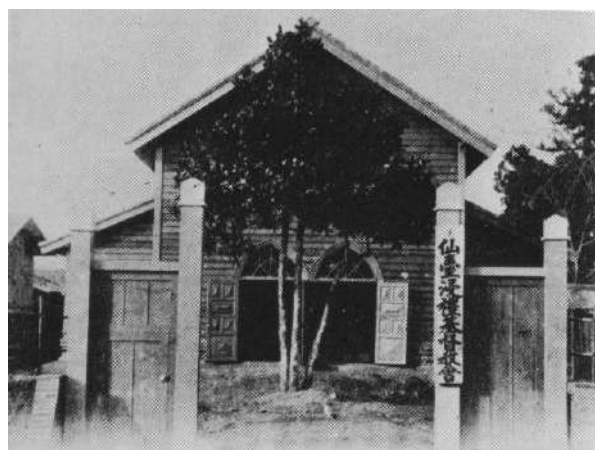
三郎とミツ夫妻は1925年（大正14）に満州の奉天に渡り、敗戦翌年に日本に引き揚げてくるまでの21年間、かの地で生活を送りました。初めの何年間かは、ミツは家事と育児に追われる毎日だったでしょう。その間1928年（昭和3）には、故郷の父（2月）と盛岡に嫁いだ妹梅子（5月）¹⁵を相次いで亡くすという、悲しみの出来事を経験します。

奉天での生活にも落ち着きが出てきたころ、ミツはスコットランド合同長老教会の伝道医師が設立した奉天医科専門学校で、日本語教師として働くことになります。その働きは1932年（昭和7）から1945年（昭和20）まで続くのですが、1942年（昭和17）からは、夫三郎もこの学校（奉天盛京医科大学と改称）の幹事として勤務することになります。これまでの会社を退職し新たにこの職に就いたのか、あるいは会社の業務の一環としてこの職務に就いたのかは定かではありません。いずれにせよ二人は、この学校で働く中で敗戦の日を迎えることになりました。

着の身着のまま満州から引き揚げてきた一家4人は、三郎のふるさと梁川村に一旦戻ります。この家族のその後の足取りについては、断片的なことしかわかりません。三郎は長崎YMCAに2年ほど勤務した後、1949年（昭和24）から61才で亡くなるまで尚綱学院の中高部、及び同短大に勤務していたこと¹⁶。ミツは1948年（昭和23）に息子の看病のため仙台での生活が始まったこと。三郎は遠野教会から、ミツは仙台北一番丁教会（旧仙台浸礼基督教会・現仙台ホサナ教会）から、仙台北三番丁教会に転会し¹⁷、それぞれ教会役員や教会学校教師として熱心に奉仕したことなどです¹⁸。またミツは尚綱学院評議員として、さらに同窓会や後援会の役員としても長年にわたり職責を果たしておられました¹⁹。

以上のように仙台北三番丁教会や尚綱学院との関わりの中で、責任ある役割を果たしていた人生の充実期（50才代中頃）に、佐藤ミツはグラント宣教師夫妻の「教師兼協力者」として重要な働きを担ってくださり、私たちの教会と幼稚園の初期の働きをしっかりと支え、助けてくださったのです²⁰。衷心より感謝。

（文責：小林孝男）



仙台浸礼基督教会（北一番丁）

-
- 1 「ミツ」という名前の表記は、資料によって「みつ」であったり「光子」であったりする。
- 2 『主の息吹の中で』91 頁
- 3 仙台北三番丁教会の創立九十周年記念文集として、2016 年 11 月に発行されたもの。「すでに召された信仰の先輩方を記念し、また現在の教会員を記録するため」に編集・出版された。
- 4 『北三群像』90 頁
- 5 仙台浸礼教会出身で、横浜バプテスト神学校卒業後、盛岡浸礼教会の伝道師となり、後に仙台浸礼教会の牧師となる。
『尚綱女学院 100 年史』63 頁
- 6 『バプテストの東北伝道』103 頁、『日本バプテスト史年表』31 頁
- 7 『北三群像』90 頁、『バプテストの東北伝道』104 頁
- 8 佐々木公明『遠野での「物語」 プゼル先生最終章』(2019)
- 9 『尚綱女学院七十年史』103 頁
- 10 日本聖公会の婦人伝道師養成の目的で、1899 年(明治 32)に仙台に設立される。1913 年(大正 2)に『青葉女学院』と改称し保母養成部を併設。その教育目的は、『幼稚園保母及び将来児童を指導すべき者を養成するをもって目的となし更に幼稚園伝道事業のために特に訓練をなすものとす』とある。1941 年(昭和 16)に廃校
- 11 『むつみのくさり』11 号、17 頁
- 12 『尚綱女学院七十年史』473 頁
- 13 逝去会員名簿の記載によれば、ミツの結婚は 1924 年(大正 13)夏である。ミツは尚綱に勤務し、三郎は東京勤務の時期である。結婚してすぐ別々の町に住んだことになるが、このあたりの事実関係は今のところはっきりしていない。
- 14 日本の朝鮮統治時代に、朝鮮における拓殖資金の供給および拓殖事業を目的とした半官半民の特殊事業会社。日本政府の植民地政策に協力しながら、拓殖事業に必要な資金の融資、水利事業、土地取得および土地の経営管理、移民の募集および移民のための建物の建造販売など広範囲にわたる事業を行なった。1908 年東洋拓殖株式会社法に基づき日本、朝鮮両国からの出資によって京城に設立されたが、1910 年の日韓併合以後は資本金を増額していくとともに、株主は日本人に限られることになり、1917 年本社も東京に移された。その間に朝鮮電力、朝鮮鉄道、東拓鉱業、鮮満拓殖、東洋畜産など 52 社の経営に参加、また満州、モンゴル、中国、フィリピン、南洋諸島、マレー半島にまで事業地域を広げ、38 年間朝鮮経済を支配した。第 2 次世界大戦の終結とともに解体
- 15 『むつみのくさり』16 号 127 頁、『遠野での「物語」プゼル先生最終章』77 頁、86 頁
- 16 「仙台北三番丁教会逝去会員名簿」
- 17 同上
- 18 『日本基督教団仙台北三番丁教会八十年史』372~377 頁
- 19 『尚綱女学院七十年史』357~359 頁、426~433 頁
- 20 ミツの人物像を紐解く資料を入手できたのは、お二人のご高齢の尚綱学院の同窓生のおかげだった。お二人が昔の尚綱時代のお話をする中で、佐藤三郎先生に尚綱で英語を教わったことや、三郎先生が仙台北三番丁教会の会員であったことなどを思い出していただき、その情報を得た私は、すぐに仙台北三番丁教会の牧師(2023 年 3 月退任)で、尚綱学院院長(2023 年 1 月就任)を兼務されていた佐藤司郎先生にお問い合わせをしたところ、佐藤三郎・ミツ夫妻に関する貴重な資料をさっそくご提供くださった。それによってミツの人物像の輪郭がかなり見えてきた次第である。一人ひとりの人生には独自の歴史がある。その歴史は伝承されなければ、いつかは忘れ去られ、無かったも同然になってしまう。一人の人生の歴史を語り継ぐ資料は、何らかの形で必ず残されている。ただどこに残されているのか、どのような形で残されているのか、誰がその所在を知っているのかなど、なかなか分からないことが多い。求め続けることや探し続けることこそが大切だが、同時に人と人のネットワークや、人生の先輩たちのたわいない思い出話の中に、発見の貴重な糸口が隠されていたりする。今回、そのことを強く実感させられた。ご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

指が触れた場所が仙台 — ボートライト宣教師夫妻来日 1958

はじめに

ジョージア州タットナル郡で毎週木曜日に発行されている、「タットナル・ジャーナル」¹という週刊新聞があります。1958年3月20日（木）発行のその新聞に、ヴァージニア州リッチモンドで開かれた南部バプテスト連盟外国伝道局の3月月例会議で、ボートライト牧師（33才）²と妻ベティ（31才）³が、日本への宣教師に任命されたという記事⁴が写真入りで掲載されました。その内容を以下に紹介します。

1. 「ボートライト牧師夫妻、日本への宣教師に任命」（タットナル・ジャーナル 1958/3/20）

コリンズ・バプテスト教会の C.S.（ボブ）ボートライト牧師夫妻は、ヴァージニア州リッチモンドで開かれた南部バプテスト連盟外国伝道局の月例会議において、日本への宣教師として本日任命されました。ボートライト師は1953年9月にコリンズ教会に赴任、その前はケンタッキー州シンティアナ近くの教会の牧師でした。

自分の霊的な成長に関して次のように師は語っています。「小さかった頃の日曜学校の女性教師から影響を大きく受けました。教会学校で先生が教えてくれたことや、教会学校外でその先生が関心を向けていることを通して、私は霊的に物事を考える習慣が身に着いたのです」

師は少年の頃にキリストを救い主と信じる信仰を告白し、家の近くのサマータウン・バプテスト教会に所属しました。「人生の早い頃から、神様は私が説教者になることを望んでおられる、と感じるようになりました」と師は語ります。しかしながら、師が牧師になることをはっきりと決心したのは1948年のことでした。

またボートライト師は、「宣教師として働いている友人が、1957年に書いた記事を読み触発されました」と外国伝道局に対して語ります。「この記事によって、神様は宣教の働きへ私を招いておられるということを、はっきりと認識させられました」
「以前は、宣教の働きに出かけていく人たちは気の毒だと感じていましたが、今は、その働きに出かけていけない人たちは気の毒だと感じています」と付け加えます。

エマヌエル郡で生まれたボートライト師は、ティフトンのアブラハム・バードウィン農芸大学に通い、またダロゲナの北ジョージア大学で科学の学士号を取得。神

学の修士号は、ケンタッキー州ルイスヴィルにある南部バプテスト神学校から授与されました。

師はアトランタの自動車会社の経費分析専門家助手や、スワインズボロでの農業調整庁の農地調査員の働きを経験し、また米国空軍で 3 年以上任務に就いています。

ベティ・フェイス・ボートライト夫人は、マーコンの生まれで旧姓はウィリアムズ、現在ホワイト・プレインズで牧師をしている S.S.ウィリアム牧師夫妻の娘です。自分の人生はクリスチャンの両親から決定的に影響を受けました、と彼女は語っています。11 才でキリストを救い主と信じる信仰告白をして、近くのコーマのバプテスト教会の会員になりました。

彼女は外国伝道局に対して次のように語っています。「大学で親友だった者たちの多くは、ミッション・ボランティアになりました。また、大学の聖書の教授の励ましや影響力は、私にとって大いに意味のあるものでした。若い時期には、私はキリスト教事業に全ての時間と生活を献げ、自分の人生の中で神の御心が実現することを求めました」

ボートライト夫人はフォーシスのティフト大学で人文科学の学士号を取得し、ルイスヴィルの女性宣教師連合訓練学校（現在の「宣教・社会事業カーサー学校」）で宗教教育の修士を取得。職歴はブフォード・バプテスト教会の教育主事、ローレンスヴィル・バプテスト教会の音楽主事と活動推進主事、そしてニュートン郡カビングトン近くの中学校で教師も務めました。

ボートライト夫妻には、もうすぐ 5 歳になるメアリー・リンダ、そして 2 歳半のダビデ・ウェインの二人の子供⁵がいます。

夫妻は外国伝道局の 3 月定例会議で外国での働きのために任命された 8 名の青年の中に含まれており、南部バプテスト連盟の現役の外国宣教師の人数は、これで 1,188 名になります。

2. 日本地図を差した指が触れた場所が仙台

1958 年に来日したお二人は 2 年間東京で日本語の学習に励み、その後 1960 年 6 月に来仙します⁶。そして歴代の仙台教会の牧師たち（大沼上、天野五郎、金子純雄）と良き人間関係と協力関係を築きながら、仙台、吉岡、南光台、長命ヶ丘、郡山、山形において、福音を宣べ伝える働きに専心されました⁷。それぞれの地においてた

くさんの人たちと出会うわけですが、ボブ・ボートライト宣教師の持ち前の人懐こさや明るさは、知らない人に対して私たちが作ってしまいがちな心の壁を優しく壊してしまいましたし、夫人のベティー・ボートライト宣教師は、日本人以上に日本人的な慎ましやかな物腰や話し方で、周囲の人々に安心感と親近感を抱かせました。

お二人はどうして仙台を任地として選んだのでしょうか？ 初め宣教団からは韓国または香港を勧められたようです。それに対してボートライト宣教師夫妻は日本を希望しました。これから世界にもアジアの近隣の国々にも大きな影響を与える国になるはずの日本だからこそ、福音が浸透した国にならないと考えたのでしょう。そしてご自分の事務室に貼ってあった日本地図めがけて、「ココダ、ココニキタイ！」と差した指が触れた場所が仙台だったのです⁸。「たまたまだった」と冷静に解釈することもできますし、「御旨が示された」と確信を持って語ることもできるでしょう。いずれにしても、神がなさることは不思議ですし、時に適って美しいのです。(文責：小林孝男)

Rev. and Mrs. Boatwright Appointed Missionaries Japan

Pastor and Mrs. C. S. (Bob) Boatwright, of Collins Baptist Church, were appointed missionaries to Japan today by the Southern Baptist Foreign Mission Board at its regular monthly meeting in Richmond, Va. Mr. Boatwright went to the Collins church in September, 1953. Prior to that he was pastor of a church near Cynthiana, Ky.

Concerning his spiritual growth, he said: "In my early years I had a Sunday school teacher whose interest in her class meant a great deal to me. Her Sunday school lessons and her interest outside of class caused me to do a great deal of thinking along spiritual lines."

While a young boy he made a public profession of faith in Christ as his Saviour and joined Summertown Baptist Church near his home. Early in his life he began to feel that God wanted him to be a preacher, he said. It was 1948, however, before he definitely decided to enter the ministry.

Mr. Boatwright told the Board of being influenced in 1957 by an article written by a missionary friend. This led to the realization that God was calling him to the mission field, he said. "Before this I used to feel sorry for those who went out on the mission fields; now I feel sorry for those who cannot go", he added.

A native of Emanuel County, Mr. Boatwright attended Abraham Baldwin Agricultural College, Tifton, and received the bachelor of science degree from North Georgia College, Dalton. He received the bachelor of divinity and master of theology degrees from Southern Baptist Theological Seminary, Louisville, Ky.

His working experience includes duties as assistant cost analyst with a motor company in At-



REV. and MRS. C. S. (Bob) BOATWRIGHT, Southern Baptist Missionary appointees to Japan look at their field of service on a map at Foreign Mission Board headquarters in Richmond, Virginia.

lanta, and as farm land checker for Agricultural Adjustment Agency in Swainsboro. He served more than three years in the U. S. Army Air Forces.

Mrs. Boatwright is the former Betty Faith Williams, native of Macon. The daughter of Rev. and Mrs. E. S. Williams, now of White Plains, she said the influence of Christian parents was a great determining factor in her life. At the age of 11 she publicly professed faith in Christ as Saviour and joined a Baptist church near Comer.

She told the Board: "Most of my closest friends in college were mission volunteers, and the encouragement and interest of my Bible professor meant a lot to me. During my junior year I dedicated my life to full-time Christian service and sought to fulfill God's

will in my life."

Mrs. Boatwright received the bachelor of arts degree from Tift College, Forsyth, and the master of religious education degree from Woman's Missionary Union Training School (now Career School of Missions and Social Work), Louisville. She was educational director at Buford Baptist Church, music and promotional director at Lawrenceville Baptist Church, and junior high school teacher in Newton County, near Cowington.

Mr. and Mrs. Boatwright have two children, Mary Linda, almost five, and David Wayne, two and a half.

They were among eight young people appointed for overseas service by the Board at its March meeting, bringing the total number of active Southern Baptist foreign missionaries to 1,188.



タットナル・ジャーナル(1958年3月20日)

ボートライト宣教師夫妻

¹ The Tattnell Journal は 1879 年創刊。毎週木曜日に発行

² Claude Sawyer Boatwright、1924 年 8 月 10 日にジョージア州スウィンズボロに生まれる。召天 2016 年 11 月 15 日

³ Betty Face Williams Boatwright、1926 年 4 月 22 日にジョージア州メイコンに生まれる。召天 2015 年 8 月 14 日
1926 年

⁴ 資料(1958/03/20_ボートライト夫妻日本への宣教師に任命_TattnellJournal)

⁵ 記事が掲載された 1958 年 3 月時点で子供は二人。三人目のジュディは同年 5 月に誕生

⁶ 資料(1989/08/00_福音のために_ボートライト夫妻の日本宣教 31 年・抜粋)24 頁
この小冊子は、ボートライト宣教師夫妻の日本での 31 年間の働きを記念し、退任にあたり仙台地区バプテスト伝道協議会(SBD)がお二人への感謝を込めて発行したものである。

⁷ 同上 19-21 頁にボートライト宣教師の日本での働きが年譜としてまとめられている。

⁸ 同上 25 頁



ボートライトご一家

左から長女メアリーリンダ、ベティ、長男ダビデ、ボブ、次女ジュディ



ベティ夫人 88 才の誕生日？

われらバプテスト

はじめに

2024年（令和6）9月より毎週お読みいただいています「仙台教会の歴史シリーズ」は、今回を含めあと5回発行します。この歴史シリーズは、私的な立場で仙台教会の略史年表作成に挑戦した際、その準備作業の中で生まれた副産物です。公的な「仙台教会70年史」は教会の責任で正式に作られるでしょうが、私自身の信仰の歩みを振り返る意味で、個人的に仙台教会の70年を辿ってみたいと考えたのは2022年（令和4）のことでした。いくら私的なものと言っても、正確さを期さないと後々教会にご迷惑をおかけすることになってしまいます。それを避けるため多少手間はかかりましたが、まず年毎の活動記録を諸資料をもとに一覧表にし、略史年表の基礎とすべき「原表」を作るところから作業をスタートさせました。そしてその作業の中で、初めて知った仙台教会の歴史に関わる話題や、記憶と記録に残しておきたいと感じた事柄や、共有したい出来事などを文章化したものが、毎週お読みいただいている歴史シリーズです。

将来的にどなたかが恐らく取り組むことになる「仙台教会100年史」の編纂作業に、私が直接関わることは時間的には有り得ません。但し、今回まとめた「原表」や略史年表や歴史シリーズが、30年後に多少お役に立てばと願っています。

1. 週報・総会資料の保存の重要性

週報や総会資料は、その教会の歴史を辿る際の貴重な一次資料になります。仙台教会の場合、長崎直得牧師時代から大沼上牧師時代（1953～1963）の10年間分の週報も総会資料も、残念ですがまったく保存されていません。旧会堂の解体にあたり、溜まりに溜まった教会の膨大な「財産」を一挙に整理する必要が生じた際、十分吟味することなく、また歴史的資料の重要性を認識することなく、色々なものを処分してしまったからです。今から思えばその中に大変貴重な歴史資料が多数含まれていたのでしょう。悔やんでも悔やみきれませんが、今となってはどのようなこともできません。せめて現存する資料だけでもきちんと保管し、後世に継承していかなければなりません。最低でも資料をデータできちんと保存することは必要ですし、

現物での保存も可能な限り追求すべきでしょう。とにかく教会として資料保存の重要性を自覚し、具体的作業に早急に着手することが肝要です。この点に関しては、牧師と執事会のリーダーシップに大いに期待したいところです。

仙台教会の総会資料の保存に関しては、1985年（昭和60）以前のものには皆無です¹。週報保存に関しては、天野五郎牧師時代以降1963～2024年の間のものはほぼ現存しますが、教会事務室に実際に保存されているのは後半の約40年間分に過ぎません²。二人の教会員³が関係者から託され、個人の責任において保管しているものを含めて、70年のうちの約60年間分の週報をどうにかカバーできる状態です。

但し、その約60年間分のうち1967年（昭和42）の週報だけが、大変残念ですが全く欠落していました。つまりこの年に教会でどのような出来事が起きたのかを週報で確認することが出来ず、この年は仙台教会の歴史から消えてしまったに等しく、この年に教会生活を送っていた方の1年間の教会生活が、何も無かったも同然となりかねないと危惧していました。そのような折、故天野五郎牧師の書斎に埋もれていた製本作業途中の1967年の週報集を、ご遺族の方がわざわざ私に送り届けてくださいました。2024年（令和6）春のことです。感謝に堪えません。

実は、週報集が欠落していた1967年という年は、高校2年だった私が初めて仙台教会の礼拝に出席した年です。そして半年足らずで信仰を決心し、その年のクリスマスにバプテスマを受ける予定でした。ところがクリスマス礼拝当日の朝、教会の前庭を掃き掃除していた天野牧師に、私は唐突に受浸拒否を宣言したのです。前代未聞の「事件」です⁴。このように私にとって極めて特別で特殊な年の歴史が、この週報集によってしっかり記録・保存・継承されることになり安堵しています。

2. 週報や総会資料にバプテストの姿を見る

時代を追って週報や総会資料を眺めていくと、バプテスト派の教会としての特色を示す記事に時折目が留まります。

天野五郎牧師時代（1963～1984）の初期には、総会の他に「常会」というものが年に数回開催されていました⁵。今の教会で言えば合同例会に近いものですが、教会の事柄に関して決定機動的な機能も持つ集まりでした。教会員の総意で大切な事柄を決定していくことを、私たちバプテストは大切にします。主に予算や決算等が議題となる総会だけでは補いきれない、通常の教会生活における様々な情報の共有、

意見交換、意思決定を、常会で行うことを大切にしていました。牧師や執事だけが情報を独占するのはバプテスト的ではありませんので、このような機会を設けることは自然なことだったのです。

金子純雄牧師時代（1984～1998）には、仙台教会では宣教師を協力牧師として位置づけ招聘する形をとり、仙台教会の一員として具体的役割を担ってもらいました⁶。宣教師の働きは大変貴重ですが、ともすると「宣教師」対「教会」という図式ができてしまい、それぞれのビジョンに基づく計画を立て、独自の動きをするということが起きがちです。また、宣教師を必要以上に高い地位に置き、上下関係があるかのような錯覚を、教会内に生み出してしまうこともあります。宣教師がもつ独自の使命に対して理解と敬意を払いつつも、教会の一員として共に福音宣教のために力を合わせるといふ姿勢は、バプテスト的だと言えます。また、教会員の中から協力牧師を立てるといふことも、金子牧師時代に開始されました⁷。これも極めてバプテスト的と言えるでしょう。

山下誠也牧師時代（2003～2010）には、仙台教会では信仰告白の改訂を行いました⁸。この作業は金子時代から委員会を設置して準備してきたことです。委員会には牧師は加わず、執事会及び各会から委員がでて検討を進めました⁹。行きつ戻りつの議論を重ね、教会員からの意見の聴取を丁寧に行い、それを受けてさらに議論を重ねるわけですから、かなりの時間を要しました。しかし、教会の信仰告白の改訂という大事な事柄は、牧師や執事会がトップダウンで決めることではありませんし、そもそもそのようなやり方自体バプテストには馴染みません。無駄に時間をかけたという見方もあるでしょうが、教会員の思いを反映させた改訂内容とするためには、その時間も必要不可欠だったのです。

小河義伸牧師時代（2011～2020）には、病気や身体的理由で浸礼ができない場合は滴礼を可とすること¹⁰、牧師不在時の礼典執行を特定の教会員へ委託すること¹¹、祝祷は当日の礼拝説教者（信徒の場合や他教会・他教派からの説教者の場合も含む）が行うことを原則とすることなど¹²、他教派からは「大丈夫なの？」と危惧されそうな事柄を、教会員の総意で決定しています。

また、新型コロナウイルス感染予防対策のため、主の晩餐を1年程執行できない状態が続いていた中、「暫定的な形式の主の晩餐式」¹³、つまり実際にパンと杯に与かるのは司式者のみとし、会衆は心の中でパンと杯に与かる形式の主の晩餐式を、暫時実施

することを総会で決定しました。小河牧師が退任し専任牧師不在時期でしたが、教会員は戸惑いや不安を感じることなく総会に臨み、教会にとって極めて重大なことを、信仰的良心のもと議決しています。

現在の宇都宮毅牧師時代（2021～現在）においても、私たちは福音宣教や教会形成の働きにおいて、バプテストに相応しい道を見つけ出し、歩み続けていきたいと願っています。様々な教派が数多くありますが、主は私たちにバプテストとの出会いを備えてくださいました。その出会いには意味があるはずですし、同時にそこには、主が私たちに託してくださった使命も必ず用意されているはずなのです。

（文責：小林孝男）

¹ 仙台教会歴史年表原表の「週報保管状況」ファイル参照

² 同上

³ 同上

⁴ 週報(1967/12/24)、週報(2024/04/28)

⁵ 週報(1963/11/03)

⁶ T.ウッズ宣教師に関しては週報(1985/05/05、08/25)、L.ミラー宣教師に関しては週報(1986/10/26)、週報(1987/07/05)、B.オデール宣教師に関しては週報(1989/04/23)、資料(1990/05/13_1989 報告総会・抜粋)

⁷ 週報(1993/05/23)

⁸ 週報(2010/03/28)、資料(2010/03/21_2010 予算総会・抜粋)

⁹ 資料(1989/02/05_信仰告白検討委員会ニュース#1)

¹⁰ 資料(2013/05/19_2012 報告総会)
週報(2013/01/13)

¹¹ 資料(2018/03/25_2018 予算総会)
資料(2018/05/20_2017 報告総会)

¹² 同上

¹³ 資料(2021/03/28_2021 予算総会)



身体的理由により滴礼によるバプテスマ

山形伝道所の母教会となる 1958

はじめに

敗戦の2年後、1947年（昭和22）4月、日本基督教団から離脱した16教会によって、日本バプテスト連盟（以下連盟）が設立されます¹。バプテスト主義に立つ各個教会が、相互に協力して福音宣教の使命を果たすことが目的です。そのため連盟は年次総会を欠かすことなく開催し、使命の達成を目指して共通理解と合意形成を大切にしながら今日まで歩み続けています。「全日本に全き福音を」を標語に開催された第5回総会（1951）では、全国県庁所在地に開拓伝道を展開することを決議し、第6回総会（1952）では「四半世紀内に千の自立教会を」が提唱され、そして第7回総会（1953）は、「全日本にキリストの光を」を標語に開催されています²。このように連盟の宣教ビジョンが年ごとに明確にされながら、具体的な伝道計画が実施されていきました。

1952年（昭和27）にW.C.グラント宣教師夫妻が来仙して開拓伝道を開始し、やがて仙台教会が誕生したのも、上記のような流れの中での出来事でした。

1. 山形伝道所（連盟直属伝道所）の名義上の母教会となる

さて、連盟伝道部では開拓伝道を支援するにあたり、初期においては伝道所を三タイプに分けていました。直属伝道所、準直属伝道所、そして教会開拓伝道所です。このうち直属伝道所は、連盟の全国伝道方策に従い、連盟年次総会の議を経て開拓伝道にあたる伝道所で、連盟伝道部の支援の下にありました。山形における開拓伝道は、この直属伝道所方式で1958年（昭和33）に開始されました³。

直属伝道所の場合、伝道者の派遣や伝道資金に関しては連盟伝道部が責任を持ちますが、名義上母教会となる教会が必要となり、仙台教会がその役割を引き受けました。地理的なことを考えれば、それはごく自然な流れと言えるでしょう。但し、仙台教会も教会組織して3年目であり、吉岡伝道所発足直後でもあり、また関谷定夫牧師から大沼上牧師に代わって1年目でしたので、教会内部を整えることに最大限のエネルギーを費やす必要がある時期でした。ですから宣教師や牧師が、バプテスマや主の晩餐や特別伝道集会等で、山形伝道所と時折関わりを持つ程度の協力しかできなかったのが現実で、正に「名義上」の母教会でした。しかし、そのような仙台教会にやがて「決断の時」が与えられることとなります。

2. 実質的な母教会となる決断はしたもの

ミッションボードからの補助金に大きく頼りながら運営されていた連盟でしたが、1960年代の後半ごろから「自立・自給化」の声が急速に高まります。ボードか

らの支援額の漸減という外的要因は軽視できませんが、内的にはベトナム反戦平和運動が激しく繰り広げられ、連盟の米国依存体質が批判され、また戦前復帰の社会風潮に抗し教会の在り方を厳しく、かつ真摯に問い返す動きが強まる状況が生まれます。それを受け連盟は、実力に見合った思い切った変革を目指しながら、「自立と協力」の実を挙げる決断をすることになります⁴。

そのような状況の下、1972年（昭和47）5月28日に仙台教会は臨時総会を開催します。当日の週報の牧会通信欄⁵で、天野五郎牧師は次のように語っています。

『連盟直属伝道所』というのは、年会で開拓伝道地が決議され、そこに連盟理事会が伝道者を招聘して派遣していました。そして名義上母教会を近隣の適当な教会におねがいし、伝道所いっさいの経費は連盟伝道部が引き受けていました。

それを名実共に母教会に伝道所を託そうということになったのです。

ただし昭和52年（1977）までの経過措置として旧規定（経済支援など）が生きて用いられます。が、山形伝道所の斎藤英哉先生の場合は、5年の目標期間（？）が昭和49年（1974）1月で終わります。

名義上から実質的にも、となれば、当然いままでの母教会に、母教会になる用意があるかどうか問われねばなりません（昨年末、当時の伝道委員長であった川口正雄先生がこられたのはそのためでした）」

仙台教会は、南光台伝道所へ集中的に精力を注ぎ込む必要がある時期でしたので、臨時総会では賛否両論、様々な意見が交わされましたが、最終的には山形伝道所の実質的な母教会になる決断をしました。そして母教会としては、「伝道所の自立精神を損なったりその課題を横取りしないよう“控え目に”かつ“積極的に”関わることを申し合わせ」⁶、斎藤英哉師の仙台教会牧師（山形伝道所担当）就任、伝道所支援費の予算化、伝道所指定献金の設定等を実現していきます。但し、母教会からの山形伝道所への経済的支援は、大変申し訳ありませんでしたが、十分なものでは全くありませんでした。その様な中、山形伝道所の皆さんは、連盟からの財政的支援が打ち切られた1974年（昭和49）1月から、「自給」という非常に厳しい道へ果敢に踏み出していくことになります⁷。

3. 体裁などかなぐり捨てて

それから2年後の1976年（昭和51）3月に、斎藤牧師は健康上の理由で、仙台教会山形伝道所担当牧師を辞することになります。この事態を受けて母教会である仙台教会は、山形伝道所の皆さんと話し合いながら、牧師、宣教師、役員がローテーションを組んで主日礼拝と家庭集会の継続を目指し力を合わせました⁸。但し、これが母教会としては精一杯のところでした。山形の地に福音を広く宣べ伝える使命を担うべく、伝道所から教会へと成長していくための道筋を、伝道所の方々と共に様々な角度から整え、力強く支援していく使命が母教会にはありました。しかし、

それを十分に担うことができない状況でいた折に、全く予期していない方向から光が差し込んできました。

実は1977年（昭和52）4月17日の仙台教会の総会で、山形伝道所に関して大変重要なことが議決されました。翌週の週報の牧会通信欄に、総会での決定事項が以下のように報告されています。

「山形伝道所の教会形成への道の計画と推進のすべてを、人事面を含めときわ台教会におねがいする（もちろん山形伝道所の賛成が必要である、と同時に、そのことは仙台教会が山形伝道所に対して母教会であることをやめたことではなく、むしろその積極的な意思の表れであることが注意、強調されねばならない）」。

1977年当時の連盟理事長は松村秀一牧師（常盤台教会）であり、理事の一人が天野牧師でしたので、お二人が顔を合わせ言葉を交わす機会が当然増えます¹⁰。その様な中、2月に両者が山形伝道所の今後のビジョンについて内々で話し合った際に、上記のようなアイデアの提案が松村師からあったのです¹¹。

仙台教会が4月の総会で山形伝道所について大きな決定をしたことに関して、天野牧師は「そのことは母教会であることをやめたことではなく、むしろその積極的な意思の表れである」とコメントしています。山形伝道所の教会形成への道の計画と推進を、他の教会に委ねる決定をしたことは、仙台教会が母教会としていかに力不足であったかを、内外に知らしめたということになります。本来母教会として担うべき働きを、自分たちが負いきれないため他教会にお任せすることが、母教会としての「積極的な意思の表れである」などと、どうして言えるのでしょうか？ 当時はすんなりとは理解できませんでしたが、次のような意味ではなかったのでしょうか。

母教会として一番大事にしなければならないことは、山形伝道所の教会形成への道が整えられ、計画が前進していくことに他なりません。その実現のためには、母教会としての体裁やメンツを保つなどということは全く不要なことですし、主の前にあっては意味のないことです。天野師が語る「積極的な意思」とは、「母教会として一番大事にしなければならないことを大事にする姿勢」を指していたのでしょう。大切なことは計画が前進することであり、誰がそれを担当するかは、祈りつつ、状況に応じつつ、その時々にあって最善であると判断した道を選び取ってあげばいいのです。そういった大局に立つ考え方に則って行動することこそが、母教会としての「積極的な意思」という言葉が意味することだったのでしょう。

その後、松村師の推薦を受けた調弘道牧師が、1978年（昭和53）4月に山形伝道所に着任します。伝道所側は「100人祷援会」¹²を発足させるなどして一丸となって教会形成に向けて力を合わせ、結果1981年（昭和56）4月28日（火）に教会組織諮問会議を開催¹³、県内外から会議に出席した多くの方々の祝福の中、「日本バプテスト連盟山形キリスト教会」が設立されます。（文責：小林孝男）

-
- 1 『日本バプテスト連盟五十年史』 8~25 頁
 - 2 『日本バプテスト連盟七十年史』 79 頁
 - 3 資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料)
 - 4 同上 184~187 頁
 - 5 週報(1972/05/28)
 - 6 週報(1973/09/09)
 - 7 週報(1974/03/10)
 - 8 週報(1976/04/25)
 - 9 週報(1977/04/24)
 - 10 『日本バプテスト連盟五十年史』 530~533 頁
 - 11 週報(1977/02/27)
 - 12 週報(1979/08/12)、週報(1979/09/30) 「100人禱援会」は1979年8月に発足
 - 13 資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料)



1960年献堂の山形伝道所旧会堂

クリスマスカードから抜け出た情景－南光台伝道所開設 1966

はじめに

1963年（昭和38）3月末から5月初めにかけて、日本バプテスト連盟内の教会、伝道所、学校などで新生運動が展開されました¹。この新生運動は、テキサス・バプテスト連盟からの約1億円の指定献金を資金に、1年余にわたり準備されてきた大きなプロジェクトでした。「各個教会の平常伝道の強化」「東京並びに地方大都市における大伝道集会」「伝道チームによる各個教会伝道」を軸に、「全日本にキリストの光を」を旗印として様々な方法で伝道を展開し、教会にリバイバルを起こし、教会・伝道所の強化と教勢の拡大を目指す取り組みでした。

仙台教会もこの新生運動に参加しましたが、そこで撒かれた種がやがて南光台伝道所開設という実を結ぶことになったと考えるのは、あながち間違いではないでしょう。

1. 新生運動とボートライト宣教師夫妻

南光台伝道所開設にあたっては、C.S.ボートライト宣教師夫妻の熱意ある働きがあったことを忘れてはなりません。夫妻は1958年（昭和33）に宣教師として日本に派遣され、東京の中野教会で奉仕しながら2年間日本語を学習し、1960年（昭和35）6月に仙台に着任します²。仙台教会は大沼上牧師の時代でした。残念ながら当時の資料はほとんど残っておらず正確なところは分かりませんが、明るくフランクで米国市民の典型のようなボートライト師と、大和なでしこ的なしとやかさと、いつも微笑みを絶やさない楚々としたベティー夫人です。すぐに教会員の中に溶け込み、良い働きを行ったことでしょう。

さて、前述の新生運動に仙台教会も参加し、プログラム実施のための準備がなされていたのですが、その最中の1963年（昭和38）3月に大沼牧師は仙台教会を去ります。自身の母教会である北九州の八幡教会からの招聘に応えたのです。大きなプログラムを間近に控える中、専任牧師不在となった仙台教会で、臨時牧師的な働きを担ってくださったのがボートライト宣教師でした。同師は当時を振り返りこう語っています。「1963年に新生運動が行われました。その日々は面白くて、私たちは興奮しました。教会はまだ若いし、経験はなくても、大きな予算を取り扱いました。新生運動を準備している最中に、教会は無牧になりました。大変でした。一生の中でストレスの一番多い時はその時でした。それでも私たちはよく勉強しました。教会は成長しました。人々は救われました。今、その日々を思い返すと、神様が私たちを守って導いてくださいましたことが分かります。このことをその時に分かっていたらもっと楽だったでしょう」³

新生運動の伝道集会は会堂でも開催しましたが、一番大きなプログラムは仙台市公会堂の大ホールを会場に、全市民を対象として行った伝道集会です。この集会のために宣教師夫妻はじめ教

会員が力を合わせ必死に準備を重ねてきましたが、結果は成功と言えるものではなかったようです。新聞やテレビによる宣伝など外に対する PR は万全でしたが、残念ながら市民の参加は期待していた数にははるかに及ばなかったのです⁴。

当時まだ求道者であったある壮年は、この結果にボートライト師はさぞ落胆しているのではないかと心配しました。ところが同師が少しも落胆していない姿に彼は驚き、信仰とは何なのかということに目覚めたといいます。そしてこの壮年と妻と母親の 3 人、及び求道中だった青年 2 人が、新生運動直後にバプテスマへ導かれ、仙台教会の群れに加えられたのでした。

2. 休暇帰国中の出来事

当時の宣教団では、宣教師は 5 年間任地で働き 1 年間休暇帰国し宣教報告活動や今後の活動のための休養や準備の時間を持つことが制度化されていました。ボートライト宣教師夫妻も 1963 年（昭和 38）7 月 15 日（月）に休暇帰国のため離仙します⁵。幸いその前週に天野五郎牧師が仙台教会に着任していますので、重要な事柄に関しての引継ぎは問題なく行われたはずで

休暇帰国中、仙台での宣教活動報告を米国各地で行った際、ボートライト夫妻は日本での宣教の難しさを率直に語ったことでしょう。仙台市民を対象とした新生運動の大伝道集会の実情も、包み隠さず報告したはずで

『献堂十周年記念文集』（復刻版）⁶に、「仙台第二バプテスト教会」と題し次のような文章が記録されています。これはボートライト師が語ったことを、天野牧師が書き取ったものです。

「百万都市を目指す仙台に、バプテスト教会がたった一つ！？ ミセス・ボートライトの伝道報告を聞いていたミセス・ハウエルはびっくりしました。仙台くらいの町なら、米国では、バプテスト教会だけでも 60 はあるでしょう。それがたった一つ……。

ハウエル夫人はお母さんのジェンキンスさんにそのことを話しました。ことし 80 歳になるジェンキンスさんは、それを聞いて祈りの中に確信して牧師であった亡夫の遺してくれたシールズ・ロバック社の持ち株 62（7336 ドル弱）⁷を仙台第二バプテスト教会設立のために献げる決心をしました。

やがて形成されてゆく仙台第二バプテスト教会は、主のために大いなるわざと、大いなる人物を生み出してゆくでしょう。私はそう確信しています、と話すジェンキンスさんは、娘のハウエル夫人といつもそのために祈り続けていることでしょう。

そしてハウエル夫人の 400 ドルと合わせた 7736 ドル（およそ 277 万余）⁸が今、私たちの信仰の手の中に握られているのです⁹」

二人のご婦人から託された信仰に基づく献金は、ポートライト宣教師の仙台での働きのビジョンを、大きく膨らますものとなりました。ビジョンと決意と希望と熱意を胸に、夫妻は1年の休暇帰国を終え、1964年（昭和39）8月に仙台に戻ります。

3. ポートライト宣教師夫妻のビジョンを受けて

帰仙後、ポートライト宣教師は米国で与えられた大きなビジョンを、まず天野牧師と話し合います。その後の仙台教会の動きは迅速でした。8月27日（木）には緊急に教会連絡会（教会役員と各会責任者で構成）が開催され¹⁰、市内に伝道所を設置する件が話し合われます。9月6日（日）には常会（現在の仙台教会で言えば、合同例会と総会の機能を合わせ持つような会合）が開催され、伝道所設置の合意のもと伝道所開設委員会が組織され¹¹、9月13日（日）開催の伝道所開設委員会では、「黒松団地付近を適任地と決定」しています¹²。

翌1965年（昭和40）4月25日（日）開催の総会で、伝道所開設のため黒松付近に購入する土地に関しては、新役員会に一任することが決まります¹³。その後、具体的な土地の選定作業に入りますが、適任地を見出すまでの役員の皆さんのご苦勞はさぞ大きかったことでしょう。当時役員だった吉永馨さんはこう述べています。

「会員は、あそこがいい、ここがいい、と様々な意見を出しました。当時開発中だった南光台は、まだブルドーザーが土を掘り返していました。関兵（せきひょう）という会社が開発したのです。この会社は後に長者番付一番になりました。南光台がいいのではないかというので、皆で何度か見に行きました。分譲住宅地の二区画が欲しいのですが、例の献金額はそれには少し足りませんでした¹⁴。私は金額の事を知らず、二区画を買おうと主張し、ポートライト師も賛成し、そのまま販売事務所に行き、購買を決めたのです・・・」¹⁵

9月15日（水）、関兵事務所において、高島正男さん、石田信二さん、藤沢良和さん、ポートライト師たちの立会いの下、第二教会の敷地となる200坪の売買契約に天野五郎牧師がサインをしました¹⁶。購入代金は258万円です¹⁷。「仙台第二バプテスト教会」の設立という信仰のビジョンが、いよいよ現実的なものとなってきたのです。

4. 南光台伝道所の誕生

土地を確保した後は会堂の建築です。資金の関係で簡易プレハブの会堂を建築することとなり、大和ハウスと具体的な交渉が始まりました。詰めに詰めた交渉を重ねますが、それでも資金が70万円ほど不足します¹⁸。そこで仙台教会は1966年（昭和41）1月に常会を開催し、日本バプテスト連盟の回轉資金から借入する決断をします。そのような経過を経て、4月末ようやく施工契約にこぎつけることができました。工費は232万円¹⁹。5月1日（日）に着工し完成は6月30日（木）、プレハブですが待ちに待った会堂が与えられたのです²⁰。7月10日（日）に

南光台伝道所開設式兼献堂式、13～17日（水～日）には南光台伝道所献堂記念特別伝道集會を開催。南光台伝道所責任者となったポートルイト宣教師とその家族、仙台教会から株分けの石田信二・由紀子夫妻、藤澤良和・雅子夫妻、渡邊淳一さん、そして今井豊・和子親子が力を合わせ²¹、仙台第二バプテスト教会設立を目指し、いよいよ南光台での開拓伝道が開始されました。

伝道所開設の少し後、まだ家もまばらでまるで「開拓部落」のような南光台団地に移り住んだある方は、1966年（昭和41）12月末の様子を次のように語っています。「道は未舗装、街灯も十分には設置されておらず、住宅もまばらに点在するだけで、それらの家から光が洩れている。その中で、南光台教会^{※伝道所}は屋根の上の十字架を下からの投光器で照明し、十字架の下に取り付けたスピーカーから静かに讃美歌が流れていた。それはまさにクリスマスカードから現実に抜け出したような情景だった。今想うと南光台教会^{※伝道所}の創建時は文字通り『開拓伝道』の表現にふさわしい働きだったと思われる」²²

その後、歳月と共に地域も伝道所も発展し、1983年（昭和58）5月5日（木）、“仙台第二バプテスト教会”として「南光台キリスト教会」が誕生する運びとなります。

（文責：小林孝男）

1 『日本バプテスト連盟七十年史』99～113頁

2 資料（1989/08/00_福音のために_ポートルイト夫妻の日本宣教31年・抜粋）24頁

資料（2016/11/22_The Christian Index）

3 『献堂四十周年記念誌』4～5頁

4 同上60頁

5 週報復刻版（1963/07/21）

6 『献堂四十周年記念誌』43～62頁

7 『献堂十周年記念文集（復刻版）』（1995年発行の『献堂四十周年記念誌』43～62頁に収録）には、「733ドル弱」とあるがこれは誤植で「7336ドル弱」が正しい。1989年発行の『福音のために_ポートルイト夫妻の日本宣教31年_』の29頁には「7336ドル」とある。

8 当時は1ドル＝360円の固定相場制

9 同上61頁

10 週報復刻版（1964/08/23）

11 週報復刻版（1964/09/13、09/20）メンバーは高島正男、天野貴之、天野五郎牧師、ポートルイト宣教師の4名

12 週報復刻版（1964/09/20）

13 週報復刻版（1965/05/02）

14 土地購入だけであれば、アメリカの二人の婦人からの献金で十分である。但し、会堂建築費まで含めると献金残額と自己資金だけでは不足が生じるという意味である。

15 『南光台キリスト教会50周年記念誌』7頁

16 週報復刻版（1965/09/19）

17 『福音のために_ポートルイト夫妻の日本宣教31年_』30頁

18 週報復刻版（1966/01/23）

19 週報復刻版（1966/05/01）

20 同上

21 週報復刻版（1966/04/24）

22 『南光台キリスト教会50周年記念誌』26頁



建設中の南光台伝道所会堂 1966

福音のためならどんなことでもー仙台北伝道所開設 1980

はじめに

現在の仙台長命ヶ丘キリスト教会（旧仙台北バプテスト教会）の前身は、仙台教会を母教会とする仙台北伝道所でした。この伝道所誕生の背景には次のような状況がありました。

1970年代の日本バプテスト連盟では、「自立と協力」が大きなテーマとなりました。ミッションボードからの支援の漸減という外的要因、また国内的には、米国依存体質や戦前復帰の社会的風潮、そして戦前の教会の在り方、これらに対する反省や総括なしに、教勢拡大を目指そうとする自らの姿勢を厳しく問い直す中で、経常費自給という大きな決断をしたからです。それによって痛みを伴う機構改革や規約改正が実施されます。

伝道協力体である連盟の中心課題は開拓伝道ですが、自給化に伴う緊縮財政は、この面においても大きな影響を与えることとなります。県庁所在地や主要都市に点となる教会を生み出し、その点をつなぎ線を作り更に面へと広げていく、という従来の開拓伝道構想も困難にならざるを得ない状況となりました。緊縮財政のもと、福音の前進のために限られた貴重な資金を有効に活用する新たな方策を、全体的視野に立って模索する必要に連盟は迫られたのです¹。

そのような厳しい状況の中、1978年（昭和53）の第32回連盟年次総会において、神戸と仙台で全国支援拠点開拓伝道を実施するという理事会案が可決されました。

1. 教会員の躊躇

(ア) 仙台で全国支援開拓伝道が展開される？！

連盟宣教委員会で、「仙台市内にもう一つの拠点教会を」という驚きの案が話し合われていることを仙台教会のメンバーが知ったのは、1977年（昭和52）年9月25日の週報においてです。当時連盟宣教委員だった当教会の天野五郎牧師が、9月20～22日（火～木）に箱根で開催された連盟宣教委員会の様子を、週報の牧会通信（「市内に全国支援開拓伝道が？！」）の中で次のように速報しています。

「連盟宣教委員会で極めて重大なことがクローズアップされてきた。仙台市内にもう一つの拠点教会をつくろうという、連盟の全国支援開拓伝道案だ。今年中に調査にかかり、来年度の年会で通ったら、明後79年から実施、ということになる。母教会よりの株分け、そして5年以内に教会組織をめざす、という条件がつく。他に有力候補

として神戸が挙げられているが、東北連合強化のためにも仙台が急速に浮上してきた。

いずれにしても、海外からの援助資金を0として連盟自力で開拓伝道を行う場合、4年に1カ所（7千万から一億）がせいぜいとの試算が出されていた。果たして仙台が連盟長期活動計画中の大切な拠点教会をもう一つ持つことができるかどうか、山形、南光台両伝道所の教会形成への歩みと共に大きな夢（課題）が与えられそうなこととなった。今日の役員会での議論を経て、みなさんともごいっしょにこの夢について近く考えてみたい」

（イ）夢と躊躇

全国支援拠点開拓伝道の候補地として仙台が浮上したという情報は、教会員にとっては寝耳に水でした。天野師はいみじくも牧会通信の中で「夢」という表現をされましたが、確かに最初の段階でこの案は夢であり、多くの教会員には現実感の伴わないものであったと記憶しています。ですから具体的にどのように考え、どのように対処し、どのように決断していけばいいのかについて、教会として意思を統一していくためには十分な時間が必要でした。1977年（昭和52）11月の臨時総会、1978年（昭和53）1月の新年総会、7月の臨時総会と話し合いを重ねながら、教会員の気持ちが次第に収斂されていきます。但し、南光台と山形両伝道所の母教会として、今は自分たちの思いと行動を南光台と山形に集中的に注ぐ必要があるのではないか、という意見は当然根強くありました。さらに、全国支援拠点開拓伝道の母教会となった場合、拠点開拓伝道費用の一部を母教会が引き受けなければならないという点に関して、果たして財政的に可能だろうかと危惧する意見も残りました。

（ウ）采は投げられた

そういった中、1978年（昭和53）8月2～4日（水～金）に天城山荘で開催された連盟年次総会で理事会案が可決され、神戸と仙台で全国支援拠点開拓伝道が展開されることになりました。采は投げられたのです。このことは神のご計画であると確信し、感謝をもって全力で事に当たることこそが、私たちがなすべきことであり、大きな夢を現実にしていく道を歩むことが、私たちの信仰的使命となったのです。

翌1979年（昭和54）7月の臨時総会で、拠点開拓伝道費用6,500万円の一部を仙台教会が負担するため、当教会は連盟の回転資金から300万円借入することを決議し、10月の臨時総会では、拠点開拓伝道の担当牧師として、連盟常任理事会から推薦があった野口直樹師²の招聘を決議しました。

そしていよいよ1980年（昭和55）1月20日（日）から、仙台市北部の長命ヶ丘の借家で礼拝を開始することになります。野口牧師ご一家は4月に来仙されますが、それまでの間はポートルイト宣教師が中心となり開拓伝道の働きを担いました。

2. 戸惑う地域の中で

さて、長命ヶ丘で開始された開拓伝道は最初から躓きました。借家³で日曜日に 1、2 回集会を行った段階で、急に転居を求められてしまったのです。家主側から伝えられた理由は、家庭状況の変化（「病気になった父親と同居するため」⁴）ということですが、自分の家が「バプテスト」などという得体のしれない宗教団体の礼拝施設として使用されていることを知り、家主が不安を抱いてしまった可能性もなくはありません。借手側としては正当な手続きを踏んでいますので、自分たちの権利を強く主張するなり、賠償金を求めるなりも可能だったのですが、ボートライト宣教師は穏やかに家主の主張を受け入れ、転居先を新たに探すこととなります。

その時代はカルト的な宗教団体による訪問伝道や靈感商法が、大きな社会問題となっていた時期です。一般の方にとってはそういった宗教団体もキリスト教も十把一絡げで見てしまうでしょうから、不安な思いを抱き、拒否反応を示し、関わりを避けることが一番安全と考えるのも当然かもしれません。

このような地域の中での開拓伝道ですから、まずいかにして地域住民からの信頼を勝ち取るか、これが先決問題となります。家主からの突然の、そして契約して間もない時期の転居要請を、ボートライト師が笑顔で受け止め、穏やかに、また誠実に対応したことが、地域住民から信頼を得る第一歩となったと考えることは、決して的外れではないでしょう。開拓伝道開始の最初の段階から、地域の信頼を勝ち取る道を主は不思議な仕方で準備してくださっていたのです。

3. 福音のためならどんなことでも

新たな借家⁵を見つけ、2 月中旬に契約を交わし、3 月 9 日（日）からその場所で集会を開始します。そして 4 月 2 日（水）には野口直樹牧師、妻和子さん、母徳子さんが来仙し、また母教会から古川明・栄子夫妻、小林孝男・啓子夫妻が仙台北伝道所に派遣され、いよいよ働きが本格化しました⁶。

戸惑いや警戒心、そして無関心の渦巻く地域の中、その状況を少しずつ打ち破っていったのは、「福音のためならどんなことでもする」⁷という牧師、宣教師、伝道所メンバーの信仰姿勢でした。特に野口牧師は、ご自分のキャリア、人柄、人脈、賜物をフルに活用し、開拓伝道の業に力強く取り組まれ、たくさんの特別集会を企画・実施されました。例を上げれば、田原昭肥・米子夫妻集会、宮城学院のランデス宣教師による人形劇集会、常盤台教会聖歌隊集会、加藤享牧師集会、江藤淳一家集会、恵泉教会の恵泉会による集会、宣教団音楽チーム伝道集会、ニュートン師による集会、荒瀬昇牧師集会、胡美芳集会、尚綱学院の学院長甲原一先生集会、田村大三指笛集会、車

潤順先生集会、加来国生集会、再度の田原夫妻集会、米国伝道チーム集会、加来剛希集会などです⁸。それらの集会のたびごとに、地域にチラシを配り集会の案内を行いました。特に野口牧師夫妻とポートルイト宣教師夫妻は戸別訪問を丁寧に行い、仙台北伝道所の知名度を高めると共に、地域の中で良い人間関係を築き上げていきました。

開拓伝道を開始した年の11月には最初の信仰決心者が与えられ、翌1981年（昭和56）9月に新会堂が献堂されます⁹。そして1983年（昭和58）4月10日（日）の伝道所総会で自給を決議し、1984年（昭和59）4月30日（月）に教会組織会議を開催、「仙台北バプテスト教会」が、全国諸教会からの祈りと捧げものに支えられながら設立されることとなります¹⁰。（文責：小林孝男）

¹ 詳しくは『日本バプテスト連盟七十年史』の184頁以降に、金子純雄師が「自立と協力の内実を求めて(1971～82)」のタイトルで詳しくまとめている。

² プロフィールは資料(2024/12/05_現人神よりまことの神へ_野口師略歴)79頁、及び「翁・直樹のホームページ」参照
<https://sites.google.com/site/okinanaoki0812/home/seychelles?authuser=0> 前職・富野教会牧師

³ 長命ヶ丘 2-16-1

⁴ 週報(1980/02/17)

⁵ 長命ヶ丘 3-11-13

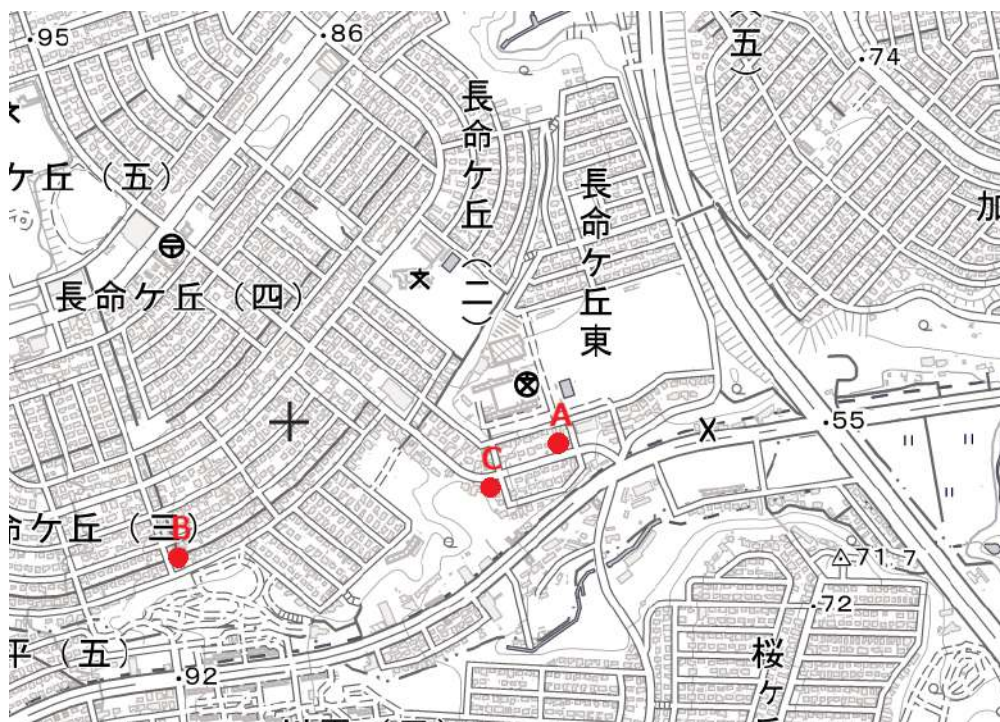
⁶ 週報(1980/04/06)

⁷ Iコリント 9:23 参照

⁸ 資料(1994/05/00_仙台北バプテスト教会の歩み_宣教十五年記念文集)

⁹ 礼拝堂 171㎡(52坪)2,300万円、牧師館 100㎡(30坪)1,200万円、敷地 909㎡(275坪)3,500万円、備品等 150万円 総費用 7,150万円

¹⁰ 資料_19940500_仙台北バプテスト教会の歩み(宣教十五年記念文集 101-115頁)



A:最初の長命ヶ丘集会所 B:次の集会所 C:会堂建設の場所

バプテスト主義と信仰的忍耐—大富伝道所開設 1992

はじめに

大富（たいとみ）伝道所開設の経過については、仙台教会が1995年（平成7）3月26日に発行した『献堂四十周年記念誌』の65頁に、「大富伝道所開設経過」¹として詳細に記録されています。執筆者名は明記されていませんが、内容から判断すると当時仙台教会の牧師だった金子純雄先生がまとめたものと思われます。それを読めば大富伝道所が開設されるまでの経緯を、ほぼ正確に知ることができます。但し記念誌の紙面の都合で、1頁にたくさんの情報を詰め込まざるを得なかったため、多少読みづらさが生じています。そこで「仙台教会の歴史シリーズ その26」では、この「開設経過」をベースにしながらか、読みやすくするためスペースを十分に取り、また何か所か文言や文章表現を変更、追加、削除、修正し、脚注を加え、伝道所開設の経過がより分かり易くなるよう工夫し、再掲載することとしました。

お読みいただくと分かりますが、伝道所を生み出すにあたっては、執事会や総会を何回も開催し話し合いを重ねています。個人の情熱を突出させて事を進めるのではなく、教会としての合意作りを丁寧に行うことを大切に、そこをスタートラインとしています。バプテスト主義を大切にする金子牧師の堅実なリーダーシップと豊かな見識をそこに感じ取ることができます。また、伝道所設立の実現のために「待つ」ことを厭わなかったトニー・ウッズ宣教師の信仰的な忍耐があったことも、私たちは忘れてはならないのでしょう。この二人の姿勢に学び、それを継承していきたいものです。

～大富伝道所開設と教会設立までの経過～

1988年（昭和63）

日本バプテスト宣教師団、仙台市内通町にあった宣教師館（ポートライト師宅）²売却、市内広瀬町とパルタウン大富に宣教師館新築。同時に大富団地入口に土地300坪購入

1989年（平成1）

●4月

ウッズ師一家、仙台教会から仙台北教会に転会³。同教会協力牧師として吉岡伝道所を担当（5月）

⁴。ウッズ師一家、市内川平からパルタウン大富の新宣教師館に転居（7月）⁵

●12月15日（金）

仙台教会定例執事会の席上、ウッズ師より大富に伝道所を設けたい旨の希望と、仙台教会が母教

会となることの打診を受ける。なお、「教会が伝道所を開設するなら、大富の宣教団所有の土地の内 100 坪を購入価格で譲ってもよい」と宣教団理事会で決議されているとのこと。この件については、同師のビジョンや願いを直接教会員に訴えて頂き、その上で検討することとする。

1990 年(平成 2)

●1 月 7 日(日)

ウッズ師、仙台教会の主日礼拝で説教（「向こう岸に渡ろう」）⁶。礼拝後、臨時執事会開催

●1 月 14 日(日)

週報の牧会通信欄⁷で、執事会で聞いたウッズ師の願いを紹介

●2 月 18 日(日)

執事会名で「大富伝道について Q&A」発表。大富伝道についての執事たちの個人的な感想や意見を牧会通信欄で紹介（1～4 月）⁸

●3 月 11 日(日)

定期予算総会開催、大富伝道を議題とせず懇談に止める。

●5 月 13 日(日)

定期報告総会開催、大富伝道について積極的な姿勢で取り組むことを確認⁹。ウッズ師の 6 月からの休暇帰国中¹⁰、既に同師宅で開かれている家庭集会を仙台教会の責任で継続することを決定

●6 月 5 日(火)

執事会、大富家庭集会責任者を伊東信吉さんに委嘱¹¹。以後月 2 回（第 2、4 金曜日）の集会を欠かさず継続。教会から平均 10～15 人参加

●6 月 10 日(日)

ウッズ師一家、1 年間の休暇帰国のため離仙

●10 月 21 日(日)

大富伝道について考える合同例会開催

●12 月 9 日(日)

クリスマス集会¹²の案内チラシと聖書通信講座案内のトラクトを大富地区に戸別配布（クリスマス集会には子供を含めて出席者 50 人を数える）

●12 月 30 日(日)

臨時執事会、新年度予算総会で大富伝道所設置に向けて具体的な提案と準備を行うことを確認（9 月 4 日、10 月 2 日、12 月 2 日及び 1991 年 1 月 6 日の定例執事会、さらにその後 2 月 3 日の拡大執事会、2 月 26 日の新旧執事会で、大富伝道所設置の段取りや準備について協議を重ねる）

1991 年(平成 3)

●3 月 10 日(日)

定期予算総会開催、大富伝道所設置を決議¹³。但し、土地取得や礼拝開始、連盟への申請の内容、時期などはウッズ師の帰国を待って協議することとする。

●7 月 10 日(水)

ウッズ師一家帰任途上、長男トレバー発病。日本帰国を一時見合わせざるを得ない、との連絡が入る¹⁴。

●9月28日(土)

伝道所予定地で10月10日開催予定の音楽伝道集会と芋煮会の案内チラシを一斉戸別配布(10月10日当日は雨天中止となる)

●11月10日(日)

大富伝道所の今後の具体的な計画推進のための教会員全員懇談会¹⁵

●12月20日(金)

大富でクリスマス集会、ウッズ師からのメッセージとトレバーの近況を伝えるビデオを鑑賞。同ビデオは22日(日)の教会の第2主日礼拝¹⁶でもプログラムに加えられ、大きな感銘を与える。

1992年(平成4)

●1月12日(日)

予算総会準備の拡大執事会、大富伝道所開設タイムスケジュールを協議

●1月19日(日)

拡大執事会での協議をもとに各会例会で意見交換

●2月5日(水)

伊東信吉さん、お見舞いのため渡米¹⁷、デンバーでトレバーやウッズ師らを励ます。この間、手紙やファックスでウッズ師と教会との交信が続く。

●2月22日(土)

新旧合同執事会、総会に提案する大富伝道所開設のタイムスケジュールと集会の持ち方の執事会案を確定。同日、トレバー・ウッズ召天¹⁸

●3月8日(日)

定期予算総会開催、4月から日曜日午後に礼拝を行うという執事会案に対し、「午前中の主日礼拝を」との意見が半数近くあり、議長裁定で本議案は執事会へ差し戻しとなる。

●4月4日(土)

ウッズ師夫妻帰仙。5日(日)午後2時から仙台北教会でトレバー・ウッズの記念会開催

●7月12日(日)

臨時総会開催、以下のことを承認・決定¹⁹

(ア) 大富伝道所での主日礼拝を最初から日曜日午前中に行う。

(イ) したがって教会は伝道所のための教会員を派遣する(派遣希望者は7月12日から8月15日までに金子牧師に申し出る)

(ウ) 派遣を申し出た人たちと8月16日に拡大執事会を開催し、諸事項を協議する。

(エ) 次回の臨時総会で今後のスケジュールを確認する。

●8月16日(日)

拡大執事会開催

●9月13日(日)

臨時総会、9名の会員²⁰と5名の家族の派遣を承認。10月4日から主日礼拝を始め、正式に仙台バプテスト教会大富伝道所を発足させること、ウッズ師を伝道所担当牧師として招聘することを決議²¹。会堂建築に至るタイムスケジュール、教会と伝道所の関係についてなど事前に整えるべき事項を確認。伝道所に派遣される執事2名の後任を選出

●9月27日(日)

礼拝で派遣式、その後愛餐会

●10月4日(日)

大富伝道所発足、主日礼拝開始²²

1993年(平成5)

●1月31日(日)

臨時総会、大富伝道所不動産取得計画並びに「教会開拓支援」を連盟へ申請する件を決議²³

●4月25日(日)

起工式²⁴

●5月9日(日)

定礎式²⁵

●8月22日(日)

伊東信吉さん、仙台教会で説教(「教会をたてる」)²⁶

●8月28日(土)

建築仕様確認

●8月29日(日)

バディ・ウッズ師、仙台教会で説教(「悲しみとなぐさめ」)²⁷

●9月8日(水)

小野建業から建物引き渡し

●9月12日(日)

献堂式の案内チラシを戸別配布(1,500枚)

●9月19日(日)

新会堂での主日礼拝開始、4名のバプテスマ式²⁸

●9月23日(木)

大富伝道所献堂式²⁹

その後、大富伝道所は順調に成長していきます。1996年(平成8)3月にウッズ師夫妻は3回目の休暇帰国をしますが³⁰、翌年帰仙後すぐ長野オリンピックでの宣教団の活動に従事する新しい任務が与えられ、大富伝道所から急遽転出することになります³¹。想定外の出来事でしたが、伝道所のメンバーは冷静にこの事態を信仰をもって受け止めました。そしてウッズ大富伝道所担当牧師の退任に伴い、牧師代務者に選任された伊東信吉さんのリーダーシップのもと、伝道所は主の群れとして豊かに養われ、益々整えられていきます。

やがて1998年(平成10)4月に、新たな専任牧師として浦肇先生を迎えた大富伝道所は、教会組織に向けて着々と諸準備(教会の信仰告白やビジョン、教会規則の制定等)に取り組み、ついに1999年(平成11)6月26日(土)に教会組織会議と感謝

礼拝を挙行し、「大富キリスト教会」の誕生に至ります³²。

(文責：小林孝男)

-
- ¹ 大富教会が2012年に発行した『伝道所開設20周年記念誌』にも、ほぼ同じ内容で掲載されている。
 - ² 市内通町2-4-11
 - ³ 週報(1989/04/23)
 - ⁴ 『宣教十五年記念文集』(仙台北キリスト教会、1994)110頁
 - ⁵ 週報(1989/07/16)
 - ⁶ 説教箇所マルコ4:35～41、週報(1990/01/14_先週の説教要旨)
 - ⁷ 週報(1990/01/14_私達の「向こう岸」とは_金子純雄)
 - ⁸ 週報(1990/01/28_向こう岸へ渡ろうパートII_渡邊真人)、週報(1990/02/25_伝えずにはおれない喜び_伊東信吉)、週報(1990/03/25_棚ボタを食べて良いのか_小林孝男)、週報(1990/04/29_大富伝道について_大山英明)
 - ⁹ 資料(1991/05/12_1990報告総会) この報告総会議案書に、1990年5月13日に行われた1989年報告総会の議事録が収録されている。その中に4番目の議題(「大富伝道所の設立について」)の審議結果について次のように記録されている。「当初、懇談事項として提出されたが、ウッズ師から現況報告と共に再度、協力の訴えがあり、意見を交わす中で、大富伝道を前向きに受け止めていく方向で検討を進めることが、賛成多数で決められ、取敢えずはウッズ師の休暇帰米中、現在同地の宣教師館で行われている家庭集会を仙台教会の責任で継続することとなった。検討の進め方や責任者の人選等については執事会に委託された。」
 - ¹⁰ 週報(1990/06/10) ウッズ師は1年間の休暇帰国のため6月10日離仙。帰国中、ゴールデンゲート神学校で伝道学を講じる予定
 - ¹¹ 週報(1990/06/17) 執事会は伊東信吉さんに大富家庭集会責任者を委嘱。その実質的な働きは、伊東信吉さんと妻公美子さんが協同で担い集会維持に尽力した。
 - ¹² 週報(1990/12/16) 大富集会のクリスマスは20日(木)にクリスマス・キャロリング、21日(金)にクリスマス・パーティー
 - ¹³ 資料(1991/03/10_1991予算総会)
 - ¹⁴ 週報(1991/07/14)、週報(1991/09/15) ウッズ夫妻からトレバリーの近況報告
 - ¹⁵ 週報(1991/11/10)
 - ¹⁶ 第二主日礼拝とは、午後5時からの英語礼拝のこと
 - ¹⁷ 週報(1992/02/02)
 - ¹⁸ 資料(2012/10/06_大富教会の皆さんへ by Woods_伝道所開設20周年記念誌) 召天日を2月23日とする資料があるが、ウッズ夫妻の記述に従う。1975年10月28日誕生、1992年2月22日召天、享年16才
 - ¹⁹ 週報(1992/07/19_大富関連)
 - ²⁰ 資料(1992/09/13_臨時総会議事録) 教会員9名の派遣者は石川卓・栄子夫妻、伊東信吉・公美子夫妻、大山英明、菊田弘子、伊東優、大山千尋、リネー・オデル。その家族として派遣された5名は、伊東翼、大山まき子、大山耕平、大山のどか、ブライアン・オデル。また、仙台北教会からトニー&マーシャ・ウッズ、ネーサン・ウッズの3名が伝道所開設メンバーとして加わり、12名のクリスチャンたちとその家族たちによって大富伝道所の歩みが始まることになる。
 - ²¹ 週報(1992/09/20)、資料(1992/09/13_臨時総会議事録)
 - ²² 礼拝場所は会堂が建築されるまでウッズ師の宣教師館を使用
 - ²³ 資料(1993/05/16_1992報告総会) 土地取得代2,400万円、会堂建築代3,600円、総計6,000万円の枠内で計画を進めることとし、半額の3,000万円を連盟に申請することとする(これはあくまでも概算)
 - ²⁴ 週報(1993/04/25)、週報(1993/05/02)
 - ²⁵ 週報(1993/05/02)
 - ²⁶ 説教箇所マルコ16:20、週報(1993/08/29_先週の説教要旨)
 - ²⁷ トニー・ウッズ師の父君。説教箇所マタイ5:4、週報(1993/09/05_先週の説教要旨)
 - ²⁸ 週報(1993/09/19)
 - ²⁹ 同上
 - ³⁰ 週報(1996/03/03)
 - ³¹ 資料(2012/10/06_大富伝道所開設経過_伝道所開設20周年記念誌)、週報(1997/03/23)
 - ³² 教会設立の経過については、資料(2012/10/06_大富伝道所開設経過_伝道所開設20周年記念誌収録)に詳しく記録されている。



仙台地区の日本バプテスト連盟加盟 4 教会

- ✦ 大富キリスト教会 富谷市日吉台 2 丁目 1-5
- ✦ 仙台長命ヶ丘キリスト教会 仙台市泉区长命ヶ丘 3 丁目 2-17
- ✦ 南光台キリスト教会 仙台市泉区南光台 5 丁目 5-5
- ✦ 仙台基督教会 仙台市青葉区木町通 2 丁目 1-5

上記 4 教会で「仙台地区バプテスト伝道協議会(SBD)」を 1985 年に結成

日本バプテスト仙台基督教会 70 年略史年表

2025/3/2 版 作成:小林孝男

教会組織以前

- 1950 W.C.グラント宣教師一家来日(8月)¹
- 1951 日本バプテスト連盟第 5 回年次総会、全国県庁所在地での開拓伝道を決議(8月)²
- 1952 グラント宣教師夫妻、仙台で開拓伝道開始(秋~1959年)。YMCA を借室、礼拝開始(11月)³
- 1953 新宣教師館で婦人会、祈祷会、CS 開始(1月)⁴
▼長崎直得牧師就任(2月~1954/3)⁵。教会用地取得(9/17)⁶。最初のバプテストマ(10/25)⁷
- 1954 ▲長崎牧師退任(3月)⁸。幼稚園開設(4/26 開園、5/1 認可)⁹ ▼関谷定夫牧師就任(6月~1957/3)¹⁰。新会堂献堂式(11/7)¹¹

教会組織以後

- 1955 日本バプテスト仙台基督教会設立(3/25)¹²
- 1957 吉岡伝道開始(2月)¹³ ▲関谷牧師退任(3月)
▼大沼上牧師就任(4月~1963/3)¹⁴。吉岡に会堂献堂、幼稚園開設(5月)¹⁵
- 1958 山形伝道所開設、名目上の母教会となる ▽同伝道所に横谷政孝牧師就任(4月~1965/10)¹⁶
- 1959 グラント宣教師一家離仙¹⁷。最初の献身者大槻國彦氏、神学校入学(4月)¹⁸
- 1960 C.S.ポートライト宣教師夫妻着任(6/21~1989/9)¹⁹。山形伝道所、会堂献堂(5月)²⁰
- 1962 仙台教会、自給独立(1月)²¹
- 1963 ▲大沼牧師退任(3月)²²。連盟内で新生運動(3~5月)▼天野五郎牧師就任(7月~1984/7)²³
- 1965 南光台に土地取得(9/15)²⁴ ▽山形伝道所、短期牧師・梅田環牧師就任(12月~1966/3)²⁵
- 1966 ▽吉岡伝道所、瀬戸毅義牧師就任(4月~1968/3)²⁶ ▽山形伝道所、光来出政治牧師就任(4月~1969/1)²⁷。南光台伝道所開設、献堂式、ポートライト宣教師同伝道所担当(7/10)²⁸
- 1967 東北バプテスト連合発足(7月)²⁹。ラルフ本城宣教師着任(8月~1969/10 南光台伝道所担当)³⁰
- 1969 ▽山形伝道所、斎藤英哉牧師就任(1月~1976/3)³¹
- 1971 T.O.カックス宣教師夫妻着任(7月~1976/3)³²。第1回バザー開催(11/7)³³
- 1972 ▽南光台伝道所、小桜俊治牧師就任(4月

~1976/2/29)³⁴。山形伝道所の実質的母教会になる決議(5/28)³⁵

- 1973 牧師館・園児室竣工(6月)³⁶。吉岡伝道所を「解消」(8月)³⁷
- 1975 教会週報・月報コンクールで特選受賞(1月)³⁸
- 1976 ▽庄司眞副牧師就任(4月~1980/4)、暫定的に3月より南光台伝道所の牧会・伝道を担当³⁹
- 1978 ▽山形伝道所、調弘道牧師就任(4月~1983/3)⁴⁰⁻¹。部会制開始(6/4)⁴⁰⁻²。連盟総会、仙台と神戸で全国支援拠点開拓伝道実施決定(8月)⁴¹
- 1980 全国拠点開拓伝道・長命ヶ丘集会所(母教会仙台教会。後に仙台北伝道所と改称)、礼拝開始(1/20) ▽同所に野口直樹牧師就任(4月)⁴²△▽庄司副牧師退任し南光台伝道所専任牧師に就任(4月~1993/3)⁴³
- 1981 山形伝道所(調牧師)、教会組織(4/28)⁴⁴。R.L.アラム宣教師夫妻着任(7月~1985/7)⁴⁵。T.R.ウッズ宣教師夫妻着任(7月~1997/3)⁴⁶。サーチライトクラブ発足(時期不明)⁴⁷。仙台北伝道所献堂式(9/13)⁴⁸。教会墓地完成(11月)⁴⁹
- 1982 教会・伝道所イースター合同賛美集会初開催(4/10)⁵⁰
- 1983 南光台伝道所(庄司牧師)、教会組織(5/5)⁵¹
- 1984 仙台北伝道所(野口牧師)、教会組織(4/30)⁵²
▲天野牧師退任(7月)⁵³ ▼金子純雄牧師就任(12月~1998/3、就任式 1985/1/14)⁵⁴
- 1985 主の晩餐と愛餐会定期実施を決議(1月)⁵⁵。B.オデール宣教師夫妻着任(3月~1998/7)⁵⁶。SBD 仙台地区バプテスト伝道協議会発足総会(9/8)⁵⁷
- 1986 仙台教会将来計画大綱決定(10/19)⁵⁸
- 1987 金子牧師、ホームステイ引率渡米(2/23~3/27)⁵⁹。L.L.ミラー宣教師夫妻着任(6月~1997/6)⁶⁰。サマースクール初開催(7~8月)⁶¹。「キリスト教学校を覚える日」の礼拝初実施(10/25)⁶²
- 1988 仙台北教会、吉岡伝道所の母教会になる(3月)⁶³。礼拝開始時間変更(4/3)。英語礼拝開始(4/10)⁶⁴
- 1990 青年伝道隊派遣開始(8月~1998)⁶⁵
- 1991 大富伝道所設置を決議(3/10)⁶⁶。金子牧師、連盟理事長就任(4月~1995/3)⁶⁷
- 1992 東北バプテスト連合信徒大会で青年会劇上演(9月、茂庭荘)⁶⁸。大富伝道所発足、主日礼拝開始、ウッズ宣教師同伝道所担当牧師に就任(10/4)⁶⁹。CS 週間小児科開設(11月)⁷⁰

- 1993 ▽小林孝男協力牧師就任式(7/11~2016/3)⁷¹。
大富伝道所献堂式(9/23)⁷²
- 1994 連盟信徒大会に青年伝道隊派遣(1月)⁷³。オリ
ーブの会発足(3/13)⁷⁴
- 1995 教会設立40周年記念賛美歌作成⁷⁵。『献堂四十年
記念誌』発行(3月)。『新共同訳聖書』採用(4月)⁷⁶
- 1996 幼稚園の日曜保育廃止(4月)⁷⁷
- 1997 子どもと一緒にの礼拝開始(4/6)⁷⁸。▽今井誠二協
力牧師就任(9月~2002/7)⁷⁹。「仙台教会の喜び
とビジョン」「執事選挙規則」制定(10/12)⁸⁰
- 1998 ▲金子牧師退任(3月)⁸¹。教会事務採用(4月)
⁸² ▽大富伝道所、浦肇牧師就任(4月~2003/3)
⁸³。代務者に小林協力牧師就任(6/14)
- 1999 ▼青木康弘牧師就任(4月~2002/7)⁸⁴。大富伝
道所(浦牧師)、教会組織(6/26)⁸⁵
- 2002 ▲青木牧師と△今井協力牧師辞任、教会員集団
転出(7月)⁸⁶。代務者に吉永馨氏就任(9/8)
- 2003 ▼山下誠也牧師就任(4月~2010/5)⁸⁷
- 2004 『新生讚美歌』全面採用(4/18)⁸⁸。グラント宣
教師の著書の翻訳出版(11/13)⁸⁹
- 2006 新会堂建設工事開始(7月)、YWCAを借室し礼
拝(7/23~8/13)⁹⁰。仮教育館で礼拝
(8/20~2007/2)及び保育(9/1~2007/2)⁹¹
- 2007 新会堂で礼拝開始(3/4)⁹²。教会ホームページ開
設(4月)⁹³。献堂式(4/29)⁹⁴
- 2010 仙台教会信仰告白改訂(3/21)⁹⁵ ▲山下牧師退
任(5月)⁹⁶。代務者に小林協力牧師就任(6/1)。
CS キャンプの集い初開催(9/4~5)⁹⁷

東日本大震災を経て

- 2011 3・11 東日本大震災発生。教会主事職新設(4月)
⁹⁸。特別委員会「チーム・キタヨン」を組織、被災地
で支援活動開始(4月~2022/12)⁹⁹。「犠牲者を
偲ぶ黙想と賛美の夕べ」開催(4/11)¹⁰⁰
▼小河義伸牧師就任(9月~2020/9)¹⁰¹
- 2012 「3・11 追悼と黙想の集い」開催(3月~2018/3)¹⁰²。
LIFE の活動開始(7/1~2019/3)¹⁰³。西南学院大
学ボランティア被災地支援活動(8月~2019/9)¹⁰⁴
- 2015 新制度「施設型給付幼稚園」へ移行(4月)¹⁰⁵。
『60年のあゆみ』発行(10月)¹⁰⁶。誕生日・受浸記
念日の週報掲載開始(10/4)¹⁰⁷。CS 幼小科朝ご
はんの会初開催(11月)¹⁰⁸⁻¹

- 2016 △小林協力牧師退任(3/31)¹⁰⁸⁻²。エアコン等設
置(3月)、会堂床改修(7~8月)¹⁰⁹。教会文書に
“兄・姉”表記不使用に(7月)¹¹⁰
- 2017 新オルガン設置(6/23)¹¹¹⁻¹。AED 設置(6月)
¹¹¹⁻²。教会フェイスブック開設(8月)¹¹²
- 2018 牡鹿で最後のお茶っこ(1/20)、牡鹿復興祈念礼
拝(3/3)¹¹³。牧師不在時の礼典執行と祝祷原則
を決議(3/25)¹¹⁴。補聴システム運用開始(6/10)
¹¹⁵。全国壮年大会 in 仙台開催(8/17~18)¹¹⁶
- 2019 サークルスクエア利用開始(9月)¹¹⁷

新型コロナウイルス感染症流行の中で

- 2020 主の晩餐中止(3/1~2021/5)¹¹⁸。緊急事態宣言
全国に拡大(4月)¹¹⁹。会堂での礼拝等休止、説
教原稿付原稿配布(4/5~5/31)。断続的に継続~
2023/7/16)¹²⁰。幼稚園休園(4~5月)¹²¹。礼拝の
インターネット配信開始(5/3~現在)¹²²。「財務委
員会だより」(8月)及び「しつじかい通信」(10月)
月刊発行開始¹²³。教会1階6カ所に止水板設置
(8月)¹²⁴。震災文集『あなたは大地の基を据え』
発行(9月)¹²⁵ ▲小河牧師退任(9月)¹²⁶。代務者
兼協力牧師に小林氏就任(10/1~2021/5)。会堂
窓改修(10月)¹²⁷⁻¹。イブ礼拝中止(12/24)¹²⁷⁻²
- 2021 感染拡大時の礼拝の守り方の指針作成(1月)¹²⁸。
会堂での礼拝等再度中止(1/17~24、3/21~5/9)
¹²⁹。宮城県と仙台市独自の緊急事態宣言発出(3
月、8月) ▼宇都宮毅牧師就任(6月)¹³⁰。暫定
形式の主の晩餐実施(6/6~2023/2)¹³¹。会堂での
礼拝等再度中止(8/8~9/30)¹³²。第32回サマー
スクール・winterバージョン開催(12/18)¹³³
- 2022 会堂での礼拝等再度中止(1/16~6/9)¹³⁴。オンラ
インいのりの会試行(2月)¹³⁵。新スピーカー設置
(6月)¹³⁶⁻¹。牡鹿支援活動(12/3)¹³⁶⁻²。会堂での
礼拝等再度中止(12/4~2023/2/5)¹³⁶⁻³
- 2023 会堂での礼拝再開(2/12)¹³⁷。礼拝次第に子ども
メッセージ復活(9/3)¹³⁸
- 2024 交わりランチ再開(1/7)¹³⁹。第33回サマースク
ール Spring コンサート開催(3/2)¹⁴¹。台湾 ZKAC
伝道隊礼拝参加(5/19)¹⁴²。「仙台教会の歴史シ
リーズ」毎週配布(9/1~2025/3/9)¹⁴³。東海林敏
雄氏より日本画「祈り」寄贈(10/20)¹⁴⁴
- 2025 教会組織70周年記念日(3/25)

- 1 資料(2005/12/21_FuneralNotice)、W.C.グラント著『ワース・C・グラント師の日本観 (*Japan with Love*)』(2004年翻訳出版) 140頁
- 2 資料(1997/09/10_日本バプテスト連盟五十年史_連盟年表)
- 3 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革)^{11/14}は金曜日だが?
- 4 同上 婦人会・祈祷会は水曜、CSは土曜
- 5 同上 前職・呉教会牧師
資料(1994/11/00_呉キリスト教史_長崎直得牧師時代) 77頁。
この資料には「1953(昭和28)新生運動を機に東北地方の開拓伝道の拠点として仙台が決定し、長崎牧師は故郷伝道として仙台に出発」とあるが、新生運動は1963年(昭和38)である。
- 6 資料(2022/05/18_旧土地台帳)、W.C.グラント著『主の息吹の中で (*A Work Begun*)』(2004年翻訳出版) 34~36頁 場所は北四番丁の現在地
- 7 資料(1955/03/25_日本バプテスト仙台基督教会員名簿)から判断すると、仙台での最初のバプテストマは1953/10/25(昭和28)、受浸者は3名(佐藤典子、丹野トモ子、アンジェラ・グラント)であり、グラント師の記憶と少し異なる。場所は広瀬川(國分登氏の証言)
- 8 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革)
- 9 資料(1954/04/13_河北新報夕刊_新しい型の幼稚園)、資料(1954/05/01_幼稚園設置認可)
- 10 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革)、資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌) 5~6、67頁 前職・福岡教会牧師
- 11 資料(1954/11/08_河北新報朝刊_献堂式)
- 12 資料(1955/03/25_仙台バプテスト伝道所沿革_日本バプテスト仙台基督教会員名簿) 教会員 39名
- 13 資料(2011/05/01_記念誌・ねむの木に寄せて) 37~38頁
- 14 週報(1984/11/11) 新卒。3月中に来仙
- 15 資料(2011/05/01_記念誌・ねむの木に寄せて) 37~38頁
- 16 資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料) 山形伝道所は連盟直属伝道所として開設
- 17 『主の息吹の中で』84~85頁 離仙理由は、高校2年(日本の学制では高校1年)になった長女ドナの教育環境保障のためである(任地変更を願い出てそれが認められた)。離仙は3月か?
- 18 『主の息吹の中で』167~178頁
<https://www.bapu-kyoukai.com/sub3.html>
1964/4~2002/3の長期にわたり、粕屋バプテスト教会の牧師として仕える。
- 19 資料(1989/08/00_福音のために_ポートライト夫妻の日本宣教31年・抜粋) 24頁、週報(1989/09/10)
- 20 資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料)
- 21 資料(1974/11/10_献堂20年の歩み) 詳細は不明
- 22 週報(1984/11/11)
- 23 週報復刻版(1963/07/07) 前職・福島教会牧師
- 24 週報復刻版(1965/09/19)、資料(1995/03/26_献堂十周年記念文集_復刻版_献堂四十周年誌収録) 61頁、資料(1989/08/00_福音のために_南光台教会とポートライト先生ご夫妻) 30頁 200坪の土地取得。資金の中心は、ポートライト夫妻が休暇帰国中に二人の婦人(ジェンキンスさんとハウエルさん)から託された献金
- 25 資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料)
- 26 週報復刻版(1966/04/17、04/24)、資料(1974/11/10_献堂20年の歩み) 新卒
- 27 週報復刻版(1966/04/17)、資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料) 前職・八幡浜教会牧師
- 28 週報復刻版(1966/07/10) 週報(1979/11/11)
- 29 週報(1967/07/02)
- 30 週報(1967/08/20)、週報(1969/10/26、11/02、11/09)
- 31 週報(1969/01/26)、資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料) 前職・若松教会副牧師
- 32 週報(1971/06/20)、週報(1976/03/07)
- 33 週報(1971/11/07、11/14) 幼稚園父母の会と教会婦人会(後の女性会)共催。婦人会の収益 33,873円は世界バプテスト祈祷日献金
- 34 週報(1972/04/02、1976/02/29) 新卒
- 35 週報(1972/05/28、06/04)
- 36 週報(1973/06/24、07/01)
- 37 週報(1973/08/19) 週報には次のように報告されている。「吉岡伝道所は瀬戸師辞任后、伝道所の機能喪失、今后も諸般の事情から『伝道所から教会形成の道』は困難、ゆえに『伝道所を解消』し、阿部家家庭集会(ご夫妻の希望意向)に切替える。家庭集会の指導はカックス師に依頼する」。伝道所の「閉鎖」ではなく「解消」という言葉を使用している。
- 38 週報(1975/01/26) キリスト教文書センター主催
- 39 週報(1975/11/16、11/23)、週報(1976/01/18、01/25、04/11、10/03) 次期伝道所牧師が決まるまで、1976/3から南光台伝道所牧師代行の任務を開始。10月から正式に仙台教会副牧師・南光台伝道所担当と位置付ける。
- 40-1 週報(1978/04/30)
- 40-2 週報(1978/06/04、07/02、10/01)
- 41 週報(1978/08/06)
- 42 週報(1980/01/20、04/06、11/02、11/09)、資料(2024/12/05_現人神よりまことの神へ_野口師略歴) 前職・富野教会牧師。1980/11に「仙台北伝道所」に名称変更
- 43 週報(1980/04/20、04/27)、週報(1993/02/21)
- 44 週報(1981/05/03)、資料(1981/04/28_山形伝道所教会組織諮問会議資料)
- 45 週報(1981/07/05)、週報(1985/07/07)
- 46 週報(1981/07/05)、週報(1997/03/23)
資料(2012/10/06_大富伝道所開設経過_伝道所開設20周年記念誌) 12頁
- 47 資料(1995/03/26_献堂四十周年記念誌) 10頁
- 48 週報(1981/06/14、09/13)
- 49 週報(1981/11/15、11/29)
- 50 週報(1982/04/04、04/11) 仙台教会、南光台伝道所、仙台北伝道所合同のイースター賛美集会。これがSBD主催イースター合同賛美礼拝となる。中断した時期もあるがペンテコステ賛美礼拝という形で2010年に復活
- 51 週報(1983/05/08)
- 52 週報(1984/04/29)
- 53 週報(1984/04/08、07/29)、代務者不明(選任しなかった?)
- 54 週報(1984/12/09) 元平尾教会牧師、前職・連盟常務理事
- 55 週報(1985/02/03) 第1主日:主の晩餐、第3主日:愛餐会
- 56 週報(1985/03/03)、週報(1998/07/26)
- 57 週報(1985/09/08)
- 58 週報(1986/10/26)、資料(1986/10/19_将来計画大綱)
- 59 週報(1986/02/09、1987/02/22、2000/12/10、2001/10/14)、資料(1995/03/26_教会の沿革) 宣教団のプログラム。1987年は第4回目。2001年は申込少数で見送り、2002年は米国同時多発テロの影響で中止。以後実施されていない。
- 60 週報(1987/06/14、07/05)、週報(1997/06/29)
- 61 資料(2010/07/11_サマースクール学習会資料)、資料(1995/03/26_教会の沿革) 障害児と家族向けのプログラム
- 62 資料(1987/02/22_1987予算総会)、週報(1987/10/11)
- 63 週報(1988/03/13)、資料(1988/03/06_1988予算総会)、週報(2016/04/03) その後2016/3/31に仙台長命ヶ丘教会吉岡伝道所は閉所されている。
- 64 週報(1988/04/10)、資料(1988/03/06_1988予算総会)
- 65 週報(1990/07/29)、週報(1998/08/23) 八戸、三沢、山形、酒田、郡山等へ派遣
- 66 資料(1991/03/10_1991予算総会)
- 67 資料(1997/09/10_日本バプテスト連盟五十年史_理事一覧)

- 1991年2月の第43回連盟総会で選出
- 68 週報(1992/08/30)「3本のローソク」上演
- 69 週報(1992/09/20)、週報(1991/03/17)
資料(1991/03/10_1991 予算総会)
- 70 資料(1993/05/16_1992 報告総会) 毎週水曜日
10:00~11:30
- 71 週報(1993/05/23、07/11)、資料(2016/03/20_2016 予算総会)、週報(2020/09/27、10/04) 5月の総会で招聘決議。本人も受諾、就任式前から協力牧師として働きを開始
- 72 週報(1993/09/19)
- 73 週報(1994/01/02)「神の道化師」上演
- 74 週報(1994/03/20)、資料(1994/03/13_1994 予算総会)
- 75 資料(1995/00/00_主のみ名を伝えんハレルヤ) 作詞:金子洋子、作曲:横山理香、『新生讃美歌』に収録(362)
- 76 週報(1995/03/19)、資料(1995/03/12_1995 予算総会)
- 77 週報(1995/12/17)
- 78 週報(1997/04/06)、資料(1997/03/09_1997 予算総会_子どもと一緒にの礼拝) 礼拝プログラムに児童説教を入れる。2020/3まで継続。その後コロナの影響で中断。2023/9/3から子どもメッセージという名称で復活
- 79 週報(1997/09/28) 厳密な就任日は?
- 80 週報(1997/10/12)、資料(1997/10/12_臨時総会資料)
- 81 週報(1998/03/29)、資料(1997/04/06_執事会へ牧師辞意表明)
- 82 週報(1998/03/29)
- 83 週報(1998/03/29)、週報(2003/03/16)
- 84 週報(1999/04/04)
- 85 週報(1999/06/20)
- 86 週報(2002/08/11)、資料(2002/10/06_青木牧師辞任の経緯に関する報告書)、資料(2002/11/03_臨時総会_協力牧師発言)
- 87 週報(2003/02/09)、資料(2003/02/02_臨時総会)、週報(2003/04/06) 元長住教会牧師、前職・連盟常務理事
- 88 週報(2004/04/18) 部分的には1987/9頃から使用
- 89 週報(2004/12/26) 『主の息吹の中で/ワース・C・グラント師の日本観』。原書は *A Work Begun* と *Japan with Love*
- 90 週報(2006/07/16、07/23、08/20) 青葉区上杉 2-1-10
- 91 週報(2006/08/20)
- 92 週報(2007/03/04)
- 93 週報(2007/04/08)
- 94 週報(2007/04/29) 午後4時より。約200名参列
- 95 週報(2010/03/28)、資料(2010/03/21_2010 予算総会)
- 96 資料(2010/03/21_2010 予算総会)、週報(2010/05/30)
- 97 週報(2010/08/29、09/12、09/26) 対象は小学1~2年生の卒園児とその家族(在園児や弟妹も含む)。パーベキュー、キャンドルサービス、ドラム缶のお風呂、テントで宿泊等
- 98 週報(2011/04/03)、資料(2011/03/13_2011 予算総会) 主事に向井田洋氏を選任
- 99 週報(2011/04/10)、資料(2020/09/11_あなたは大地の基を据え)
- 100 週報(2011/04/10)、資料(2011/04/11_黙想と賛美のタペチラン)
- 101 週報(2011/09/04) 前職・恵泉教会牧師
- 102 週報(2012/03/11)、資料(2012/03/11_追悼と黙想の集い_チラシとプログラム)、週報(2019/03/10) 2019年から集いは開催せず、3/11直前の日曜日に3・11記念礼拝を行う形式に変更
- 103 週報(2012/06/24)、週報(2019/03/24)
- 104 週報(2012/08/19、09/02)
- 105 週報(2014/10/05)
- 106 週報(2015/10/18) この記念誌27~31頁の年表には正確さを欠く部分があり、参照する際は十分注意が必要
- 107 週報(2015/09/13)
- 108-1 資料(2016/05/08_2015 報告総会)8頁
- 108-2 週報(2016/03/27)、資料(2016/03/20_2016 予算総会)
- 109 週報(2016/04/03)、資料(2016/03/20_2016 予算総会)、週報(2016/07/03)、資料(2016/06/26_臨時総会) 園舎にエアコン、会堂にエアコンとファン設置。会堂床はコンクリート打ちっぱなしであったがフローリングに改修
- 110 週報(2016/07/10)
- 111-1 週報(2017/06/25)、資料(2017/02/26_臨時総会) ヨハネス社製・エクレンシア T-150。第4代目のオルガンになる。初代はストップ付き足踏みリードオルガン、2代目は電子オルガン・カワイ C50 で1972/3設置、3代目は1992/4設置(製品名不明)
- 111-2 週報(2017/06/11)
- 112 週報(2017/08/13)、資料(2018/05/20_報告総会資料)18頁
- 113 週報(2018/01/14、03/04、04/01)
- 114 資料(2018/03/25_2018 予算総会)
資料(2018/05/20_2017 報告総会)
- 115 週報(2018/06/10) FMラジオ式
- 116 週報(2018/08/12) 会場は尚綱学院中高礼拝堂、実行委員長は向井田洋氏
- 117 週報(2019/09/08) 情報共有ツールの変遷は、サイボウズ Live→freeml→サークルスクエア
- 118 週報(2020/03/01)
- 119 資料(2020/04/16_緊急事態宣言) 4/7に一部の地域に発出された緊急事態宣言が、4/16に全国に拡大される。宮城県他39県は5/14に解除、全国で解除されたのは5/25
- 120 週報(2020/04/05)
- 121 週報(2020/04/19)、週報(2020/05/10)
- 122 週報(2020/05/03) Zoom利用
- 123 資料(2020/08/09_7月会計報告_財務委員会だより付)
資料(2020/10/11_しつじかい通信#1)
- 124 週報(2020/07/12、08/23) 豪雨による雨水流入防止
- 125 資料(2020/09/11_あなたは大地の基を据え)
- 126 週報(2020/09/27)
- 127-1 週報(2020/10/18) 雨の吹込みがあるため、窓の外に新たに窓を設置し二重窓にする。
- 127-2 週報(2020/12/20)
- 128 資料(2021/01/10_しつじかい通信)
- 129 週報(2021/01/17、03/21、04/11)
- 130 週報(2021/05/30) 前職・岐阜教会牧師
- 131 週報(2021/06/06)、週報(2023/03/05)
- 132 週報(2021/08/08、08/22、08/29、09/05、09/12、09/19、09/26、10/03)
- 133 週報(2021/12/12)「親子で楽しむコンサート」
- 134 週報(2022/01/16)、週報(2022/06/12)、週報(2022/12/04)、資料(2022/12/02_掲示板告知_オンライン集会へ移行)
- 135 週報(2022/02/06)、Zoom利用
- 136-1 週報(2022/06/26)、資料(2022/06/12_しつじかい通信)
- 136-2 週報(2022/11/27、12/04)、資料(2022/12/03_牡鹿支援)
- 136-3 週報(2022/12/04)、資料(2022/12/02_掲示板告知_オンライン集会へ移行)
- 137 週報(2023/02/12)
- 138 週報(2023/09/03) 2020/4/5より礼拝次第から削除の児童説教を、「子どもメッセージ」と名称変更して復活させる。
- 139 週報(2024/01/07)
- 141 資料(2024/03/02_コンサートチラシ)
- 142 週報(2024/05/19)
- 143 週報(2024/09/01)
- 144 週報(2024/10/20)

「仙台教会の歴史シリーズ」の編集作業終了にあたり

はじめに

2024年（令和6）9月から約半年間、毎週「仙台教会の歴史シリーズ」をお読みいただき、有り難うございました。この歴史シリーズは、あくまでも私的な理解と解釈に基づき教会の歴史を振り返りまとめたものです。もちろん十分に注意を払い、様々な資料を参照し作業を行いました。恐らく間違いや不正確な部分もあると思います。それはひとえに私の見識不足と不注意が原因ですので、なにとぞご容赦ください。寛大な心で間違いをご指摘いただければ、教会が今後公式に歴史をまとめる作業を行う際にきっと役立つことでしょう。

歴史シリーズや略史年表をまとめるにあたり、こだわったことが一つあります。それは脚注を設けることです。別に学術的な文章ではありませんので、そんなに大袈裟にする必要はないのですが、書かれている内容が正しいかどうかを、誰でも検証できるようにしたいと考えました。というのも、この70年の間に何種類かの仙台教会の年表がまとめられていますが、印刷物としてそれらが目の前に登場すると、どうしても全て正確であるという先入観をもって読んでしまいがちです。しかし、今回分かりましたが、実は丁寧に調べると案外間違いが含まれていたりします。脚注があれば、書かれていることが間違いがないかどうか、何を根拠にこう書いたのかを、誰でも自由に点検できますので、後の時代の人たちが教会の歴史を振り返り吟味する際に助けになるのではと考え、脚注にこだわった次第です。

1. 「仙台教会の歴史シリーズ」は「原表」作りの副産物

仙台教会の70年略史年表を作ってみようと思いついたのは、2022年（令和4）の春です。略史作成のためには、70年の歴史を「全体的に」「できるだけ詳しく」「できるだけ正確」に把握することがまず必要だろうと考えました。そこで略史の元となる「原表」を作る作業から取り掛かりました。可能な限り正確さを保つため、根拠となる資料をはっきりさせることを大切にして作業を進めましたが、その際大活躍してくれたのが週報でした。歴史資料としての週報の価値に目が開かれたのはその作業によってです。現在の週報の「北四番丁通信」は様々な方が執筆されていますが、以前は「牧会通信」として牧師がほぼ毎週執筆していました。当然そこには、教会に関わる種々の出来事や情報が盛り込まれることとなります。それが今回大いに参考になりました。

そういった過去の週報や諸資料に目を通しながら、教会の出来事を年ごとの一覧表にする作業に、かなりの時間と労力を費やすこととなります。その作業の中で、これまで知らなかった教会の出来事を発見したり、忘れていた教会の大切な出来事を思い起こしたり、教会の皆さんに知ってもらいたい事柄に出会ったりということを経験しました。それらは一覧表にメモするだけではとても収まり切れませんので、文章化してまとめたわけです。それが皆さんにお読みいただきました「仙台教会の歴史シリーズ」です。いわば「原表」作成作業の副産物のようなものです。

本来なら仙台教会70年の歴史全体をカバーする歴史シリーズになればよかったのですが、そのためにはもう1年早く作業をスタートしていなければなりません。そこまでの計算が必要だったなどは夢にも思いませんでしたので、中途半端に終了することになってしまいます。申し訳ございません。

2. 頭の中に残されているテーマは四つ

もう1年早く作業を始めていれば、以下の四つのテーマは「仙台教会の歴史シリーズ」の中に必ず含まれることになったでしょう。

(ア) 青木康弘牧師辞任と教会員集団転出

青木康弘牧師が一言では言い表せない事情で辞任し、牧師を支持する教会員が集団で転出するという出来事が起きたのは、2002年（平成14）のことです。その経緯は「報告書」にまとめられています。ただ、それを読んでも私はなかなか実情を十分に理解できずにいます。というのも、当時私は協力牧師という立場ではあったのですが、職場で起こった深刻な問題に職務上対処する役職の時、厳しい判断をせざるを得ない場面にも立たされ、丸1年ほど礼拝に出席できない状態で、申し訳ありませんでしたが、教会の事柄に関わる精神的な余裕が全く無かったからです。

牧師辞任と集団転出という「大事件」のそもそもの原因は何であったのでしょうか。個人の資質や人間関係の問題なのか、教会観の違いや組織の在り方の問題なのか、他に何か根本的な問題があったのか等、冷静に、客観的に、歴史としてじっくり考察するチャンスでしたが、時間的に間に合いませんでした。

(イ) 新会堂の建築

前述の「大事件」で深い痛みの中にあった仙台教会の群れを、新しく牧師に就任してくださった山下誠也先生が、温厚さと毅然とした姿勢をもって牧会し、癒しのために丁寧な心配りをしてくださいました。2003年（平成15）から2010年（平成22）までのことです。そしてその間に新会堂建築という大事業が実施されました。建築は2006年（平成18）に始まり、翌年献堂式を迎えます。新しく教会の建物を建てるという大事業の背後には、たくさんのドラマがあったはずで、それらを発掘する作業は意味あることでしょうし、その内容を後世に伝えていくことは大切であると思います。残念ながらその作業も今回は間に合いませんでした。

(ウ) 東日本大震災の中で

その後仙台教会は、再度専任牧師不在の時期を迎えます。そしてその最中、2011年（平成23）3月11日（金）に東日本大震災が発生しました。大震災の中で仙台教会が、教会としてどのように歩み、働き、主の僕としての役割を担ったのか、しっかりと歴史に刻んでおく必要があります。しかし、その作業に着手するには時間が足りませんでした。

(エ) コロナ時代を迎えて

主の晩餐中止！礼拝堂に会しての主日礼拝中止！イブ礼拝も中止！こんな信じられないことが2020年（令和2）に起こりました。新型コロナウイルスが猛威を振るい、私たちの信仰生活にも容赦なく襲い掛かってきたのです。その厳しい状況に、私たちの教会がどのように立ち向かい対応したのか、その歴史と経験はしっかりと継承されていかなければなりません。

思いつくだけでもこれだけ大きなテーマが残されています。さらに精査すれば、あと幾つか仙台教会の歴史としてまとめておくべきテーマがあるはずです。教会組織70周年記念日には間に合いませんでしたが、これらのテーマについて1、2年のうちに、何らかの形でまとめ歴史に加えていく取り組みが必要なのでしょう。単なる使命感だけではなく、趣味的な好奇心や遊び心をもって、そして何よりも喜びの心をもって取り組んでくださる方が現れることを期待しています。

3. 歴史資料としての週報の価値に目覚めよう

毎週、多くの方々の共同作業を経て発行されている週報は、教会員が情報を共有するツールとして不可欠なものです。同時に週報は、教会が歴史を振り返る際に最も手助けをしてくれる重要な一次資料となります。このことを私たちは十分に認識して、週報の構成やその中身を再吟味する必要があります。

例えば、教会の事柄に関しての様々な情報は牧師のもとに集まりますし、より正確な情報を把握できる立場にあるのも牧師です。それらの情報を発信するチャンスを、教会は牧師へもっと与えるべきではないのでしょうか。週報の「北四番丁通信」は、現在第1主日のみ牧師に執筆をお願いしています。そのことによって、月に3~4回は教会員たちが自分の信仰的な思いや考えを表現する機会を得ています。これはバプテスト主義の教会としては確かにメリットですが、牧師からの牧会的思いの発信や、教会に関わる情報の発信の機会を少なくしているという点で、大変大きなデメリットとなっています。妥協策として、牧師には奇数の主日の「北四番丁通信」を執筆していただき、教会員は偶数の主日を担当する、などということを考えてはどうでしょうか。

別な方法も考えられます。週報4頁目の上段部分（「仙台教会の喜びとビジョン」と集会案内）は、毎週掲載する必要もないでしょう。第1主日を除きそのスペースを牧師に提供し、コラム欄として自由にご使用いただくことにすれば、牧師も時に適った情報提供や信仰的な思いの発信を行い易くなります。後々になってそういったものが、歴史を振り返る際に案外役立つのです。

おわりに

「仙台教会の歴史シリーズ」をまとめ上げるにあたり、多くの資料を参照しました。脚注に示した週報や資料は勿論、「現表」や略史年表、歴史シリーズ本文もデータとして保存してあります。もし興味をお持ちの方がおいででしたら、喜んで提供いたします。準備の都合上5月以降になってしまいますが、お入り用の方は遠慮なくお声がけください。ただその際、大変恐れ入りますがUSBメモリー（4GB以上）を各自ご準備いただければと思います。よろしく願いいたします。

最後になりますが、仙台教会の歴史を振り返る作業のために資料をご提供くださった関係各位、また校正の労を執ってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。有り難うございました。

2025年3月9日 教会員 小林孝男

